

珠魚之養  
田中市郎

Y

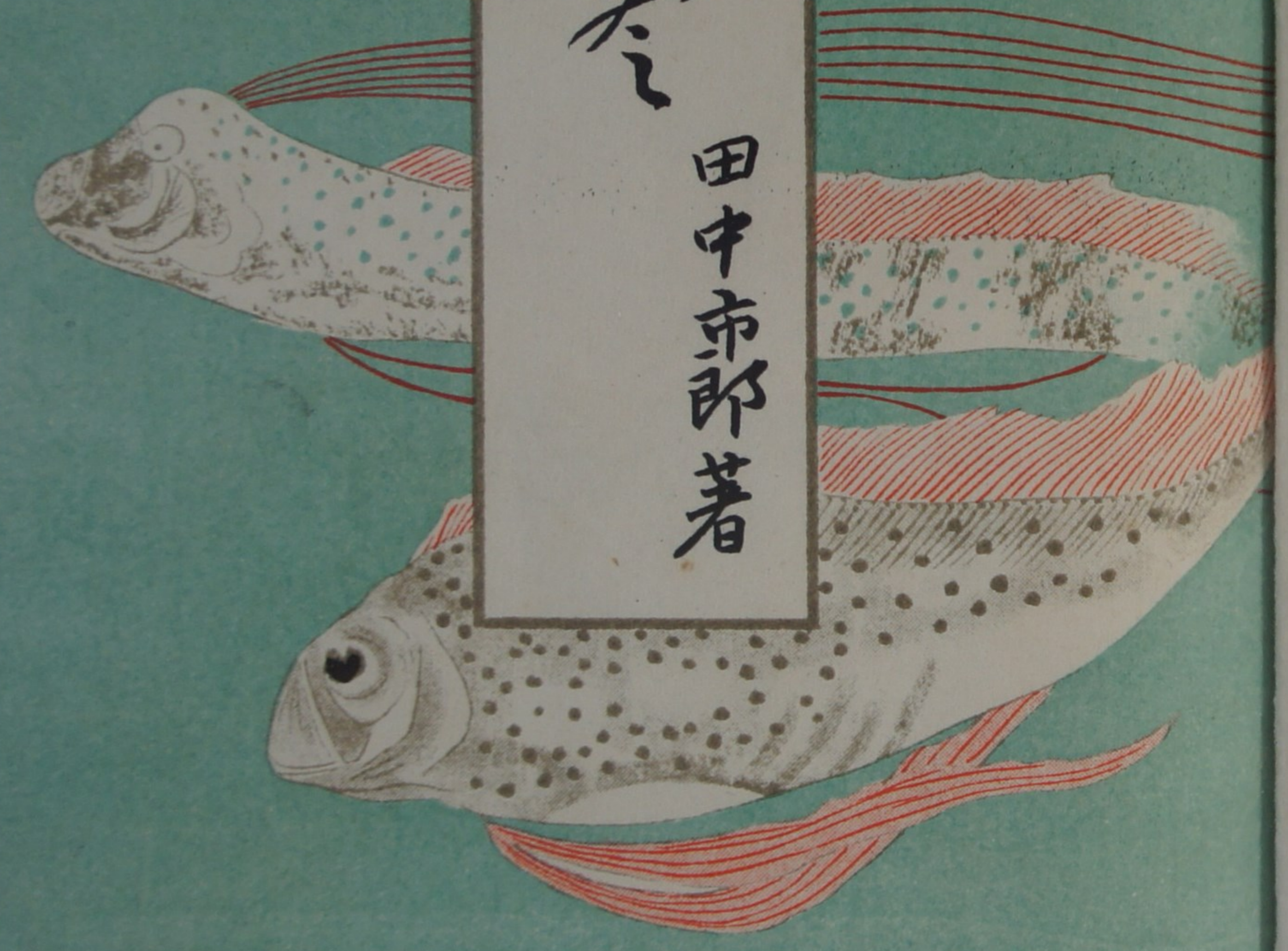
Y487  
10

L. 302  
1



珠魚之卷

田中市郎著

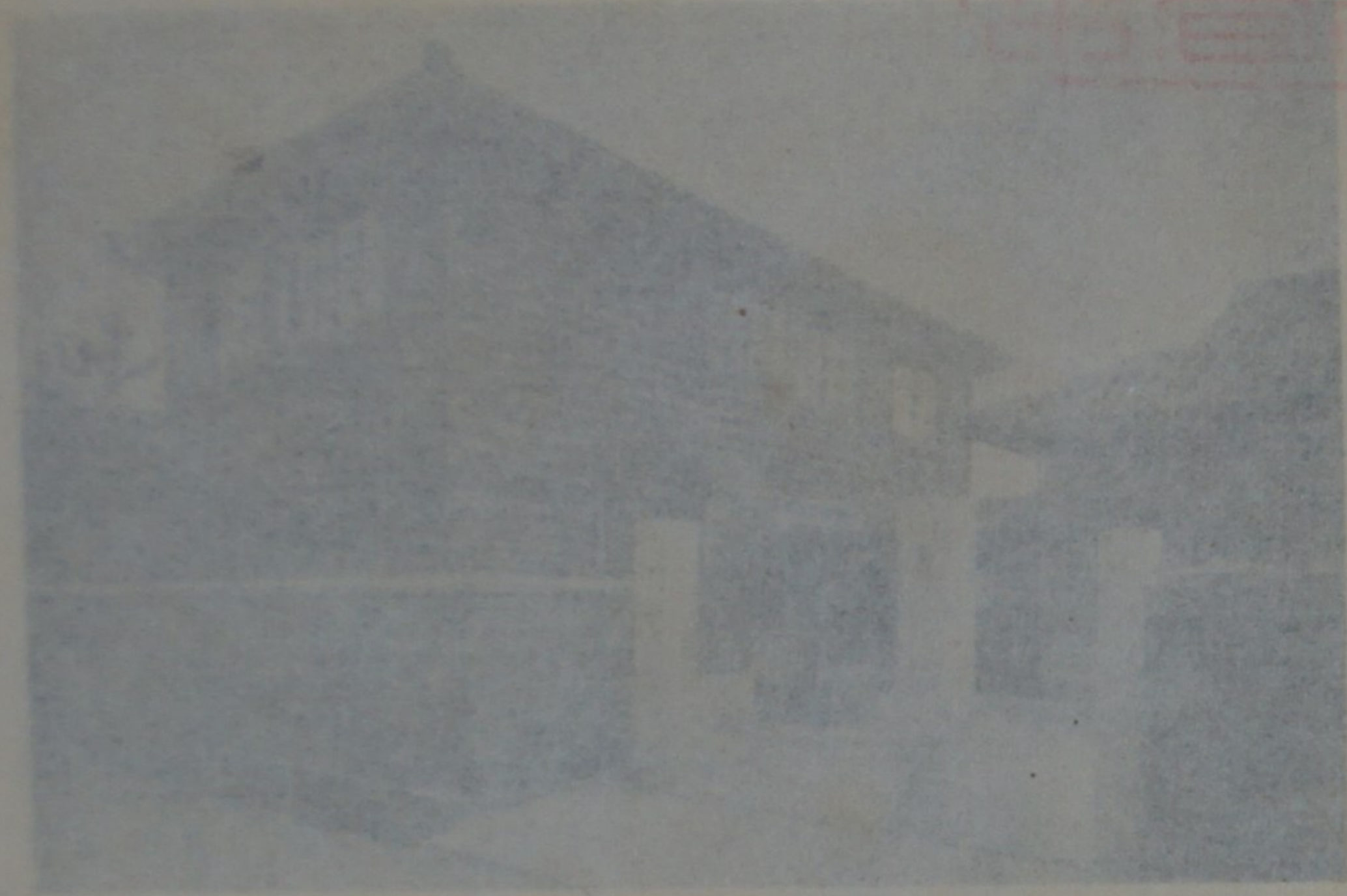


34044

萩市立図書館

L. 4  
1  
1204

立  
本  
館  
藏



立  
本  
館  
藏  
昭 25 12 23  
教圖書館

L. 4  
1

立  
本  
館  
藏

L. 402  
1  
9204

立教大學圖書印



立教  
昭和 25 12 23 和  
教圖書館

L. 402  
1



萩文化叢書第二卷  
珍魚の譽



## 序 文

大正九年余は萩中學校々醫となり、衛生部主任としての先生を知つてより、相助交遊二十七ヶ年、先生は余にこりて忘れ難い知友であつた。先生の篤學振りには夙に定評があつたが學校をやめられてより益々世に著はれ、眞に衆人景仰の的であつた。二三の例を擧ぐれば略歴中にもある通り、先生は永年風雨を厭はず、萩の魚市場へ早朝から出かけて珍魚の發見に努められ、好資料を得るに學校知巳の處へそれを持參して解説せられるを常とした。又多大の私費を投じて田中博物館を建て、著名な博物陳列場にも見られない數多の珍標本を集め、萩の一名所を造られ、或は明倫校へ映寫機を寄附せられたこともある。學界に對する是等先生の功勞は漸次認められ、幾多の表彰をうけられるに至つた。

皇太子殿下が大正十五年萩へ行啓遊ばされた時には、先生が越ヶ濱明神池の邊りて、陳列物の御説明を申し上げた。其後再々皇族方の御來萩の砌、笠山等の御説明役を勤められた。昭和二十二年陛下再び萩へ行幸遊ばされた際は、先生已に界を異にして居られたが、先生の遺された珍奇の標本は行在所内へ陳列され、天覽を忝うした。是等の榮譽は余が本書を「珍魚の譽」と名づけた所以である。

余等が「萩文化」を發刊せんとした時、豫め先生に其舉を語り、寄稿を願つた

所、快諾を與へられ、同誌が廢刊に到るまで八ヶ年、殆んど缺かさず執筆を續け、該博な知見を發表し、世を裨益せられた。然し御令閨の談話によつても、尙他に先生が世に遺して置き度く思はれた雲丹の研究等幾多の事項が存して居たことが知らるゝので、この点は誠に學界の痛恨事である。

萩の至寶である先生が亡くなられてより、萩には急に珍魚奇品の出現がなくなつた。實に心淋しい限りであるが、今回落成した公民館の特別室に萩の誇として先生の博物標本が陳列せられ、且つ本書の發行によりて永くその遺芳が傳へらるゝのは、せめてもの心遣りである。

本書は博物學の諸方面に涉つて明快なる解説を與へられてあるので、一般人士にも興味ある讀物として推奨するが、魚類に就て最も多く記されてあるので、教員及水産關係の方々には特に御一讀をお願いする。

昭和二十五年十二月

凡例

- 一、本書は萩文化叢書の第二巻として萩文化協會より發行した。
- 一、本書の内容は田中先生が「萩文化」に寄稿せられたものを主とし、昭和八年より昭和十三年までの萩の長州新聞と防長日報に掲載せられた先生の談話等を加へたものである。
- 一、本書の記事は發表年月順によらず、魚、蛇、蟹、海綿、龜、獸、貝、虫、鳥、植物、雜の順序に同類のものをまとめて記載した。
- 一、同一題目に就ての記事が數ヶ所にある所があり、編者に於て出来るだけ取材に注意したが、著者自身編輯のやうに都合よく行かず、文意少しく重複した所を生じた。
- 一、表紙は先生と親しくせられた河村松溪画伯の揮毫で、先生得意の二種の龍宮の使と龍宮の姫とを配してある。
- 一、口繪上は田中博物館の全景で、下は同館内部の一景である。
- 一、先生の御寫眞を口繪に加へ度く思つて居たが、本文中にそれが再々見られるので、割愛することにした。
- 一、先生の略歴は愛弟子で、元萩文化協會副會長、日本學士院囑託、日本大學醫學部講師である田中助一君にお願ひした。
- 一、病中を押して努められた松溪画伯、繁忙中執筆された田中君、口繪作製に助力せられた角川政治氏に謝意を表す。

編者 記

目次

見島沖でとれた世界的稀有のえい	一
素晴しく大きい糸巻えい	一
白小判鮫	二
牛えい及赤えいに就て	五
七十餘個のさゞえを咬み割つて喰ふた斑鳶えい	五
兩頭の油鮫	五
三百貫餘の頬白鮫	五
型破りの多數の胎兒を生む鱧を見て	六
稀有の大鱧甚兵衛鮫を捕獲	七
神樂鮫を得て原始的の鱧全部備る	七
珍奇な鮫の卵	七
世界的珍魚「龍宮の使」	八
魚博士の立派なと驚く萩の珍魚龍宮の使	八
學者から懇望された珍魚の寫眞	八
待望の珍魚「龍宮の使」の完全なもの始めて入手	九
魚博士が大學でも見られぬ珍魚として懇望さるゝ龍宮の姫	九
稀有の奇魚「天狗の太刀」	一〇
美しい菱貝、別名女神の花籠	一〇
巨大なる水草魚等に就て	一一
萩の沖合で大章魚を捕獲	一一
まむしだこの正射につきて	一二
珍魚川アナゴ	一三

奇抜で呑氣な生活をなすカクレ魚	一七
黒太刀カマスに似た珍魚	一七
稀有の深海魚ソコホーボーミ怪魚驚笛	一七
鉄魚は鮔と金魚の雜種	一八
萩魚市場に揚つた學界の珍「草アジ」	一八
雪振袖魚と鮭ガシラ	一九
珍奇な蝦	二〇
珍味の蝦新ネフロツプス	二〇
脚の根元より産卵する蝦	二〇
田中博物館に寄贈されたイヌゴチの標本	二〇
貴重な魚の化石リコブテラ	二一
數百萬年前の見事な魚の化石	二一
長さ約五尺の大馬鹿烏賊	二二
世界最大四十五貫の大ワイカ	二二
毎年三月萩の川で父親が造巢育兒の勞を執る魚の話	二三
萩の白魚は何時頃何所で生れるか	二三
最近萩沖で捕れた記録の大鯨につきて	二四
雄の腹で卵がかえる萩近海の魚六種を得て	二五
卵を口内に頬張つてかえる迄斷食する萩近海の魚五種	二五
不可解なるタナゴの胎兒の發育	二六
甚しく遠ふ萩の魚の方言	二七
魚博士が始めて見た喜ばれた二種の魚、鮫肌モンガラと風來カマス	二七

肋骨が外に表はれる稀有の深海魚長太刀カマス	二八
酷似する二種の河豚(猛毒無毒)	二八
甚大な熱帯魚カラキワシを捕獲	二九
型破りの二種の大海蛇	三〇
蛇が鱧の肝を食ふた報告を蛇學者はさう感じたか	三一
年頭對話「蛇」	三二
日本海から大松葉蟹	三四
須佐沖に日本一の手洗鉢海綿	三五
復又捕れた手洗鉢海綿	三六
見島の發動船が捕獲した大海龜	三六
珍妙な石龜	三六
復も萩に五色の石龜	三七
萩で捕れた世界的珍龜及石魚ミ「くさがめ」の別に	三七
つきて	三七
三度も萩近海に漂着した珍無類の甲を有する熱帯性「をさ龜」	三八
田中博物館に寄贈された兒犬位の珍らしいラッコの兒	三八
動物學上より見た馬	三九
我博物館内の大東亞の動物	四〇
滑走の上手な獸コベゴ (一)	四〇
カハウソの肝の偽物を見て	四〇
稀有の蝙蝠を生捕りて	四一
内地で最初の北大耳蝙蝠	四一

我博物館内の大東亜の動物 人間を生捕るシヤコ貝	(二)	四二
萩沖の生ける化石長者介	四二	四二
萩で見つけた我國最初の鯨のじょう蟲	四三	四三
憂曇華から出た益蟲を育てた實驗談	四四	四四
我博物館内の大東亜の動物 蟲は思はれぬ木の葉蟲	(三)	四五
中國では最初の「姫ハルゼミ」を萩で捕獲	四五	四五
北海の珍鳥シノリ鴨	四六	四六
精巧無比なエナガの巢を得て	四六	四六
鷹の名をもつ鷲を捕獲	四七	四七
大東亜海の珍鳥二種、大極樂鳥と犀鳥 男装した牝雉	四七	四七
純白且つ最大の白鷗を捕獲	四八	四八
余が餌養する黒鶴並に鶴閑談	四八	四八
萩にしかない大キジカクシ	四九	四九
萩に於ける萩の自生地と萩の薄さの鑑別	五〇	五〇
誤まられたる萩のアヅサ、實はキサ、ゲ	五一	五一
萩に珍らしいカラ松茸を發見	五一	五一
クサマキに就て	五二	五二
日本一の大せんだん並にセンダンミ梅檀との別に 就て	五三	五三
世界中に知られなかつた野齋が見島村に産する	五三	五三
世界的にも稀なる林相を有する志都岐山	五四	五四

見島沖でとれた  
世界的稀有のえい

一昨々年の海軍記念日に見島の沖で頗る珍妙な大なるえいが捕獲された。普通のえいの肌には鱗がなくて滑かであることは誰もよく知つて居るこゝであるが、此えいは不思議にも全身に菊花に似た小さな鮫粒を密布し、尾も亦赤えいの鞭状をなすのミ大違ひで、幅広く稍々鱈の尾に類似し



図一第  
鋭き毒剣のあるところは兩者同様である。長さ約一間幅約四尺ミ云ふ相當大なるものであつた。これに稍々似たものに印度及南洋方面にトリゴンセツフ

笠山ミ指月山	五四
二拾種に近い萩の歸化植物	五七
「救饑提要」食物略解	五七
誤認される萩地方の俗説	五九

田中市郎先生略歴



エンミ呼ぶ一種のえいが居る。此えいの皮膚が全部粒々の鮫肌であつて、所謂日本刀の鮫つかの鮫皮である。此えいの皮が昔は板に貼り付けられて我國に送られ日本刀を飾るに用ひられたものである。印度の博物館には此えいの標本が陳列され、夙に學界に知られて居るが今こゝに紹介する珍妙なえいは未だ學界に知られぬ珍物のためか、我國の魚學者には之を知るものがない。私はかゝる珍物は容易に得難いものと思ふから、藥液約一石を入るべき容器を新調しフォルマリン漬として滿二年間貯藏し、後乾燥せしめて自分の博物館に陳列した。(萩文化昭和十三年六月号)

素晴しく大きい糸巻えい  
と白小判鮫

廣東陥落の日に萩沖で漁夫十八人で辛じて鮫に載せたミ云ふ頗る巨大なる大えいが捕れた、幅二間半、口の横幅三尺五寸もあつた、此ものは蝙蝠えいと呼ぶ方言がある位に普通の赤えいとは外形が相違し、頭の兩側より耳形に長方形の長き鰭が突出し、胴の兩側は鳥の翼の如く擴がり可なり長い尾を有するが赤えいのやうな毒剣は有たない。本名は絲巻えいと呼び、えいの仲間では最大に成長するもので、漁人が往々六疊敷のえいとか、八疊敷のえいとか、實際に之を見た或は捕獲したこゝがある云ふのは、此えいを誇張して云ふのである。此の



魚の側に集つた魚屋連中はこんな大なるものは始めだのうと語り合つたが、私の博物館内にあるのは一昨年宇多郷の大敷網で捕つたのであるが、之より尙大きくあつた。嘗て東大の水産科の學生が私の所有する頭部の標本を見て、所々で此えいを見たが、こんな大なるものは見たことがない云ふて撮影したことがある、それは兩眼の距離約四尺で其間が口であるから、口の大なることに於ては魚では比類稀なるものである。

此大えいの大なる口の中に白小判鮫と呼ぶ珍魚中の珍魚が二尾吸着して居た。元來小判鮫は一名「小判頂き」とも呼ぶ程に、頭部の背面に有する小判形の吸盤で他の大魚に吸着して自分では泳がぬ、何時も便乗する横着物である。私が萩近海で得た小判鮫は四種類あるが、此白色の白小判鮫と呼ぶものは夙に入手、稀なものとなつて居る、二ヶ月許前大阪の魚市場に、之が発見されたミ、態々寫眞まで掲げ大朝新聞に掲載したことがある位である。此魚は何んぞ呑氣なものではありませんか、泳ぐ苦勞もなく食を漁り行く心配もない。其吸着力の強いことは、嘗て生魚につきて實驗したことがあるが、水六七升位容れたバケツに其頭を吸着させたものは、其尾を握りて其水を容易に提げ歩くことが出来る程である、南洋方面では或種の小判鮫に綱を結びつけてベツカウ龜(タイマイ)を捕へる云ふ話があるが、本當であらう。

が黄色であるのが目立つ、普通一二尺の間で、三尺もあるのは滅多にない。然るに外形之に酷似して、毎年秋の頃から初冬にかけて萩沖で、胴幅六尺乃至七尺に近い(俗に疊二枚位に云ふ)一尾三四十圓の高價を唱へる偉大なものが捕られる。(年々稍々小さくなり又數も減る傾がある)これは萩人の口には入らぬ、皆水詰にして多くは廣島方面に送られる、本年最高價格の一尾五拾圓で幅二米余であつた、随分高價のやうであるが、此魚を殊に好む地方がある、それに向き賣り捌くのである。古來萩地方では此大なる赤えいは其尾が長大且つ美しき放射狀の大小無數の刺が規則正しく散在するので、之を洋杖に利用するものもある程だが之を普通の赤えいの老成せるもの、尾と嘗て思つた私は此えいの事を東大の魚學の權威田中茂穂博士に話したが、先生は未だ研究したことはない、何分大なるものは研究が不便なので、之には限らず他にも不明のもの、多いのを遺憾とする云はるので、多年正体をつきまゐることに努力した結果、一種特別の赤えい即牛えいであることが明瞭になつた。普通の赤えいは之程偉大にならぬ、又決して長大なこんな特異の尾を有たぬことが判つた、最近私が標本にした尾は根元から八尺あつた。先日岩田博藏先生も之を見られ、實に立派だな!、骨董品にしても見事なものだが、生物の有する自然力の偉大さには驚く、こんなことを知るには君の所に來るに限るミ、三四回目に我博物館を來觀の

此白小判鮫めは水を離れて長時間元氣であつたので、當日は市役所の吏員の大部、明倫校の全兒童等に机及板などに頭部を附着せしめて其体を引張り、体は切れても放しやうもない強い吸着力を實驗して示し、大變面白がられた。

(萩文化昭和十三年十一月号)

### 牛えい及赤えいに就て

萩人で赤えいを知らぬものはあるまい、又赤えいが其尾に有する毒劍の危険性を知らぬものも多くはあるまいと思ふ。私の明倫校時代に同級の河添の鈴川信興氏が今の萩高女の裏の河で赤えいに刺され、戸板で自宅に運ばれ、其後久しく床に就いたことは其當時の多數の人に知られ、今日に於ても其頃明倫校に在學した人達も赤えいの話が出ると、何時も「鈴川がの」御殿波止場の所での「やられたいの」が出るに定つて居る云ふ風である。此劍は死後と雖も危険であるから、大抵切り取られてある。其毒の有無は學者間に異論があるが、私は無毒だと思ふ、其理由は毒劍は大部裸出し骨質で生活力を有する皮膜を缺くから、毒を分泌する可能性は無いと思ふ。只其劍の兩側に無數の逆鉤が羅列され居るので一旦突入せんか之を抜き出すに由なく、強て抜かんか其傷口の痛く荒らさるゝ具合は、實物で試驗するとよく判る、本當に身振いがするやうだ。右に述べた赤えいは學者が單に赤えいと呼ぶもので、日常吾々が食用に供するものである、脊面稍々赤味を帯び腹は白く、其縁

際賞められたことがある。土原に四聖堂を建設された奈古屋登氏は此尾の標本を見て、嘗て北陸の某寺の寶物を見た際に、此物を龍が置土産に遺し去つた龍の口鬚の一本だと説明されたのを聞いたことがあると話された。最後に此えいが普通の赤えいと異なる點を述べれば次の通りである。

- 一、特異の長大な尾を有すること
- 二、胎兒が普通の赤えいの數倍大で尾も其時より頗る長いこと
- 三、偉大の体軀に成長すること
- 四、脊面淡黒色で腹は全部白く黄色の部分なきこと

(以上は萩文化昭和十四年一月号記載のものであるが尙補足する意味で次の一文を加へる。)

諸新聞に大えいの記事が出て居たが中には要領を得たものもあるが、間違つた事もあるので、自分に關係した事であるから、平易に之を述ぶることにする。世間では是が赤えいの尾であるとしてトゲの澤山附着した長い恐ろしい形のものゝを軒に吊して悪魔除けにしたり、物好きに針金を通してステツキにしたりして古くから能く知られたものがある。斯んな尾を持つえいの正体は何であるかを簡單な事の様であるが的確に言ふ事は仲々容易ではない。元來えいと呼ぶ魚は脊の扁平な軟骨魚の總稱であつて澤山の種類がある。普通の人の一番能く見なれて居るえいは赤えいで、同類中最も味の好いもので脊は茶色で腹は中央が白くて縁は美

しい黄色のものである、これも相当大きなものは三尺以上に達するものがある。漁夫でも前述のステツキになるものは日常目に觸れる此赤えいの大なるもの、尾であると早合點するのが普通である。昔から俗に赤えいは骨が軟かであるから大きくなり、實際一坪以上のを見たことか、四疊半位のを見たことか云ふ話を屢々聞かされる事がある。赤えいも古くなるに尾が彼のように恐ろしいイガム(イガム)のものになること考へられてゐるらしい。然し私の調べた結果は何うも左様ではなくて別に赤えいよりも一層大きくなるえいで、其腹は全部白色で脊は黒味を帯び、味は赤えいよりも劣る別のえい(黒いので牛えいと呼ぶ)が居て、昔から赤えいの類の大なるを見たことか噂されるものは此牛えいの事で、ステツキにするのは此えいの尾であること考へた。處が是程目立つて普通の人に知られた尾の持主である此牛えいが魚學の書物に少しも載せられて居らぬのを不審に思つたが、是は其筈であらう、眞の赤えいより數も少く或る時期丈に稀に魚獲されるが皆な大きくて學者の手に入る場合は殆んどない。又普通の赤えいの大なるものと思つて調査するものがないからであらう。

夫れで私は毎年十月前後に主に大島の大敷網で捕獲されると聞いて居るから、昨年は其頃色々手配りして是を得る事に努めたが遂に目的を果さなかつた。本年は夏以來殆んど毎日他の水産物を採集する傍ら此牛えいに就いては常

異つて居る、尙若し是が眞の赤えいであつたなら、此位の大きさのものは脊筋にトゲが生えて居て胎兒の十四も生む頃である、此一事だけでも別のえいである事が知られるのである。(長州新聞昭和八年十月廿六日)

### 七十餘個のさゝえを咬み割つて喰ふた斑鳶えい

前月の九月十八日萩市越ヶ濱の大敷網に、體の幅一間位で脊や一面に黒地に白色の斑點が數十散在して美しい大なる一種のえいが捕獲された。之は鳶えい(稍々鳶に似て居る魚)の仲間、稍稀なる斑鳶えいと呼ぶ頗る大型のえいである。毎年此頃から年末にかけて稀に姿を見せるもので、多分胎兒分娩のため近海に来るのであらう。丁度其日も船上に引き揚げらるゝや否や、一尺四方ある大なる胎兒を二匹まで生んだ、以前も一匹生んだのを實見し標本にしたことがある。魚學の權威田中茂穂博士は此えいは本邦にては極めて稀なものと云はれるが、萩近海ではそれ程珍品ではない。此えいは上下の兩顎に恰もコンクリートに似た二枚の厚い板を有し、それであの堅きさゞえの殻を造作なく打割る習性があり、宛ら碎岩機のクラッシュヤーの役目を演ずることを豫し知つて居るので、今回は此怪物が幾何を咬み割つて喰ふたかを調査するため、其胃を切開し、其内容物を見るに、其周邊が稍々消化されて居る大小色々のさゞえの肉のみ驚く勿れ七拾餘個あつて他に一物も見當らなかつ

に注意を拂ひ、一方多くの老練な漁夫や魚商や經驗家にも尋ねたが何れも要領を得ない。其理由の主なる事はえい類は尾に恐ろしい毒剣があるので、何時も尾は常に切り取られ居ること、又漁夫には他の魚を得るのが目的であるから餘り注意せぬこと、今一つ有力な理由は此牛えいの小さいのが漁獲せられる事が稀なので如何なる形のえいの成長せるものか、判明せぬからである。

其後折々此牛えいらしき大えいに出逢つたが悉く雄であつた處、或日の朝大島大敷の潜水丸が甚大の牛えいを運んで來た、見れば今日のは雌である、特に天祐とも云ふべき事は其の排泄腔より胎兒の尾が五寸許り外に現はれて居る、魚屋の或る者は尾を握つて引き出さんとするが徒勞であつた。夫れより切り開いて見れば一つと思ひの外三尾現はれた、其の各が胴体約一尺五寸四方、尾が二尺一寸、全部で三尺七寸あつた。漁夫に問へば船に引揚ぐる前に二尾は泳ぎ既に逃げたと云ふ、夫れで少くも五つの胎兒が居た事は明かであつて或は普通の赤えいの胎兒の如く十四位居たかも知れぬ。フカやえいの仲間は大が胎生であつて卵を産む方が却つて少いこと云ふ事を知らぬ一般の人達は、また此えいは畜生見たやうなとか、人間も同じだとか云つて、目を丸くして見て居るのも可笑しい。此大なる胎兒を普通の赤えいのと比べると、前に私は違ふと述べた通りに尾こそ未だ幼いから親の様でなくやさしいが、鉢の色其他が

た。下等動物の中には想像も及ばぬ怪力を揮ふものが少くないが、此魚なども其一つに數ふべきであらう。早速此さゞえの肉はよく洗つてフォルマリンに浸し、瓶漬標本として其顎と共に博物館に陳列した。此えいも長大な尾を有し、二米以上で三本の毒剣を有するのが普通である。(萩文化昭和十五年十月号)

### 兩頭の油鮫

近頃入手した畸形標本に底曳網の漁獲物中より採集した兩頭の鱧がある。長さ一米餘の鱧で、体に白星があり、内に多量の脂肪を含む油鮫と呼ぶのが、此魚の多々ある中に完全な頭部一對を有し、胴体は一つで、體は正常のものより稍々短いが、鱧は全部具備せるもの一尾を採集した。兩頭の蛇兩頭の鱧など稀に現はるゝが、魚では今回私は始めて目撃した、何れの口からも食を取り生存の可能性はある筈だと思ふ。(萩文化昭和十七年七月号)

### 三百貫餘の頬白鮫

西洋では人喰ひ鱧と呼ぶ珍種  
我國で人喰フカミ云へば青鮫であることは中等學校の動物學でも教へる位有名であるが、青鮫が地方で云ふどの鱧であるかを知らぬものが多い。此鱧は東京で青鮫と呼ぶ程にその背部の色は青みを帯び、新鮮のものでは美しい青

色である、萩地方では之をネヅミと呼ぶ、其齒の長くて鋭いことは恐ろしいもので、私は其頭ミ齒の標本を數個保存して居るが、見るものは獅子か虎かなき問ふものがあるが、それよりも一層恐ろしくすぐ見ゆるものである。其性質を老漁夫に質すも、皆だう猛性であるとか又往々海の上層を遊泳し、時には人を襲ふことあるなき答ふるのが常である。今回大津郡通村にて捕へ、萩の魚市場に水揚げした大鱧は本名類白鮫(方言イテフ)で近來見られなかつた大鱧であり、三百貫近くあらうと見るもの皆驚異の眼を張つた。一間餘の鱧が三十円以内であるのが普通であるのに、之は百何十円云ふ高價格を有し、其肝も約三疊に近い程大であつて其價も十何円云ふ素晴らしいものであつた、數十の齒は幅廣き三角形でその長さ一寸五分位あり其兩側に鋸齒があるのが目立つ。

此鱧は英語で「マン、イーチングシャーク」即ち人喰ひ鱧と呼ばれるが是は有名な豫言者ヨナーが此鱧に呑まれて死んだとリンネが其著書に書いたこと基因して居る云はれて居る。數十万年前生活せし此類の一種は地質時代の第三紀層より其齒が化石として掘り出されるが長さ五寸位あり、俗に天狗の爪と呼ばれ有名である、其齒より其体長を想像するに九間位あつたらう。

(防長日報昭和十一年十二月廿日)

型破りの多數の胎兒を生む鱧

フカの形態で特筆すべきは其鰓の孔が七つあること(普通は五)で、鰓孔六以上のフカは極めて少數で化石のフカに見られるのが有名である。(萩文化昭和十八年八月号)

稀有の大鱧甚兵衛鮫を捕獲

一昨日萩市越ヶ濱大敷網で素晴らしい大鱧が捕獲されたそれが單に甚大である許りでなく、古老の漁業者も嘗て見たことのないと云ふ珍物であつた。特徴の二三を列擧すれば体は頗る肥大し、頭部が著しく扁平で先端圓く、大人をも容易に呑み込みさうな巨大の口が其先端に開かれる、鰓の口は頭の下面にあるのが普通)全身黒褐色の素地に大小無数の白星の斑点が散在し、頭部には特に密布され、頗る美しい。巨軀の割合に其眼と齒とが頗る細小なことは注意を惹く、早速解體し、數片に切断し、萩の魚市場に運んだ。私は之を一見し、嘗て今から約卅五六年前、其全身を萩の魚市場側に運んだものを調査したことのある世界最大の大鱧ミ呼ばれる甚兵衛鮫(一名ヤスリザメ)が久し振りに捕れたなと思つた、見るもの皆異口同音に、之は始めてだのう、鱧には違ひないだらうが皆々驚異の眼を張る。此鮫は太平洋や大西洋の温帯に棲息し、平素は大洋の底深く棲息し、稀に沿岸近くに来るので、之を見る機会が頗る少く、魚の權威者も稀有のものとし、其若魚や胎兒は見たことがない云ふ。大なるものは千數百貫に達し、萩附近で時々捕

を見て

鱧は種類が仲々多いもので、七八十種はあると見てよい、其中でほんの少數の數種を除けば殆ど全部が胎生であつて、少數産む種類の中には大鱧ほごあるのを體內に宿してゐるのを屢々見たことがある。我國に産するフカでは少數の二乃至四位より中位のは二三十内外で、從來破格の多産者としては諸學者はヨシキリザメ(方言ミヅブカ)をあげてゐる。此フカは折々見當るが、体色が紺青色で實に美しい、外人がブリウシャークと呼ぶ理である。我國で時に人類を襲ふ諸書に報じてゐる青鮫は萩ではネヅミブカと呼び、之とは違ひ其齒が餘りに鋭利で大且つ多數あるので、嘗て萩の某寺院に大蛇の頭として保存されてゐたのを見たことがあつた。

最近萩市玉江浦のフカ釣り専門の漁人が平素の漁場である長崎縣の五島沖で釣つた云ふ多數のフカの中に長さ一間半位の方言ウニブカ云ふのが一尾あつた。其口が甚大であるのでかく呼ぶらしいが、學者は東京の名稱で之をエビスザメと呼ぶ。此フカを解體したが餘りに胎兒が多いので試みに調査したところ、長さ一尺五寸餘のもの八十あつた、漁人達は船の中でも五六匹出ましたと知らせて呉れた。從來屢々此フカに出逢つたが、胎兒を見たのは今回が最初であつた。此珍らしい出来事は魚學の權威者にも報告し、且つ専門の雜誌で一般の讀者にも知らせたいと思ふ。此

獲される姥鮫(一名バカザメ)と共に世界最大の鱧である。兩者共に巨軀の割合に其眼と齒とが驚く程小く、習性も亦相似て頗る遲鈍で、往々洋上近くに浮ひ上り眠つてゐるらしく、其肉も共に水分多く柔軟で不味である。其食物も鯨に似て微小の蝦類であるから、之を口内で濾し取るため特殊な極めて精巧な装置が鰓の側に設けられてゐる。翌日其濾過器の一部を携へ大衆に示したが、自然界の巧みに感嘆せぬものはなかつた。(萩文化昭和十八年十月号)

神樂鮫を得て原始的の鱧全部備る

原始的のフカ即ち換言すれば化石として現はるゝフカは其體制機構全部に互つて比較的簡單であるが、素人が見て容易く分るのは其鰓裂の大乃至七であること、脊鰭が只一つ體の後方に存在することである。我國に産するフカの種類が約八十種位あつても、僅か四種を除いては悉く鰓は五裂で又脊鰭は前方に大なるものが一つ、後方に小なるものが一つ、で二つに定つてゐる、之が現代的のフカ類の型である。一昨日萩市玉江浦のフカ釣り専門の漁人がフカの主な産地の一つである長崎縣五島沖合の特別な深所で始めて釣つたこと、數十の群中より一間半位の珍らしいフカを示した。之が表記の神樂鮫ミ呼ぶ六裂のものである、數年

前朝鮮で捕獲したと云ふ此フカを見たことがあるが、其際漁人は彼の地でも此フカには名稱が無いと語つたことを記憶する。之に近きものに江戸油鮫と呼ぶ脂肪に富む美味のもの「ミエビスザメ」(方言ワニブカ)と呼ぶものが七裂の方に屬する、魚學者は極めて稀なミ發表してゐるが余は度々見て、其小型のものを標本としてゐる。今一つ六裂のものにラブカと呼ぶものがある、之は相模灣の深海で捕獲されたのみで、所謂生きた化石として學界では頗る有名なものである。原始魚類の研究家デイン博士は此フカの研究のため三回も來朝したことがある。之は得難きもので入手の望みなき故、京都市島津標本店で機を逸せず高價に購入したことがある、今では逆も入手絶望と云はれてゐる。要するに六裂二種七裂二種で僅か四種だけである、今回全部を標本として示すことが出來たことを喜んでゐる。

(藝文化昭和十八年十二月号)

### 珍奇な鮫の卵

昭和九年五月、自分は萩魚市場で七日鮫及び猫鮫(萩ではサマエ割と呼ぶ)の卵を入手したので、市内明倫小學校へ博物標本として寄附した。鮫類は普通胎生が多く、卵は數種に限られ、この七日鮫の卵は一見鳥賊の甲の如き格好をした白色透明の殻中に鶏卵大の卵を藏し美麗であるが、猫鮫は日本特有な鮫で卵は螺旋形黒褐を呈し、恰も法螺貝の如く頗るグロテスクなものである。

平たく卵色も銀白色、瑠璃色の斑点が多數散在し頗る美しく、脊ビレ腹ビレは細長く朱色を呈し、中でも腹ビレは膜状に擴がつて居るに云ふ珍奇な形態を有し、實に其名の示す如く形態の優美色彩の華麗なる龍宮の乙姫様の使として相應はしい魚である。(長州新聞昭和八年九月卅日)

### 魚博士の立派な驚く

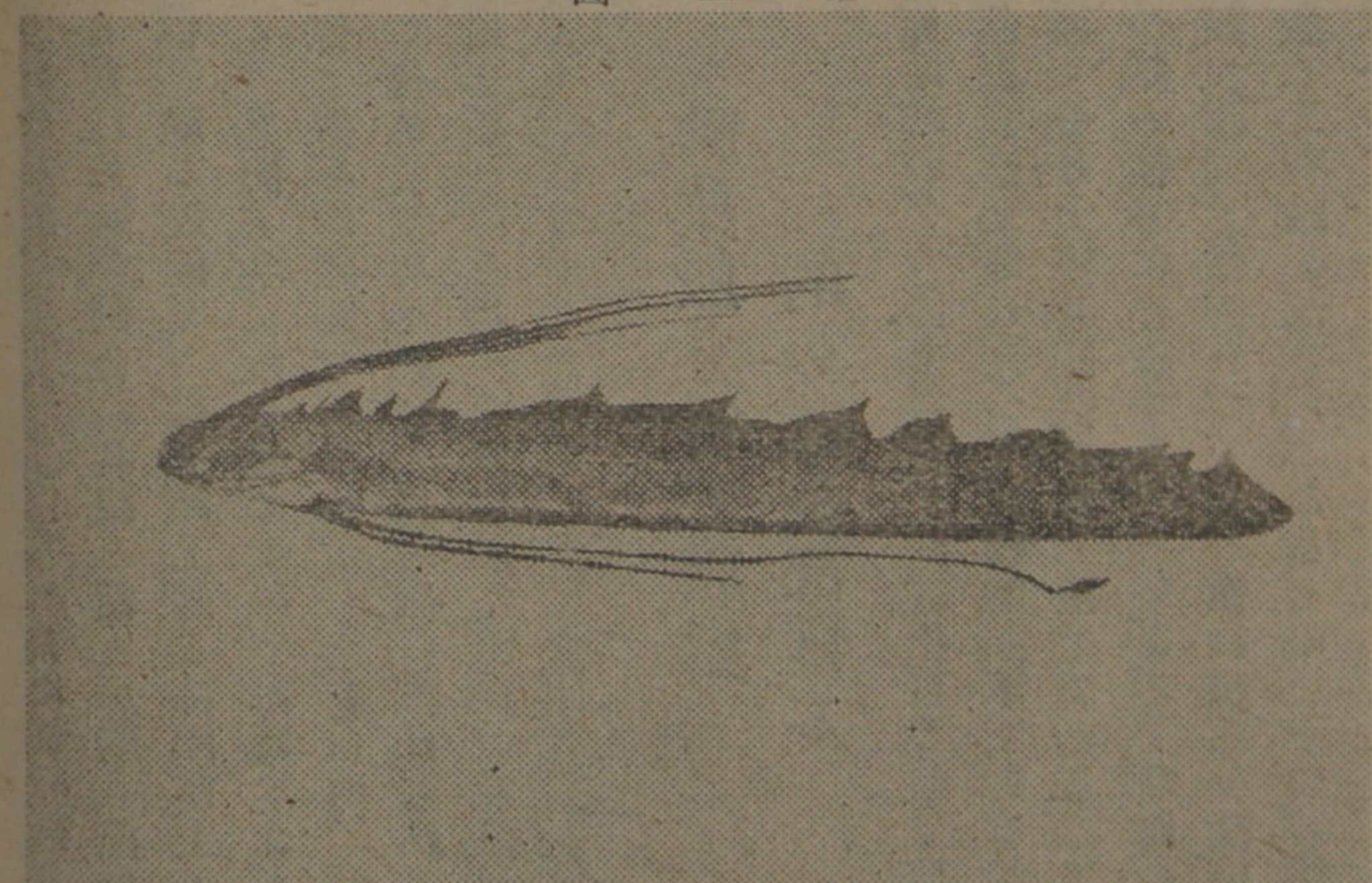
#### 萩の珍魚龍宮の使

昨年十二月初萩中越ヶ濱の大敷網にて捕獲された珍魚龍宮の使(學名レガレックス)は長二尺五寸体扁平で、細長き所稍々太刀魚に似て其銀白色一層美しく立派で、更に青色の白斑魚体全部に散在、頭上には六本の深紅の長さひれが蟹の如く高くそびへ、胸部よりは二本の腹ひれ之れ亦素敵に長く垂れ、其先端奇妙に瓣状に擴がる、其他背部の鰭二百近くあるが悉く深紅で、眼は頭に比し著しく巨大で物凄く白く輝き、口は無齒なるが著しく前方に突出するなど、怪奇の數々を集め、流石に乙姫の使者として申しからぬ美と氣品を兼備せる魚で、學名のラテン語、「レガレックス」も王様と云ふ意味を有す。七年前之に似たる此種類を菊ヶ濱沖合で捕獲し、之を入念に原色實物大に寫生した。之は東大の魚博士田中茂徳氏が寫し取り、標本の代りこせられしことあり。今回の最近魚の分類で學位を獲得された新進の權威者蒲原稔治博士に寫真一葉を進呈せしに御寄送のレガレックスの寫真は實に立派なものにて實地に

### 世界的珍魚「龍宮の使」

(防長日報昭和九年五月八日)

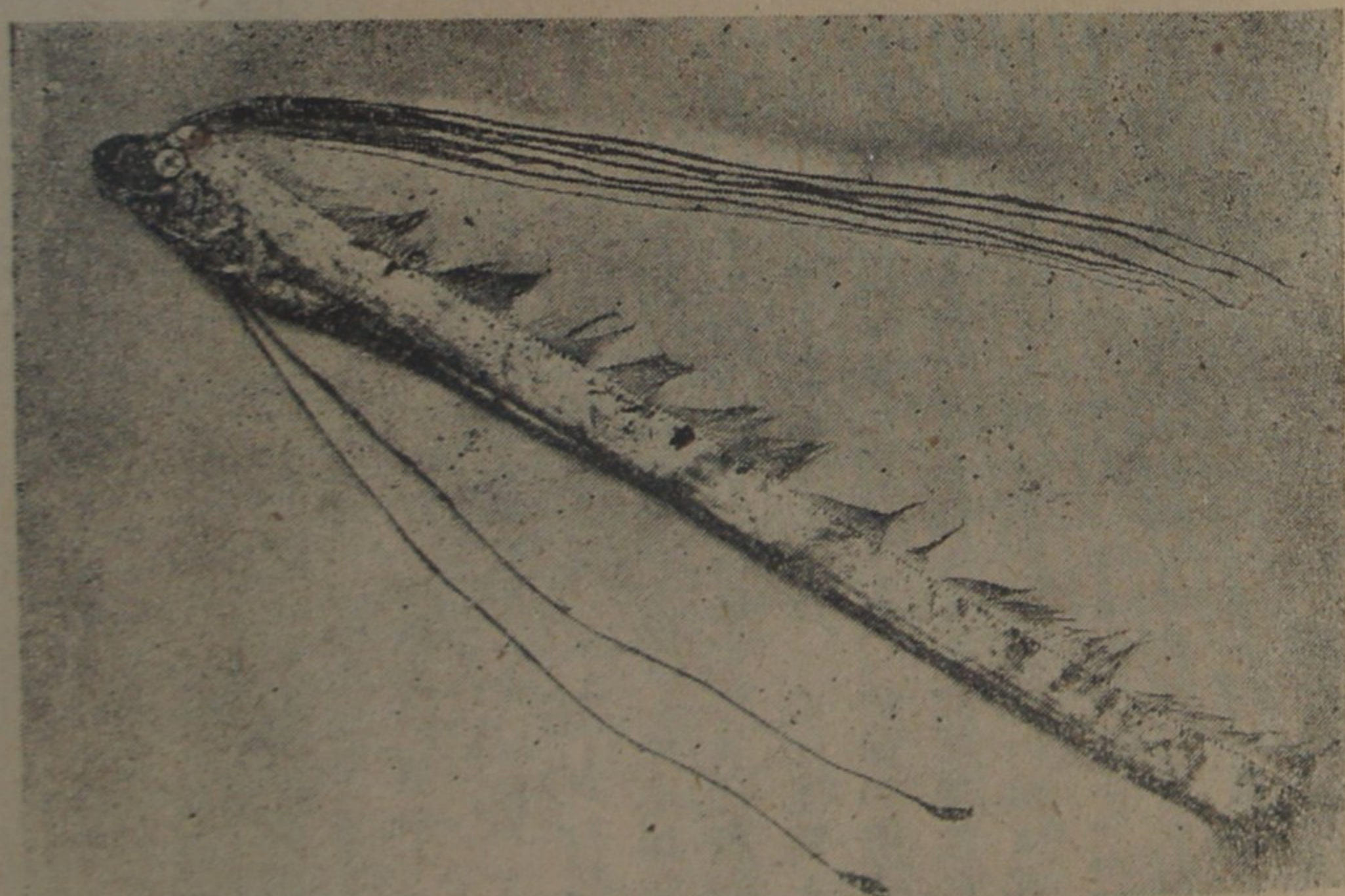
余は萩魚市場で數日前計らずも萩市沖合の引網に懸つた我國は勿論世界的にも極めて稀れに捕獲される學名「レガ



圖二第

リックス」普通「龍宮の使」と稱する珍魚を採取し、直に寫真に撮つた上、入念に實物大に寫生し、之に原色を施した後、後日の參考に資する爲めホルマリン漬として大瓶に保存することにした。此魚は長さ一メートル餘中四寸餘のつて大太刀魚に似て薄

第三圖



色々々面白き材料の揚るに驚き入候云々の禮狀に接した。(藝文化昭和十五年一月号)

學者から懇望された珍魚の寫真

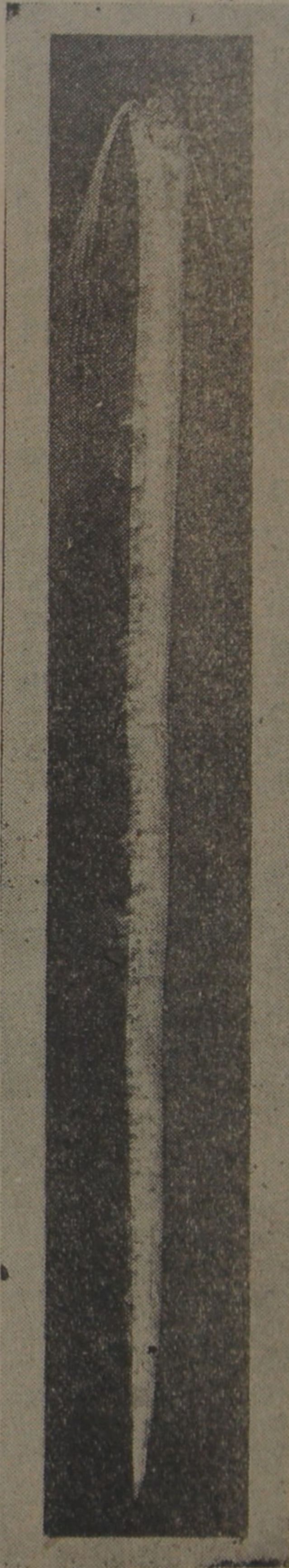
最近萩近海の鰭島の大敷網で捕獲された珍魚龍宮の使(學名レガレックス)の

完全な標本は色澤の艶麗と形態の優美な點では恐らく魚族中の首位を占める程で、學名のラテン語も王と云ふ意味を含んで居る、銀白色に青黒い無數の白斑點が散在し、鰭は全部深紅色で、頭上腹は特に長く奇觀を呈して居る。

之を撮影する際に側で觀た人々は皆異口同音に實に立派な魚だ、何んと神秘的なことよ、眞に龍宮の使の名に相應しいと激賞した。之は俗人の觀た偽らざる感じであるが、自

も寫眞一葉を進呈せしが、始めて見たと大に喜ばれ、鄭重な禮狀に接しました。今まで完全なものなかつたのは餘りに細長いので他魚から喰ひ取られるためと思はれる。

第 四 圖



寫眞の  
實物は  
長さ四  
尺九寸  
幅最も  
廣き部

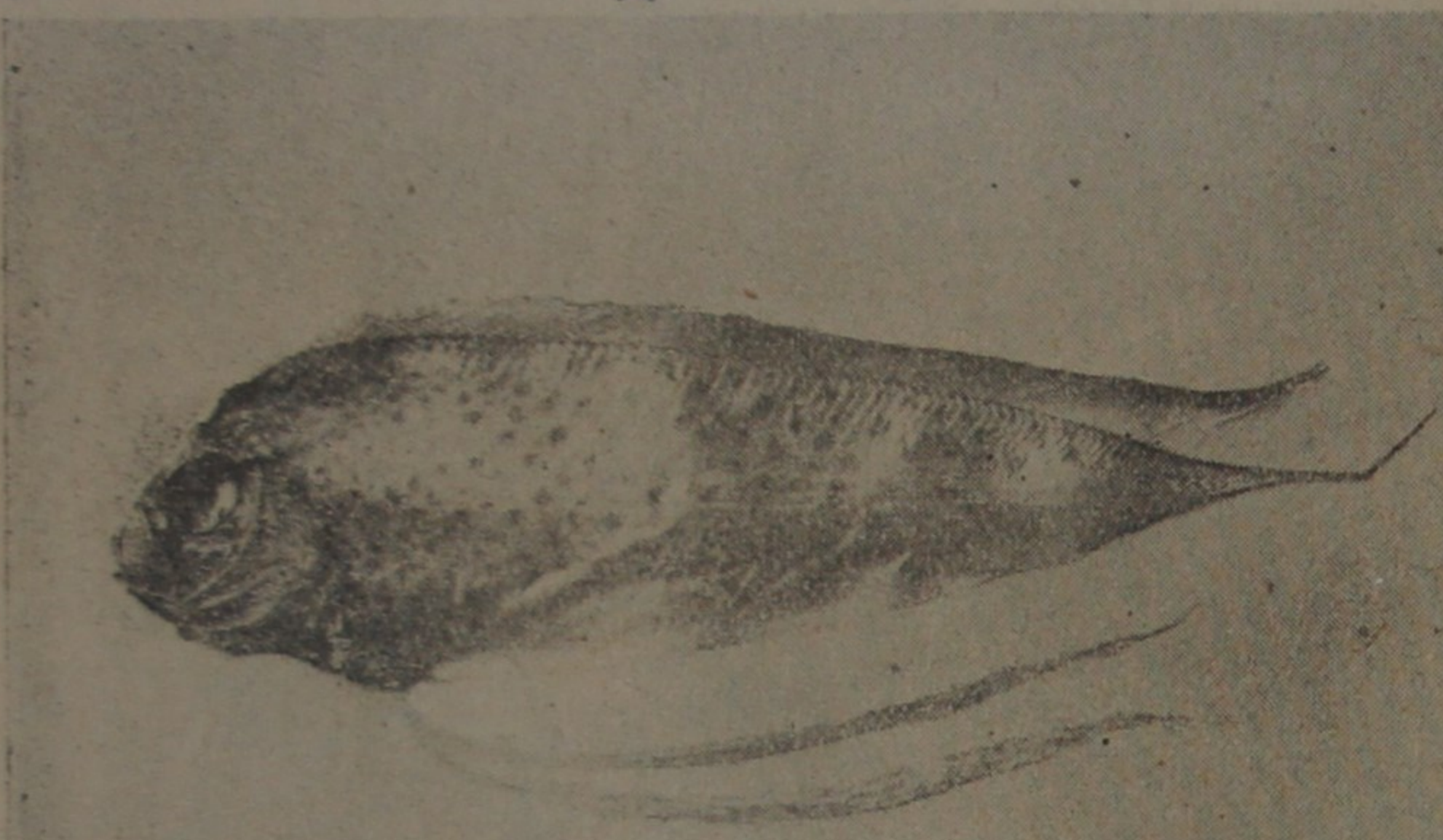
分が既に此種の標本並に寫眞を所持するにも拘らず、今回更に之を繰返すのは、之が完全標本で、容易に手に入らぬ大切なものであるからである。由來此魚の眞相は學者にも判然しなかつたので、以前私の採集した尾部の缺損せる不完全なものゝ寫生圖でさへ、東大の魚學の最高權威田中茂穂博士は畫家に頼んで寫し取つたと云はれたことがある。今回の寫眞が新聞に發表さるゝや、魚族研究では本邦屈指の權威朝鮮總督府技師内田惠太郎氏は早速私に一書を寄せて寫眞を懇望された、其書翰の一節に次の如く記してある。レガレックスの完全標本が取れました由若し御差支なくば其寫眞及び測定記録御惠願へまかせてかうか朝鮮近海で入手したことあれど完全標本はなか／＼手に入らぬもの故丁重に御保存願へれば將來の研究資料としても貴重なものご存じます云々尙ほ現今魚學の新銳蒲原稔治博士に

一寸六分餘  
待望の珍魚(龍宮の使)の  
完全なもの始めて入手  
珍と美と奇を併有した魚としては以前に記載した龍宮の使「學名レガレックス」は正に其代表的のものであらう、學名のラテン語レガレックスには王將と云ふ意味がある程である、此一族に數種あり、色澤の美や形態の奇等各特異な點があるが、之を觀るもの皆其美觀に驚異の眼を張らぬものはない。此所に掲げた寫眞の魚は其一族である、和名テンガイハタ(學名トラキブテルス・イリス)と稱ぶもので數年前越ヶ濱の地曳網で捕獲された事があるが、其目立つ振袖のやうな長大なる一對の鰭は根元より切れ損じて其眞相を知るに由がなかつた、爾來常に此魚の入手に注意を拂つたが、一向其効が無かつた。然るに五年振りの本年五

(葎文化昭和十六年六月号)

### 魚博士が大學でも見られぬ珍魚 として懇望さるゝ龍宮の姫

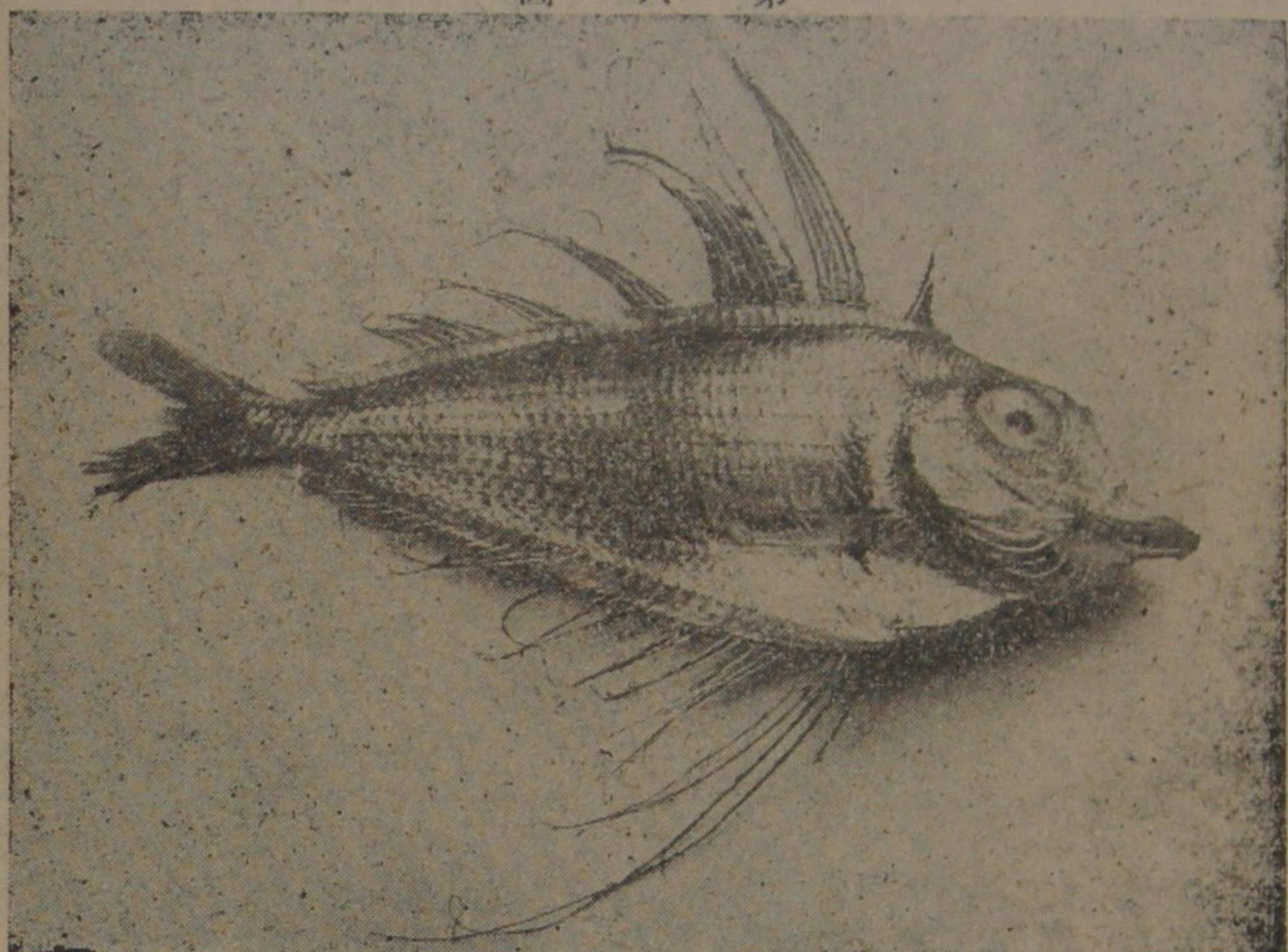
第 五 圖



は此鰭が一本の骨で支へられてあるが、此魚のは之が十本の小さい線の骨で支へられ、其間に紅色の膜が張られてゐるので、之を擴げて泳ぐ姿は實に優美なものであらうと思はれる、原色に近き標本を製作して觀覽に供することにした。

最近阿武郡田万崎村江崎の沖十三湮の鰭の延繩で、珍無類の怪魚が釣られた、全身頗る扁平で肉少く、之に全部銀白色の硬き鱗が密着し、宛然ブラチナの鎧を着たかと思はれる程さらさら輝き美しく、脊に腹には黒色の大きな鰭が宛も扇子を擴けたやうに廣がり、頗る異彩を放つ、寫眞の圖にては破損して居るが、眼は体に不似合に頗る大形で、夫れが又頭の端に近く位し、特に奇なるは其口が上下に裂けて、之を開くミ下顎が遙かに前方に突出する、(寫眞の圖で嘴の如く見ゆる部は下顎の先端である)餘りに珍らしき魚であるので、漁業組合長佐伯成一氏が我が博物館に寄贈された。  
此魚は以前相模洋で一回捕れたと云ふ記録のあるだけの世界的に稀有の珍魚で、外人の魚學者ヒルゲンデルフ氏が學名即ち世界共通の名稱をセントロフォオリス、ペテルシーと命名し、學界に發表したもので、我國では龍宮の姫の名が新しく附けられた辨天魚科に屬する魚で、此科に稀有の魚ベンテン魚と呼ぶものがありて之に酷似するが、鰭の形及位置が相違して居る。平素文通する魚學の新進權威者である蒲原稔治博士に通知したところ、東京大學にも無く、

圖 六 第



従つて實物を見た  
ここはな  
い、新産  
地山口縣  
が知れた  
こは喜  
ばしい、  
今後もし  
御採集の  
際は是非  
共御分譲  
を願ふと  
の回答に  
接した。

### 稀有の奇魚

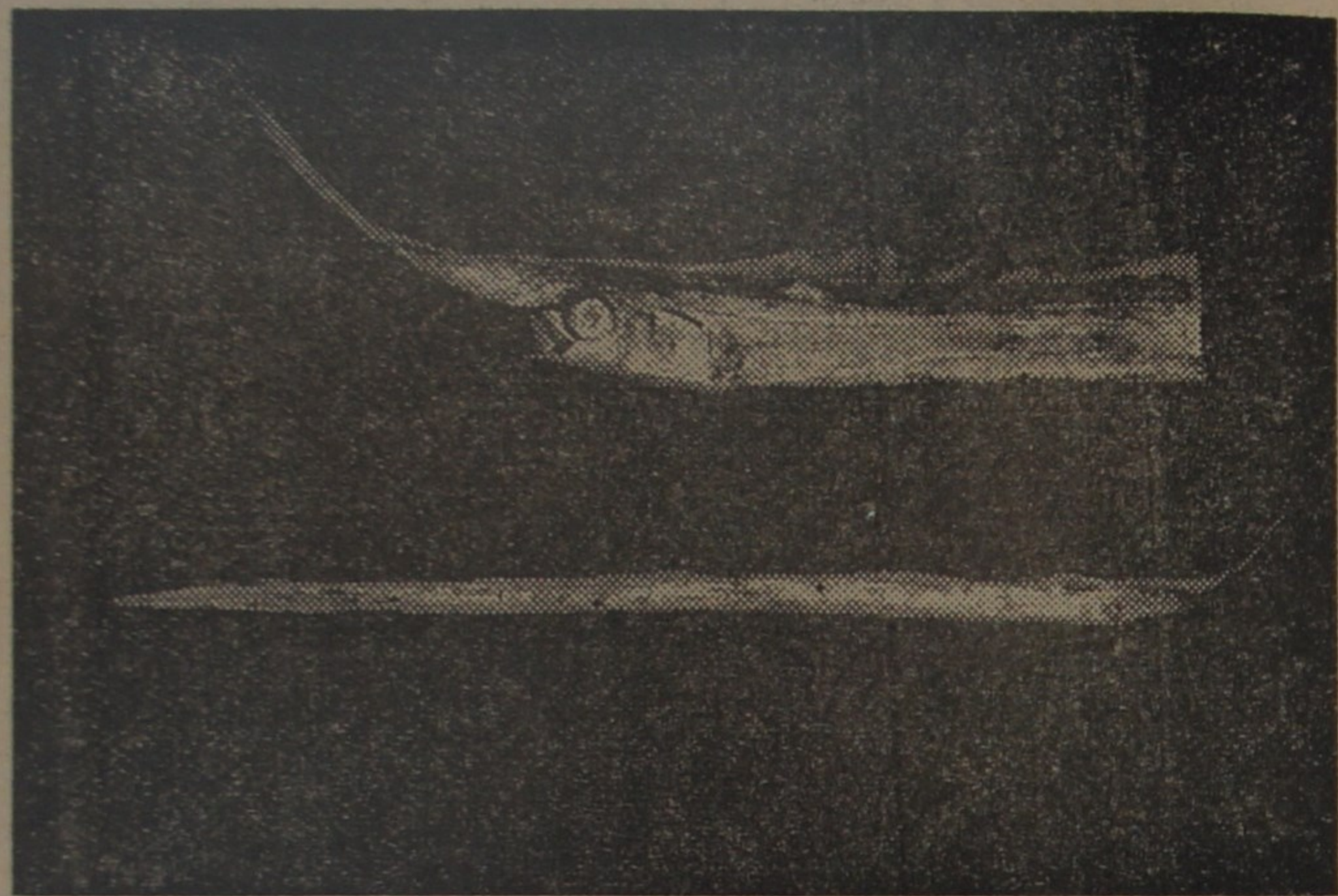
#### 「天狗の太刀」

(秋文化昭和十五年八月号)

此魚は昔、秋近海の曳網にて捕獲されたものなるが、素

晴らしく細長く且つ扁平で長さ三尺餘、帯皮をつくり、それかミ云つて太刀魚のやうに尾部が絲の如く小さくならず立派な尾鰭を備へてゐる。体色も黒紫色ではあるがきらきら輝きわたり、全部の鰭が深紅色で伸々美しい。特に注意を惹くのは口は頭の下面にあつて、頭端は著しく長く三寸も前方に突出してゐる、之が天狗の名稱の起りである。脊鰭の棘の数は太刀魚でさへ百四十位であるのに、此魚は三百六十位もあり、驚くべき多數で、其前方の數本は三寸位の幅廣い紅烏帽子の如く延長せる点は珍奇魚で有名な龍宮の使者にも似てゐる。尙ほ珍妙なこは、多くの細長い魚では其肛門の位置は大抵体の中央より前方にあり、中には四分の一乃至五分の一の前方にあるものもありて、体の方は外敵のために喰ひ取られても生存には無影響であるが此魚のは例外で長い体の殆ど末端に接近して開いてゐる。此魚の種名につきては、我國の魚學の權威者には頗る難物視され不明であつたが、最近外人ギユンテルの發表したアカナマダ科の學名ユーマチクチス・フイスキー和名天狗の太刀と判明した。我國では土佐の深海で、外國では南部アフリカで採集された記録があるが、我國の學者には其實物は頗る珍重がられるものゝ確信する。アカナマダと呼ぶ魚は昔て見島沖で捕れたものを我博物館に陳列してゐるが東大の魚博士より其寫眞を懇望され、寄贈したこがあるが、幅は此魚の二倍位あり、長さは半分位である。さすが

圖 七 第



に科を同  
してゐる  
けに類似  
た点が多  
ある。  
(秋文化  
昭和十七年  
六月号)

な優美な形の貝殻を造り、一生其中に生活し、常に水圏近くを悠々と泳ぎ廻るものがある、産卵期には其殻は殆んど卵で満たされ、其親は困りはしないかと思はるゝ程である此種のタコは我國に數種居るが、此近海に現はるゝものは

美しい  
葵貝、  
別名女  
神の花  
籠

此葵貝で、此類中最も大且つ美しいものである。タコの船のやうであるから、一般にはタコブネの名で中等學校の教科書などには出て居るが、正しく云へば實は葵貝である。タコブネと呼ぶものは之より形も小さく黄色を帯び、之れ程に白くない。八本ある腕の中で最初の二本は末端が擴がり、特別な形をして居る。之で介殼も造るが、平素は外に出して介殼をしかと抱きしめ、水面近く其腹面にある漏斗管より烈しく水を吐き出し、其反動で後退りに泳ぐこ普通はイカ、タコの泳ぎ方と少しも變りはない。越ヶ濱の漁夫達は帆立貝と呼ぶが、それは面白い名稱である。秋地方のものはイタヤガヒ(杓子にする介)をも帆立貝と呼び、水面に介の帆を立て、走るなど云ふものがあるも、それは大間違ひで、實は海底近くを少し泳ぐだけである。中等學校の教科書に此介ダコが足を殼の外に出して泳ぐ圖が出て居るが、あれは想像の圖で實際を見るこそんなこはない、訂正すべきである、泳ぐときは足は殼の内に入れて居る。次に述べたいこは此介ダコは靴(雌)に限り介殼を造るので、母性愛のほこばしりかも知れぬ。雄は形も違ひ遙かに小さい、永らく其存在が不明であつたが、外國の有名な生理學者によつて發見されたものである。次に繁殖法につき珍妙なこは、雄の一本の足の先の方が雌の体内に運ばれ、其切れ端が媒介となりて、卵が發育するのである。此ここの不明な時代には此切れ端を寄生虫と誤つたと云ふこ

とである。他の章魚にもかゝることが絶無ではないが、他の生物界には類似のないことであらう。最後に此葉貝の仲間、我が國に産するものを擧ぐれば次の四種である。アヲヒガヒ、タコブネ、チミタコブネ、チビタコブネ。

(防長日報昭和九年十一月廿日)

### 巨大なる水章魚等に就て

章魚にも多くの種類がある、普通に萩地方で食ふのはマダコと呼ぶものである、手の特別に長い手長ダコや卵が飯粒に能く似て居る飯ダコ(イ、ダコ)も美味であるが此地方には少い。昨九年萩の新聞に大變大なるタコが捕れた記事が出た時、此地方に居るタコもそんなに大形に成長するものか、私に尋ねた人もあつたが、此大形のタコと云ふのは全く別の種類のもので、主に北海に産する水タコと呼ぶものである。体が餘程柔かであるから水ダコの名が出たのである、中々大形に成長するもので長サ一丈餘に達する人の話に大連で四斗樽一パイのタコを見たか、元山で朝鮮人の家に大ダコを乾かしたのを見たが、天井に頭がつるされ、手先は座に達して居たなごゝ話すものがあるが、それは本當である。先日來二、三回數尾萩の魚市場に姿を見せたが中形のもので七、八尺はあつた。之が見られる日には他にも北日本の魚が多少見られ、今日は朝鮮方面で漁業をした船が歸つたとなつたが、何分大形のものである、此タコはマダコよりは味は劣るが、何分大形のものである。

この間は少し高まり畝になり、全体が網目に似て居る、頸には上面と下面とに各一對づゝの穴がある。之は正しく本州沿岸にて稀に捕へられると云ふ網ダコの雌で、殊に破格の大型のものである。

此章魚に就ては學界で有名な話がある、それはこう云ふのである。元來タコ類の雌雄の見分け方は其右から三番目の手の先を見れば知られる云ふ程に、雄の方は生殖の爲に變形して居る、それが普通のタコと違ひ此網ダコの仲間には此變形した手(小い吸盤が百個も密に列ぶ)に精虫を包藏し、之を雌の体内に挿入すると、其部分が脱離して残り其目的を果すのである。昔外國の學者が此網ダコの雌を切り開いて見て、此變形した雄の手の先を見、之を寄生虫と誤り、ヘテロコチルスと命名した、之はギリシヤ語で百吸盤虫と云ふ意味である。

此網ダコに限らず其仲間である萩附近で俗にマムシダコと呼ぶ本名紫ダコや、海の女神の花籠と呼ばれる程美しい介殼を造る介ダコ類は皆このやうな切り離れる生殖用の手を有し、今日でも此手を昔のまゝの術語でヘテロコチルスと呼んで居る。之は前に述べた様に雌であるが、雄は遙に小さく其四分の一にも及ばない。

(防長日報昭和十一年十月九日)

### まむしだこの正躰につき

萩地方の人はよく蛇が章魚に變るさか、或は變る際中を

るから、經濟上重要な位置を占めて居る、蕃殖時期に体内を見るに雌雄の生殖物が大に發達せるを見るこゝが出来る。タコやイカの成熟せる雌雄は其一本の手の先端を注意すれば判るものであるが、漁夫も魚屋も一般人も殆ど氣が付いて居らぬやうである。幸いに雌も雄も捕へられ、其手も頗る大で其しるしを説明するに頗る便利なので、諸方面の人に實物について試したか、皆初めて知つたと興がるものが多かつた。目下市中で販賣するヤリイカ(方言ヤセイカ)につきて試して見られたい。

一、ヤリイカの大形のもので大抵雄で、其腹の方の一つの足に先が大くなつて居るのが見られる。(種類に依り何番目の手も定つて居る)

一、タコは脊から算へて右の第三番目の足先が他より變形するが雄で、雌は皆同じ形、水ダコに於ては一尺許も無吸盤で中央に溝がある。

右の變形せる足は生殖物を他に移す道具として役立つものである。

(防長日報昭和十年三月三日)

### 萩の沖合で大章魚を捕獲

萩市越ヶ濱の漁夫が一昨七日萩沖合で大敷網に従事してゐたところ、是迄嘗て見た事のない珍妙な大章魚を捕獲した。此ものは俗に頭と呼ぶ部分即ち胴体は手に比べて素敵に大きく(胴の直径八寸)且つ美しく、その片面の腹に當る方は骨かと思はるゝ程堅いイボだらけで、其イボとイボ見届けたとか云ふ。又私に向つてかゝることが實際あるかどうか質問された方も可なり澤山あつた。其際之に説明を與へると成程そうかゝうなづかれ、まさかそんなことあるまいとは思つたけれど、それで安心した云ふは一方もあるが、其際に數人の人が居合せると、大抵の場合、あれは本當です、私も實際見た云々横槍をつけるのが常である。時には教員の指導の任に當る方で之を確信し、私の説明に耳をかさなかつたものがあつたことを記憶する、それ程一般の人の間には之を本當の事實と確信するものが相當多いやうである。

此傳説は萩附近ばかりでなく他でもあつたらしい、こんなことを云はない地方の人に向つて蛇が章魚に變る云ふ話を聞いたこゝがあるかと、私は試に二三の人に問を發したことがあるが、殆ど異口同音にそんな馬鹿げたことはないでせう、萩にはそんなことを云ひますか、不思議がり一笑に附した。之は冷靜な考へ方であつて、常識で考ふればさうあるべき筈である。蛇の體と章魚の體は根本から大なる相違がある、それが見る間に變るとはどう云ふこゝか、又何の爲めに變るのか、生物の中には親子の時代とを比較すれば、之が同一の生物であるかと怪しまれるものは相當多くある。卑近の例を擧ぐれば腐肉の中より這ひ出づる蛆(うち)は蠅の子供であり、毛虫芋虫は蝶蛾の子供であることは著しい相違と云はなければならぬ。これ等は相當

長き期間に於て其子供時代の体内に於て大なる革命が起つての結果である、親も子供もその生活状態に適したる體形を具備する必要から起つたのである。之等は一括して動物の變態と呼ぶが其例は枚擧に遑がない。然し一つの生物が他の生物に短時間の間に變ること、手品師が演ずる藝當の如きことが、どこを探しても決してあるものでない。然らば「まむしだこ」はそも／＼何物であるか、本邦の沿岸に産するたこが拾數種以上あるが、之は其中の「紫だこ」と呼ばれる並ならぬ怪しげなたこである、此たこの弱り果てたまきを錯覺したのである。

#### 紫だこの特徴

- 一、八本の手の内四本は短く、四本は長く、其長い四本は兩側より先端まで幅の廣い膜がひろがり、それが濃い紫色で、それに蛇に似た斑紋がある。
  - 一、胴が圓くなくて稍々細長く、頭には脊腹共に二つの孔がある。
  - 一、苦しめられるミ粘液や紫の汗や黒汁を排出すること普通のたこの比でない。
  - 一、普通見られるものは全部雌で卵巢を有し、雄は遙かに小さく容易に見當らぬ、形も違ふ。
- 元來此「紫だこ」は外洋性のもので、沿岸に棲むものではない、毎年此頃蛇ダゴの噂が立つが、沖合には一年中見られる。産卵の爲磯近く來たものが濱邊で荒波に揉まれ、浮

### 珍魚川アナゴ

自分が阿武川で發見した川アナゴは、吾國では分布範圍が頗る狭く、且本洲では岐阜縣以西には棲息せないと云はれて居たもので、阿武川では僅かに中津江鉄橋附近にのみ棲息する。体長五、六寸ドンカチに似て、特長は頭も胴も細長く胸鰭が二つに分かれて脊に黄色の斑点様の線を有し、体色の變化の著しい、ハゼ科に屬するものである。先般來獲された魚學の大家田中博士も「川アナゴ」に相違ないと言明された。

(防長日報昭和九年三月三十日)

### 奇抜で香氣な生活をなすカクレ魚

動植物の中には二つの生物が相寄り同居して安全に生活して居るものが澤山ある。それが相互に助け合ふものもあるが、一方だけ利益を得て他は何の返報をも受けぬものもある。之を共生々活と云ひ、其例は可成澤山ある。時こして此共生々活の例に引かれるものにカクレ魚と云ふのがあり、書物によつて其名を知つて居ても、實物を見た人は案外少いものである。私は先日來(昭和十年一月)二尾を探し得たが、兩方とも五寸許の白い細長い魚で眼は割合に大きく、全身に黒い細点が密布して居るもので、以前は「小紋カクレ魚」と呼ばれたこともある。此魚は此近海に産する「富士ナマコ」と呼ぶ堅くて食用とならぬ大なるナマコの体内で、其腸の中に生活して居る、頗る円滑な運動振りで、

きつ沈みつ蛇に似た腹を表はし、苦んで其附近に紫の汁や多量の黒汁や粘液を排出してあかく状態は、宛然蛇が皮を脱いで何かする様にも見られぬ事もない。又一方ではよく見れば、へんてこの見慣れぬ怪しげな章魚がそこに居るのであるから、誰かゞ始め言ひ出し、之を聞いた連中がかゝる場合に出逢つたら、先入主が手傳つて一層其誤信を深めるであらう。たこの研究學者は、此たこは本邦の中部以南で稀に漁獲さる、蛇變じて章魚となるの傳説は専ら本種に關係あるものゝ如し記載して居る。私は熊ミ嚴冬の時期、蛇の地中深く潜り冬眠の際に、指月山の沖合で漁人に捕らせたものを博物館に保存して居る。最後に一言附記して置くが、此たこの体内より時に寄生蟲かと思はるゝ長さ一寸餘の吸盤百もある奇妙なものか發見せられることがある。之は雄だこの右の三番目の手の先の方が切れ離れて入り込んだのである、此珍妙な手の一部に雄の精液が包蔵されて雌に手渡しされた結果で、之が次代のまむしだこを造るに重要性を帯びて居るが、吾々の食用とする普通のたこにはそんなことは無い、只精液の附着せる右三番目の手を雌の体内に挿入するだけである。私は此珍妙な手を二回天佑的に發見したが、過日來館された東大の理學部動物科、農學部水産科學生、廣島高師博物科卒業者に示したが皆々講義では聞いたが始めて見たと喜ばれた。

(秋文化昭和十三年九月号)

其家主の肛門より常に出入し、中々安全で香氣なものである。家主たるナマコは此魚より如何なる利益を得て居るかは不明である、多分無家賃であらう。普通に食用とするナマコの体内には決して見出されぬ。鹿児島や琉球地方には「白カクレ魚」と呼ぶ稍小さい白色で、黒点のないのが産する、之は其地方に産する蛇目ナマコ(脊にジャノメの紋がある)と呼ぶ一尺内外のものとの共生する。兩者共生々活でないからナマコの体の養分を盗むのではない、只宿を借るだけであるから片利共生と呼ぶべきであらう。

(防長日報昭和十年二月六日)

### 黒太刀カマスに似た珍魚

阿武郡六島村字大島の發動船衛生丸が秋市沖の孤島である見島附近で、クロタチカマスに酷似した二尺五寸の珍魚を捕獲し、昭和九年十一月二十日秋魚市場の攤に出したが、この魚はタチの形をなし、鱗の變形が浮き出て、さながら骨板の型をしてゐる。この魚は昨年も捕獲したので寫生して東大の田中茂穂博士に鑑定をもとめたが判明せず、年末に歸された砌、實物について更に鑑定をもとめたがよくわからない、文献にもない珍しい魚である。

(防長日報昭和九年十一月廿一日)

### 稀有の深海魚ソコホーボーゴ 怪魚驚笛



萩市濱崎新町蒲鉾商藤井治義氏は蒲鉾材料の雑魚の中にある珍魚蒐集に興味を有し、是迄數回珍魚を發見せるが、昭和十年二月一日發動船萩丸の漁獲物中より從來嘗て見たことのない珍魚を發見した。此魚はカナガシラやホーボいの仲間のもので、常に深海に産するから底ホーボイと呼ばれ、極めて稀に漁獲せらるゝものである。從來屢々珍魚を得たが此種の入手は今回が初めてである。体形は普通のカナガシラに似て居るが体に鱗なく、脊ビレに大なる黒斑のあること、体全部に小黒点の散在するこゝが目立て違ふ。

此魚ほど珍品ではないが、是より數日前北古萩の養鶏業井町照久氏は鶏の餌料の雑魚中より珍魚を發見した。是は外形が頗る奇抜である驚笛(サギブエ)ミ呼ぶ魚で頭に大なる眼ミ頗る細長い管状の口を有し、脊には長き劍があり稍驚の頭に似て居る淡紅色の美はしき怪魚である。之は熱帯性の魚で此附近では容易に見られないものである。

(防長日報昭和十年二月二日)

鉄魚は鮡と金魚の雜種

過日福岡縣で捕へたと云ふ鉄魚は野生の鮡と金魚との雜種であつて、東北地方の湖水に産するの有名であるが、其他の地方にも時々發見されるものである。金魚ほど美しくないので鉄魚と云ふとの説もある。体色は紅色のものもあれば又青黒いものもあるが、最も目立つのは總てのひれが鮡より著しく長く、殊に尾ひれが金魚の如く長い金魚の

如くに多くに分れずに必らず鮡尾である。其性質は仲々活潑伶俐で容易に捕獲し難いものらしい、鮡同様に食用にもなる。序に記すが金魚は鮡から變つたものであるから、鮡との間にかく雜種が出来る、此他現今では鮡と鮡との雜種も造られ、又金魚と鮡との雜種も出来て居る。

(防長日報昭和十年一月十三日)

萩魚市場に揚つた學界の珍「草アジ」

萩市濱崎蒲鉾商藤井治義氏は昭和十二年三月四日底曳網漁船泰昌丸が見島沖にて漁獲せる雜魚中に從來見たことのない珍魚を發見した。こゝに私に鑑定を求めた。之は學界の珍「草アジ」で魚學者間では興味を惹きたるものなつて居る。稀有のもので、鱈の名を有するも、あじとの關係もない草アジ科と呼ばれる特別の科に屬するものである。外形平鱈に似て色は淡綠色に目立つのは其背腹兩方より頗る幅廣き鱗が恰も扇子を擴けた様に擴がり、之に黄色の細点が密布する、尙不思議なこゝは之を疊めば体の皮膚のひだから成る溝の中に納められ、外部からは見ることが出来る、尙口は一見小くて可愛らしいが之を引出すと長き円筒狀に突出する。

此魚は最初漁學の世界の權威テンミンク及シュレーゲル兩氏が鹿兒島で採集したものにつき、之を學界に發表したもので、其後諸學者が此魚の骨格を調査したが、種々の異な

る部類に屬する珍魚類の特徴を兼有するので系統上頗る興味深きものと認められて居る。極めて稀に漁獲されると云ふので、今回の入手は宿望を達したわけであり愉快である。

(長州新聞昭和十二年三月六日)

雪振袖魚と鮭ガシラ

昭和十二年七月世界的珍魚「龍宮の使」の一族である極めて稀に見られる美しく且つ怪し

く魚、雪振袖魚及鮭ガシラが阿武郡見島沖に越ヶ濱で捕れた雪振袖魚は長さ二尺三寸余(七〇セ



第八圖

石川千代松博士を記念する名が附けられてある。(第九圖参照)  
(長州新聞昭和十二年七月八日)

### 珍奇な蝦

萩市の一發動機船は昭和十年三月長崎縣五島沖で漁業中色彩の美しい珍奇な蝦を捕獲した。此蝦は日本ネフロックスと稱する蝦の一種と見られてゐるがネフロックス種は六種あつて其二種が日本海一帯に棲息してゐるも、右の蝦は此二種にも入らぬ代物で或は外國産に入るか又は新種類か何れとも判明せぬので、中央學界の専門家に鑑定を乞ふことになつたが、此蝦は非常に美味であると云ふ。

(防長日報昭和十年三月廿三日)

### 珍味の蝦新ネフロックス

靜岡縣附近の深海に産するエビに日本ネフロックスと呼ぶものが居る、外形は稍手長エビに似て一層大きく又雌雄共に手が長いのが此附近の手長エビと異なる又餘程美しくもある、其上美味であるので同地方ではイセエビの代用として喜ばれて居る。此仲間は世界に五種類あつて四種は外國産で只一種が日本産であるので、學名をネフロックス、ヤボニカ即ち譯せば日本ネフロックスと呼ぶのである。昭和十年三月對州附近の漁場に於て捕獲した此類のエビを發見したが、從來のネフロックスとは種々の點に於て異なるので、斯界の權威中澤理學士に寫生圖を添へて其報告をしたが、其返事に自分は日本海産のものを見たことがなく頗

(雌)若し之が雌であるなら第三對目の根元に孔があつて之より産卵する。其他第五對目の脚の尖端を見て、ピンセットの如くなれるは雌で、之で卵を挟んで腹に運んで抱く。尚は腹にある泳ぐ足を見ても、雌の方は複雑に出て抱卵に適するやうになつて居る。皆適應の結果に外ならぬ。

豫め雌の標本を用意して、實物で説明した。

(秋文化昭和十六年五月号)

### 田中博物館に寄贈されたイヌゴチの標本

先日私の博物館を參觀した下關市梅光女學院院長廣津藤吉氏は本日(昭和十二年十二月四日)頗る珍妙な怪魚の標本を寄贈せられた。長さ一尺二寸位頭部は鬼に似、体は八角にて之に無數の刺(トゲ)があり、鱗も相當大にして妙に擴がり、之が宛も倒立ちした様に月形に曲げて乾燥せしめてあるので、誰が見ても之が本當のシヤチホコと呼ぶ魚かと問ひそふな魚である。私は之を熊魚科に屬するイヌゴチと呼ぶ魚と鑑定した、オコック海に産する魚で日本海にても極めて稀には得られるものである。珍妙な形態のもの故何所かで乾燥せしめ、飾物として保存せしものであらう、誰にも珍らしく感ぜらるゝもの故、博物館の標本として好適のものである。廣津院長の御厚意を深く感謝して居る。

(長州新聞昭和十二年十二月五日)

る興味あるものであるから標本は大切に保存せられたし、又今後標本の借用を依頼する際には宜しく頼むることであつた。其後一尾の美しい標本を送つたが其回答にまでも珍らしきネフロックスよ、これは實に有難い標本である。御厚志を深謝すると鄭重な禮狀が來た。此エビに限らず日本海方面の水産物は分布状態が不明のもの多き故、珍物と平凡なるものとを問はず報告を望むと、各専門大家より依頼を受くるのが常である。(防長日報昭和十年四月三日)

### 脚の根元より産卵する蝦

下等動物の産卵孔の位置は、一般人には頗る珍妙な感を與へるものが少くない。今回萩沖の大島で捕れた日本海では稀有の伊勢エビ、而も甚大なもので、それが生きてはねまはり、且つ實に見事な(老成のため)色彩を有するので、早速諸官衙學校等に於て觀覽せしめたが、皆異口同音に「之は大きい」「之は見事だ」「此何とも云へぬ高尙な原色を保たしむる方法はなきものかなあ」「激賞された。稍々研究的の人は、「之は雄ですか雌ですか」「問はれるのが型の如くである。自分は「雄である」「答ふれば、「どうして判るか」「反問されるのが常である。此際自分は次の如く答へて納得させた。

(雄)エビには五對の歩行する脚がある。其第五番目即ち最後のもの、根元に此通り孔を有す。之が内部の精巢(學丸)に通じて居る。之が其証據である。

### 貴重な魚の化石リコプテラ

熱河戰で偉勳を樹てた萩出身都城隊長長志道保亮大佐は今回秋中學校その他市内二、三校に對しリコプテラミ稱する約四千萬五百万年前に熱河地方の硬骨魚類の祖先と目される化石を寄贈することになつた。右のリコプテラは北平の中國地質調査所の有名な地質、古生物學者グレイボー博士の研究に依り命名されたものであつて、下部白亜紀のものと思はれる、恐らく年數にすれば少くも四千万五百万年以上も昔に淡水の湖の中を自由に游泳したものとされ、現代の硬骨魚類の祖先型のもの知られ、硬骨魚類が淡水から發祥したことを証據するもので、極めて重要且つ有名な化石である。

このリコプテラの發見に依つて熱河省の朝陽から陵源地方は中生代末、白亜紀の頃地殼變動に依つて一大湖水を形成し、羊齒類、蘇鉄類、その他の樹木は湖の底に堆積して炭層となり、現在の熱河省の炭田を形成し、この炭田中より發見採取された此の種のものとしては驚くべき原因を保存されたものである。

(防長日報昭和九年二月八日)

### 數百萬年前の見事な魚の化石

萩市河添山根信一郎氏は令息より送つて來たと云ふ熱河省凌源で得た魚の化石を寄贈せられたが、此は數百萬年前發見

せられた美濃紙大のものである。地質時代の朱羅紀（數百萬年前）のもので、内外の化石學の權威者間に探査されたものである。嘗て南滿洲鐵道會社より秩父宮殿下に献上したこともある。元々其地方の湖水に群棲して居た淡水魚（現今の魚ではない）が水の乾燥と共に死んだものが、地質の變動と共に地下深く埋没し、泥土と共に硬き岩となつたので、其附近に生じた植物の同じ運命の下に出來た石炭と相隣接して存在するが、地の變動と共に後に地表面高く押し上げられたものらしい。兎に角學術標本として好箇のものである。大津郡地方より出づる介の化石を含む砂岩は之れに比ぶれば頗る新しいもので五、六十萬年以前のものである。

（長州新聞昭和十三年一月十六日）

### 長さ約五尺の大馬鹿鳥賊

昭和十三年三月廿五日阿武郡大井村沿岸壺網で素敵に大きな鳥賊が捕れたが誰も其名を知らない、長さは長い手を合して約五尺胴体丈けでも一尺位、肉の厚さが約一寸位もあつた、外觀著しく赤いので中には赤イカ「本名ソデイカ」であらうさか又或人は鬼イカ「本名スルメイカ」に似て居るから鬼イカのぬしであらうなご、噂して居た。之れが本名はバカイカと呼ぶスルメイカ（二番スルメの原料）に近い種類のイカである。赤い色の大きなソデイカと呼ばれるものが折々大敷網で捕られるが、それなら此イカよりも尙大なるものがある。此イカは元來外洋に棲むもの

で比較的少ない、今度のは大なる方で鰭の形が赤イカさは大に異つて居る。兎に角珍物として標本保存する事にした

（長州新聞昭和十三年三月廿七日）

### 世界最大四十五貫の大王イカ

過日暴風の後須佐灣で捕れた大鳥賊は胴の長さだけ五尺餘あり、其足の十本中特別に長き二本は三間半もあり、其重量驚く勿れ四十五貫といふ素晴らしい巨大なものであつた。鰭は割合に小さく、其甲も薄く、形は鳥の羽根形である此イカは世界最大を以て學界に有名な大王イカと呼ぶ種類で大王イカ科と稱する特殊な部類に屬する。平素は太平洋及本邦の沖合に産することが知られてゐる。之と伯仲の間にある世界最大のイカで著名なものは北海道から千島方面の沿岸に暴風の後に往々打揚げられることがある入道イカと呼ぶもので、胴長は尙長く七尺にも達するが、其長き二本の足は胴長に等しいから足は遙かに短い、之は別の科に入られる。從來萩近海で捕獲された巨大なイカは赤イカ（本名ソデイカ）及びバカイカと呼ぶもので、胴長三尺位のものである、赤イカは一尾拾圓のものを見た事もある、此大王イカは保存が容易でないから、此イカを捕獲した漁夫がイカと一緒に撮影した寫眞を一葉入手して私の博物館に陳列して、かゝる偉大な怪物が實際萩近くに來たことこの證據したいと思ふ。

（萩文化昭和十六年二月号）

### 毎年三月萩の川で父親が造巢育兒の勞を執る魚の話

毎年三月の下旬、白魚の溯る頃、大き二寸餘の形稍々アジに似て脊にも腹にも鋭い針を持つ奇魚が海から上つて水田の側の小川に入り込む。偶々之を入手する人がある、平素見慣れぬ魚であるので、不思議がられ鑑定を求められるのが常である。此魚の名は絲魚（別名トゲ魚、タアジ等）と呼び、父性愛の發達せる習性の奇なる魚で、主として北日本に産するもので、萩地方に産することは魚學者間には知られて居ないやうである。萩で之を實見したのは大照院附近の小川で、雄魚が水草の根なき集めて泥の中に丸形の巢を造り、成熟卵を有する雌を誘ひ來り、其中に産卵せしめ、後之に精液を注ぐ。（魚の精液の製造所は他の高等動物と同様墨丸であるが、魚にては通常白子と呼び、河豚に於ては美味で知られてゐるが其機能を知らぬものが多い）其後次々と卵巢の發育せる雌を誘引して産卵せしめ之に射精し、最後に自分は其巢の口の附近に陣取りて卵の孵化する迄は終始護衛の任に當り、若し巢に危害を與ふるものあらば、鰭を起して特異の針（脊に三本腹に二本）を起立せしめ、突撃を試むる争闘性の旺盛なるものである。かくして稚魚現はれば稍々暫く之を監視しながら生存を繼續するが、早晚皆死に果てるを例えず。稚魚は間もなく河を下り、海に出て成長し、來春再び産卵の爲め河に上る。

されば鮎と同様に壽命一ケ年で所謂年魚は獨り鮎ばかりではない、白魚亦然りである。私は壺網に片口鰻（方貫タレクチ）と一緒に數十尾捕れたのを標本としたことがある、食用にしても相當の味がある。伊勢美濃地方には海に下らず一池沼等に居る種類があるが、それは形態萩のより短く太い異型で、之を陸封型と呼ぶ。

（萩文化昭和十四年三月号）

### 萩の白魚は何時頃何所で生れるか

萩の白魚の生れた所や、其最後の地が何處であるかは不案内の人が多い、中には白魚は何の子であるか云ふやうな質問さへ受けることが屢々ある。要するに萩の白魚はハゼ科に屬する小形の魚類で、稍々大なる方が雌で、卵を腹に抱き、産卵のため雌雄群棲して、晝夜共に産卵の目的で溯河するのである。私の研究した所では阿武川に於ては川島區の兩堤の中間の沿岸で、満潮時には堤分を含む水の通ふ地點の砂礫のある場所に於て、拳大の礫の砂中に埋れる物を選び、雌雄共に深く砂中に潜り込んで、其礫の下面に卵を粘着せしめ、雄は之に射精するのであると思ふ。其後砂中に於て共に斃死するので、經驗家は白魚の死體が砂利の中から出づるがさうかとか、或は川島の或人が白魚は慇巧な奴で、寒い天候には皆砂中に潜り込むなど云ふのを聞いたことがある。之は此産卵並に其後の状況を立證するものと思はれる。一昨年の五月二日に産卵地に於て、これぞ

こ思ふ礫を一々起して見たが、不思議にも其の石を起す際に白魚の非常に瘠せて、頭部の稍々赤みを帯びたのが逃げ出す石に限り、卵が産み付けられてある、中には既に孵化しかけてびくびく動くものもあつた。此逃げ出る白魚は多分雌であつて、永く其卵を守つて居たのではないかと思ふ。其後稚魚は海に下り、夏期盆頃には既に四五分位に成長し、時々鱸の幼魚と共に前小畑の灣内で曳網に入るのを見受ける。これが段々成長し翌年二三月に溯河するのであるが、仲々成長の遅々たるものである。他處で捕られる大形の白魚は秋の白魚は類縁のなき鮭や鮎に近き魚で泥のある場所に溯り、産卵して死するが、共に一年の壽命で、習性は之によく似て居るが、萩のは死後大に不味となるのが目立つ云はれる。  
(萩文化昭和十四年四月号)

最近萩沖で捕れた記録的の大鯨につきて

最近萩沖の大島の鮪大敷網で記録的な大鯨が捕られた、長さ十メートル餘(六間弱)之を二艘の大船の間に挟んで縛りつけ萩の魚市場に運んだ、此のやうな大鯨を陸揚げしたことは空前の出来事で一時は人山を築いた。普通此近海で捕るものに此べて四、五倍もあるもので、普通二三百圓から四百圓程度で取引されるが、今回の二、三千圓近くの高價で下関方面に賣捌かれた。此鯨は漁人や魚屋は細くちらこか

或者は餘り大なるので長須くちらだなき語り合ふたが、之を正確に鑑定すると小鱸鯨と呼ぶ種類で、専門家の云ふ單のむわし鯨ではない、それよりも稍々小型である許りでなく、種々の點に於て異なる。此くぢらは萩魚市場で嘗て無き大鯨である許りでなく、此種のくぢらにしては全國的に最大なものである。此くぢらが他の多くのくぢらと相違する主なる點は次の通りである。  
一、鯨が小き餌を濾すために使用する上顎にある齒の變形物であるくぢら鬚は全部白色である。  
二、前肢に相當する胸鰭に幅廣き白色の横縞がある。  
此鰭の特徴だけでも他の鯨類の全部に決して無きことである。鬚の全部白色なるものは他に兎鯨(一名コク又は青鯨)と云ふのがあるだけである。最後に附記して置きたいことは此くぢらを解剖するに鼻孔より古きタオルが數枚現れた、之は窒息せしむるために漁夫が鼻に栓をして呼吸を止めたのである、平時此鼻孔より吐き出す空氣の中に含まるゝ水蒸氣の凝結して霧の如く白く見ゆるのを潮を吹く誤認するので、決して海水を噴き上げるのではない。此くぢらは雄であつたので、乳房を見るにこが出来なかつたが、雌性の生殖器を具備して居たのを見た。私は此最大なる小むわしくぢらの白色のひげ全部を顎より取りはづし、美事な大なる標本を造つたが仲々骨が折れた。  
(萩文化昭和十四年五月号)

雄の腹で卵がかえる萩近海の魚六種を得て

私は嘗て父親が造巢育児の本能を有する父性愛の魚イトウが萩に産するここに就て述べたが、今回は父親の腹部に育児嚢が発達して雌の産み落す卵を受け取り、それに射精し、其後卵がかえて稍々發育の後、母体ならぬ父體より泳ぎ出る奇なる習性を有する魚を紹介しませう。それは外形が皆小形で二三寸から一尺位の細長い魚で、特に注意を惹くのは、体壁頗る堅硬で恰も甲冑を着けたかのやうな外觀を呈し、漁人も魚屋も魚の仲間など氣の附かぬものである。其中の或者は顔の形が馬に似て居り、又全形稍々龍に似たところがあるので海馬或は龍の落し子と呼ばれ、西洋でもシーホース即ち海馬の名がある位である。又或者は兩端尖つて細長く、堅いとこは揚子(ヨウジ)に似寄つて居るに云ふので、揚子魚の名が附けられてある。大抵海馬のやうな波靜かな所で、アジ藻など茂れるところに棲息し、中には其細長い尾を海藻に巻き附けて居るものもある。一般に体色海藻に紛れ易く、所在を暗まして居る、海馬の方は布袋腹をして居るのは雄で、其前方に小さい孔を開き、之より卵が入れられ、又種魚が泳ぎ出るが、揚子魚の方は雄は腹に長い溝があつて、其中に卵を抱いて居るのが、外部から見られるので、素人目にはその方が雌であると思ふのが普通だ、私が此方が雄であると説明すると、不思議がらぬ

ものはない。今私が萩近海で得た此類の魚の名を、稀なものと、其尾を巻き附けるものとを表記するに左の通りである。  
(一) タツノオトシゴ(巻)  
(二) サンゴダツ(巻)  
(三) 揚子魚  
(四) 火吹揚子  
(五) 石揚子(稀)  
(六) トゲ揚子(巻、稀)  
(五)と(六)は全国的に割合に少いものである。  
(萩文化昭和十四年七月号)

卵を口内に頬張つてかえる迄斷食する萩近海の魚五種

私は前號に於て、雄が自分の腹の嚢の中に雌の卵を受取りてかえる迄大切に保護する近海の父性愛の魚六種につきて述べたが、今回は更に親の愛の深刻なる題目の通り魚につきて述べたいと思ふ。丁度昨今の夏季にそれが行はれるので、此節ならそれが實見される。蒲鉾屋が取扱ふ雑魚の中に天竺鯛と呼ぶ二寸許の鮨に似た形の小魚がそれである。私は卵を喰へた實物を三つ見たことがあるが、其卵は普通の海魚の卵の如くにバラバラに離れて海面近く漂ふの趣を異にし、卵粒集りて蠶豆大の塊となりて、口内に喰へるに好都合に出来て居る。それは各卵に互に繊細な粘

液の絲によりて結合されて居て試に其一端を引張つて見る  
ミ、卵の間の連絡が透明な小絲に依て巧妙に連結されて居  
るのがよく判る。此卵塊を口に頬張り、かえる迄食を取ら  
ずに世話をするのは主として其雄である。

今一つ此節殆ど毎日の如く雑魚の中に見られ、海の金魚  
とも呼ばれる美しき二三寸の鮎型の魚に念佛鯛と呼ぶのが  
居る、之は雄も雌も共に同様のことをなすが、過日來鮎網  
で捕られた小鮎の群の中に、桃色の美しき其卵塊二十許  
を得たことがある、中に一つ黒みを帯びたのがあつたが、  
それはかえかけて居た、之はどうしたこゝか云へば、此  
魚は危険だと思つたと卵を口外に吐き出す習性がある、此本  
能は種族維持の上から大切なことは勿論である、果して其  
鮎の一バラの群中に親魚の若干が混じて居つた。此習性を  
有する魚が此近海で私の蒐集せるもの五種あるが、皆頭部  
に硬き耳骨があるので、地方により石持ちの方言がある位  
である、念佛鯛は頭をとり去り佃煮にするこゝがある。

### 不可解なるタナゴの胎兒の發育

(秋文化昭和十四年八月号)

人間は無論、ネズミ・蝙蝠・鯨・イルカ等苟も乳で育つ動  
物の胎兒は、其胎兒の最初期である卵が肉眼で見られぬ程  
極めて細小であるため、その卵内に貯へられる養分も亦頗  
る僅少なので、發育の極めて初期より母体の一部に連結し  
、母体より營養を得て始めて發育を遂げ産み出さるゝが常

似た細長い極めて薄い小胎兒五十二尾が居り、臍嚢内の養  
分を殆ど吸収し終つたものであつた。之を完成した生まる  
頃の胎兒と比較すれば、容積から云へば何十分の一云云  
ふ小形のものであつた。爾後の發育が今以て學界の謎かは  
知らぬが、私は此等の胎兒を取り圍む周囲の複雑せる状態  
より推察するに、爾後の發育生長は専ら輸卵管の壁より分  
泌する養分に依ること、恰も胎盤を缺くカンガルーの子が  
育囊で育てられる以前に頗る不完全な形で生れるが、それ  
は子宮内壁の分泌物で養はるゝと同じではないかと思ふ。

(秋文化昭和十六年四月号)

### 甚しく違ふ萩の魚の方言

最近農林省から新しく多數の魚の公定價格を官報で告示  
されたが、萩附近は特に方言が違ふので、各方面から魚名  
の問合せが連發され、其應答に忙殺された。縣水産課より  
も本縣並に他府縣の名稱の依頼を受け、全部二百近くのも  
のを通知したが、今回は魚屋などが丸で外國語のやうな  
之は通譯して貰はなければ見當がつかぬなど云ふ四十近く  
のものを次に示すこととした。

(官報名)	(萩の方言)	(官報名)	(萩の方言)
きしはた	アカミズ	しいら	マンサク
ひめじ	キンタロウ	かわはぎ	メイボ
めじな	クロヤ	たかのは	キコリ
あいつ	バリ、オイシヤ	まはた	ヤナセ

である。(二)の例外はあれど、然るに鳥類には胎生は皆無  
であるが、其他の種々の階級の動物は卵生が普通なれど、  
種類によりては胎生するものも可なりある。母体とは何  
の連絡もなく、最初母体から卵に與へた養分を吸収して始  
めて成長するのであるから、胎生であらうが、卵生であら  
うが、孵牝するまでの場所の相違で大した相違はない。そ  
れで蛇類のまむし(ハミ)や、鱈類の大部分、赤エイ類の大  
部分、其他メバルやカサゴ(方言ボテ)昆虫のアリマキ、介  
類のタニシなど普通人の知る動物でも随分胎生するものは  
あるが、其胎兒の大小は、其卵の大小を支配する養分に基  
くので、大卵からは大胎兒小卵からは小胎兒が生れる。メ  
バルの如きは小卵であるため小胎兒が何萬も多數生れ、ネ  
ズミ鮫の如きは鱈よりも大なる胎兒を大抵四尾宛生む。從  
て其卵の甚大なことが想像される。然るに毎年四月頃に胎  
生するタナゴ(淡水のタナゴではない)は、八寸位の親から  
一寸五分位の鮎型の胎兒が四五十も生れるのは著しい事實  
だ。嘗て私の博物館を見學した東大水産科の一學生は、此  
胎兒を見て「之が如何にして斯く大型に成長するかは今以  
て不可解だ」と云つたことを記憶する。其卵の大きさを確め  
たく機會を狙つて居たが、何時も入手する頃は胎兒の完成  
期で失望した。今年僥倖にも二月九日云ふ早期に八寸餘  
の一尾の雌を見附けた、(鱈の形で雌雄判別される)早速  
解体した所輸卵管の一部に親に似ぬ稍々甘鯛(クスナ)に

まごうだい	オーバ	はまち	ワカナ
あいなめ	モツ	たまみ	クチビダヒ
ぐぢめ	アカバナ	あら	イカケ
かんぱち	ヒラソ	いしなぎ	カラス
いらまさ	ダボウ	へだひ	セダイ
そうだ	ツン	さうせん	ノメリコ
めかぢき	チシヤ	いら	ミセパン
いしだひ	チシヤ	はりいか	コウイカ
こしようだひ	チシヤ	まいか	シリクサリ
いしがきだひ	チシヤ	やりにか	ヤセイカ
ばしようかぢき	バラ	あをりにか	ミヅイカ
かさご	ガラ	するめいか	オニイカ
まぐる(幼)	ヨコワ	けんさきいか	マイカ
ぎんぼ	カタニギリ	べら類	ノメリコ
いぼだひ	ナツカン		

(秋文化昭和十六年十月号)

### 魚博士が始めて見た喜ばれた 二種の魚鮫肌モンガラと風來カ マス

數年前カワハギ(方言メーボ)の珍種鮫肌モンガラと呼ぶ  
全身逆釣で被はれ頗る粗雑で、色彩は青空の色をつくりで

、之に圓形の小白斑が體全部と總ての鰭にまで散在する美麗な魚を相島沖のシイラ網(マンサク網)で捕獲したことがある。之を新進の魚博士蒲原稔治氏に通知した所、同氏は其著書に、外國書より轉載の此魚を掲げてゐるも、實物を見たことはないので、今後入手の際は是非分譲を頼むとのことであつた。今秋見島沖のシイラ網で久し振に此魚が捕獲されたので、之を進呈する序に最近底曳網の雜魚中より採し得た風來カマスと呼ぶ鯖カマスをつきませた様な深海産の稀有の魚を示す積りで一緒に送つた。此魚は外人ジョンソンがマデイラ島で一回得た標本にネアロツス、トリベスミ學名を附し、發表したもので、世界的に珍らしく、外國でも餘り捕れたことなく、我國の三重縣濱島沖で英國の探險船チャレンジャー號が只一尾捕獲したと云ふ記録のあるもので、多分英國に持ち歸つたものらしく、我國には帝大其他にも實物はないさうである。兩種共面白いものを始めて見て喜んで居る、今後ともよろしく頼むこの禮狀に接した。

(秋文化昭和十六年十二月号)

### 肋骨が外に表はれる稀有の深海魚長太刀カマス

最近見島沖台で捕れた漁獲物中に、實に珍妙なことは、骨が体の兩側の表面に上下一對宛數十本斜に並行して皮膚面に表はるゝ長さ一尺五寸位の奇魚を見出した。それかと

フグと呼び、名稱が相應しい良い名であるが、長崎や和歌山でサバフグと云ふので、之を通名として書物には記載されてある。しかし萩其他此附近ではカナフグで知れ渡つてゐる。此サバフグの一群の中に一尾頗る大型のものが混じてゐるので、私はこんな甚大なサバフグのゐる筈はないと、注視するに、果して之は外觀は酷似して居ても、學者も猛毒視されること云ふ別種の眞正のカナフグであつた。それにしても魚學者が長さ一尺に達すること云ふので、目方も百三十匁内外であるのが、なんと長さ二尺四寸重量一貫三百五十匁で、十倍もある超特大のものである。稀に捕獲されるものであり、且つ危険でもあるので、標本用として譲つて貰ひ、早速剥製標本とした。何故之を一箱に一箱に容れたか云ふに、漁人も魚屋も同一種のものごのみ思ひ込み毫も疑はぬほど形も色彩も酷似してゐるからである。サバフグは無毒で有名で、よく中毒する肝さへ平氣で食ふ位であるが、實際側に居合せた一老練漁人と魚屋はサバフグの大なるものを食ふとよく中毒する、死亡したものさへあるなご話し合つてゐたが、私はそれは猛毒のカナフグの大なるものをサバフグの大なるものごの誤認したのではないかと思つた。サバフグは誰にも常に目撃するが、そんな大型にはならぬが、カナフグは稀に入手するもので、學者には詳細が知られぬので、一尺位と發表すれど、私は昨年も見島沖で底曳網朝日丸が捕獲した一貫目位のを入手した。之をフオ

云つて決して瘡けた病的のものではない。体色は稍々紫色を帯びた黒色で、頭部は齒の鋭く太いこと宛ら太刀魚に似て居り、胴は鰭位であるが、脊鰭の骨が多數で、而かも強く長く、其の膜の白黒斑紋の鮮やかなのが目立つ。此魚は嘗て約十年前位前に一回入手したことがあり、當時の東大の魚學の第一人者田中茂穂博士に寫生して報告し、又我博物館に陳列せるものを示したことがあるが其名も不明であつた。其後土佐の深海で有名な御座瀬(ミマセ)に於て、此魚が一尾捕獲されたのを、新進の魚博士蒲原稔治氏が、之まで誰れも知らぬ新種として、學名を産地に因み「ミマセア・タエニオソマ」(和名長太刀カマス)と命名し學界に發表したもので、稀有の深海魚である。此珍妙な骨は此魚の仲間共通な上下兩肋骨中の上部に位するもので、普通はそれが筋肉にある筈のものが、此魚では外部に露現するのが特徴で、下部の肋骨は内臓を圍むこと、普通の魚と同様である。

(秋文化昭和十七年二月号)

### 酷似する二種の河豚(猛毒)

去月秋市越ヶ濱より萩の魚市場に大量の河豚を運んだことがある、其大部は河豚黨の喜ぶトラフグ(方言ホンプク)であつた。二箱だけはサバフグ(方言カナフグ)ばかりであつた。此河豚は極めて普通のもので長さ一尺弱脊面は稍々黄金色、側面は銀白色で、地方によりキンフグ又はギンルマリソ漬にして標本としたのを九州帝大の水産學者に見せて、之は見事な標本だと喜ばれたことがある。之を採集したときも毒フグには氣附かず見るもの皆異口同音になんご大きなカナフグ(萩の方言)だご驚異の眼を張つた位であつた。最後に兩者の見分け方を簡単に申せば、眞正のカナフグは皮膚が全部滑かであるが、無毒のサバフグは頭や腹に微細な刺があるので觸れて見ると判る。

(秋文化昭和十八年二月号)

### 甚大な熱帯魚カラキワシを捕獲

最近秋沖大島の大敷網で、外形カタクチキワシ(方言タレクチ)に似た長さ約一メートル目方一貫百目、全身特異の銀白色の大鱗で輝く大型の珍魚が捕獲された。漁人も魚屋も嘗て見たことのない珍物ゆゑススキの畸形であらうとか、鮭のまがへ物さか、種々の評定で賑つた、それも無理からぬことだ、此魚は熱帯に産するもので、本邦では稀に太平洋岸の南方で捕れた記録のあるもので、カラキワシ(唐鰯)と呼ぶカラキワシ科の魚で、キワシやニシンと同じ科のものではないが、縁の遠いものではない。此魚に特筆すべきことは、其幼魚が親魚とは斷然形態を異にし變態の著しいものである。私も數年前秋頃萩のシラス網で偶然幼魚一尾を採集し、喜んだことがある。有名な鰻の幼魚と同様に柳葉狀に細長く扁平で、而もクラゲの如く無色透明、鰭一つ有たない、學界では之をレプトセファルス型と呼ぶ

が、鰻の幼魚と目立ちて違ふのは、只二又の尾緒の有ることである、兎に角見事な珍品であるので、早速剝製標本とし、目下乾燥中である。尙附言するがこの甚大な熱帯カラキワシは日本で捕られた最大のもので、従來の記録では最大二尺三寸であつたが、私の標本は三尺二寸五分で、魚學者に通知したら其成長ぶりに驚かれたやうだ、要するに日本一の大キワシである。

(萩文化昭和十八年七月号)

### 型破りの二種の大毒蛇

海蛇の名を以て呼ばれるものに分類上二つの大別がある一は爬虫類即ち蛇、龜、トカゲ、ワニ等の仲間にも属するもので、他は魚類に属するものである前者は水中に棲息しても、海龜や鯨の如く、時々水面に浮び出で、肺呼吸をする必要がある。又悉く毒蛇で猛毒ではないが、毒腺と毒牙を有する、尤も口を大きく開かない、従つて人に危害を與へるやうなことはないといふと云はれて居る。出雲地方で有名な龍蛇(本名脊黒海蛇)や、琉球で有名なエラブウナギ(薬用)などは此蛇類の海蛇で、本邦に約十種許知られて居るが、大部分熱帯地方の海に棲息する。何れも餘り大



なるものはないが、數年前の冬琉球台灣に棲息する黒頭海蛇と呼ぶものゝ頗る大なるもの(五尺七寸餘)が萩市倉江の海岸に漂着したことがある。標本瓶の中にあるものを見て餘りに長いので、二つ居るか之間はれたことが屢々ある。昨年東大の水産科の學生に示したことがあるが、之は大きいと驚かれた。東大の標本室にも備へ附けてあるが、それは遙かに小さいものであると語られた。其後歸京して蛇の研究家に此話をされたら、それは實に珍品だと言はれたそ

うな。寫真にある一對の素晴らしく長い怪物は萩地方のもので海蛇と呼び、氣持悪がるものであるが、これは魚類に属する方で、就中鰻に縁の近いものである。萩近海には數種産

するが俗人は單に蛇の仲間、海中に棲息するものとのみ思つて之を忌み、魚だと思ふものは殆んどない。それは体が鰻に比して頗る細長く、且つ鋭い齒を澤山有し、尾も鰻の如く平たくなく蛇の如く円くて尖端裸出して鱗に終らぬ。釣にかゝりては手に巻き付き、咬みつくが毒を持つものではない。小指大で長さ二尺位のが折々捕れる、之は盗汗の妙藥だと思はれるものがあるが、普通は之を食用に供しない。私は研究上必要があるので試食したことがあるが、可成りの味を有する、しかし何分小骨が多くて其儘では食はれぬと思つた。昨年可成り大なるものが魚市場に現はれたが買ふものがないので、某仲買

が貰つて、磨り肉として食つたが、ハモ以上に美味であり、殊に其皮の焼物は格別だと賞めた。寫眞は過る五月初旬に秋沖で底曳網で第一捕れたものであるが、長さ七尺三寸五分あり、記録的のものであらう。魚學者の報するものゝ約二倍である、見るもの皆夫婦であらうなど、噂して居た。外觀も多少異なる点もあり且つかゝる大なるものが稀に一對捕れた場合には、雌雄のことがよくあるものであるが、想像は科學研究上忌むべきであるので、解剖し



て見たところ兩者共に熟卵を藏し、白子即ち墨丸の見當らなかつたことは聊か氣抜けがしたやうであるが、又得る所もあつた。

(萩文化昭和十三年八月号)

### 蛇が鰻の肝を食ふた報告を蛇學者はさう感じたか

過る十月七日午前十時頃私は鰻類の王座を占めるイナギ(最も美味高價)の標本を造るため、解剖して其肝の二片(長さ一尺幅一寸五分乃至三寸厚五分)を附近の夏蜜柑の根元に放置し、其後約卅分経て之を仕末すべく、再び其場所に向いた所、之は不思議長さ二尺六寸の黒き蛇(ヤマカ

マシ)が其肝の約三分の一程呑んで、尙も頻りに呑まんとあせつて居た、常に蛙なま生けるもの許り食ふ習性の此蛇

が、生活力なきかゝる内臓を食ふことは、頗る珍妙な現象だを感じ、其現場を撮影すべく準備したが、不結果に終わったので、寫眞の如く別々に携へ撮影した、尙ほ之は自分だけ珍らしく思ふだけでは聊か不安を感じるので、一流の蛇研究家の智囊を探るため、蛇學者理學博士岸田久吉氏に其旨を通知したところ、岡氏の返事の概要は左の通りであった。

貴下の御觀察は頗る有益と存じ、現今日本一の蛇通で現に蛇の食性につき熱心に研究しつゝある今泉吉典氏に紹介して置きし故、岡氏と智識の交換をせられたし云々

其後今泉氏は農學博士内田清之助氏と共同研究に成れる蛇の食性に關する成績を題する、まむし、(ハミ)外四種の普通の蛇の五月より十月に至る數千の胃の内容物の結果を調査したる精細なる印刷物を惠送された。それによると蛇の食物は種類により卵を呑むものを除きては大抵蛙、鼠、小鳥、雛、トカゲ、共喰等であつて、此ヤマカミシは全部蛙類であつた、尙次の禮状をよこされた。

(前略) 此度は蛇の食性に関し御親切なる御教示給はり厚く御禮申上げます實は以前にも極めて小なる蛆が多數付ける蛙等を蛇類中に見た事があり不思議なる事と思つて居りましたが此度の例により疑問が氷解した様にも感ぜられます何しろ實地を見る機会がありませんので此様な御觀察が私共に取りまして極めて貴重な資料である事

ります、前後に兩頭あるものはない。琉球や南支に居る盲目蛇と呼ぶものは頭と尾部の見分がつき難いので、支那では之を兩頭の蛇と呼んで居るやうである。

三、「蛇が脚を出した」といふのは事實でせうか。それは間違ひありません。大蛇には後足の痕跡が存在して居るけれど、普通の蛇には足は決してないのであるが、時として肛門の附近より一對の足のやうなものを出すことがある。是は雄の蛇に限るので、生殖器に外ならぬ。平生は隠れてゐるが、時にはそれが見られることがあつて、それが蛇が脚を出したやうに見えるので、それを見誤つたものである。

四、「ハミ(ヤムシ)は卵を生まずに胎生で親の腹を喰ひ破つて生れる」と言はれてゐることは事實でせうか。蛇は大抵卵生であるが、實際「ハミ」は胎生であり數匹を生む、併し決して親の腹を喰ひ破つて生れ出るやうなことはない。それは恐らく「ハミ」の性質が非常に激しいものである所から、言ひ出されたものでせう。下等動物には胎生のものが少いからよくそんなことが云はれるが皆誤りである。

五、「ハミ」以外に胎生のものが居りますか。臺灣で樹上に居つて、よく人を咬む「青ハブ」や、有名な毒蛇「ガラガラヘビ」等は胎生である。その外海蛇の大部分は胎生である。尤も從來胎生するものであると言はれてゐる。

は申すまでもありません何ぞ今後共よろしく御願申上げます云々

山林局鳥獸調査室  
今泉吉典  
(葦文化昭和十四年十一月号)

### 年頭對話「蛇」

はなして……田中市郎  
きさて……田中助一

あけましておめでとうございます。今年巳の年であります、古來蛇を以て巳年にあてゝ居りますので、巳年の元旦に因み蛇について種々お話を承りたいと存じます。

一、動物學上より見た蛇  
蛇は「カメ」・「トカゲ」・「ワニ」等と同様に脊椎動物の中の爬虫類に屬し、鳥より下等で蛙より高等である。人間や鳥類(恒温動物)等とは違ひ變温動物であつて、平素は冷たいが外界の温度の變化に従つて温かくもなる。蛇は形態や習慣の特異な所から、古來數多の傳説や迷信を生んでゐる。蛇は肺で呼吸もするが、面白いことに、左肺は退化して右肺だけである。

二、古來「兩頭の蛇」言ふのは事實でせうか。  
それは實際あることで、蛇の畸形である。皆頭が二つあつてどちらからでも食物を取ります、萩でも見たことがあつた海蛇の代表「エラブウナギ」は、他の海蛇と異なり海より陸に上つて卵を生むものであることが、最近明かになつた。六、蛇は蛙以外にどんなものを好んで食ひますか。

蛇の種類により一様ではないが普通の蛇は蛙・鼠類・小鳥・鳥卵等を好んで食ふが、其他「トカゲ」を食つたり、同類の小蛇を食つたりする併し稀には蛙の屍体も食つたり、他の動物の内臓へ自分の所ではフカの肝を食つてゐるのを實見した)等を食ふやうなことも私の實見以後蛇學者に始めて判明したのであります。蛇を飼養するには、斯様なものでも飼料にすることが出来るといふわけである。

七、蛇が卵を呑むと高い所から飛び降りて墮すと言はれてゐますが事實ですか。  
それは想像から來た間違ひで、蛇の體は卵が食道のある部分を通過する際、そこに出てゐる脊椎の隆起によつて自然に潰されるやうになつてゐる適應の好い例である。それだから陶器製の擬卵を呑むと死ぬることがある。

八、蛇は幾種類位居ませうか。  
世界中では約二千餘種其内有毒のもの六百五十位居り、日本領土内には約七十種位其内有毒のもの三十種位居る、約十種は海蛇である。海蛇は皆毒牙を持つて居る。



(少数)とシロマダラ(極めて稀)ミが居るから、都合八種である。此シロマダラは一回見ただけで之を知る人は殆どない美しい蛇である。この内往々人を咬むのは縮蛇でこいつは性質が荒く、窮する三人に向つて反抗し、殊に面白いのは、人を威嚇する爲に尻を振動させ、一種異様の音を立てるのである。併しこれは無毒であるから心配する必要はない。俗に肺病の薬として黒焼にするが、蛇食ひの人の話では縮蛇が一番美味しいと言ふ。東京でも蛇屋で之が一番よく賣れるらしい。

#### 十、毒蛇の種類と蛇毒

日本に居る最も激烈な毒蛇は、臺灣産の雨傘蛇ミ百歩蛇ミ「臺灣コブラ」琉球のハブ等で内地のハミや臺灣の青ハブなどは毒の弱い方である。

蛇毒には神経毒ミ出血毒ミの二種があり、雨傘蛇の毒は神経毒で、百歩蛇・「臺灣コブラ」・「ハブ」等は出血毒である。普通には頭の三角形のものが有毒であると言はれて居るがそうミは限らぬ。例へば最も激しい毒蛇である雨傘蛇の如きは頭が小さくて普通のものと同じとも變つて居らぬのである。つまり三角頭に見えるのは眼の後方にある毒腺が発達してゐるのであるが、雨傘蛇は其毒腺が小さいので外形は無毒蛇のやうなが、その毒液の性質が激烈なから恐ろしい。蛇毒は一度毒腺から出されるミ、後一乃至二週間せぬと元通りにならぬから、その期間に咬まれた場合は全く

眼をみはらぬものはなかつた。近々標本に仕立て、博物館に陳列することにする。

(長州新聞昭和十三年四月十四日)

### 須佐沖に日本一の手洗鉢海綿

雄大壯麗甘貫海の神秘に驚かざる

大井村宇港古谷晋次郎氏が須佐沖五里深さ六十尋の海底より不思議の大怪物ながら石膏細工の鐘乳石の模様のものを引き揚げた。同村某氏より前縣議山本勉彌氏に庭の飾石として求められては如何やとの通知があつたので山本氏は態々宅を訪問され、参考までに知らすこのことであつた。私は翌日大井村に赴き實物を見たが、其雄大且つ美觀に驚いた。之は正しく相州鎌倉の沖合でのみ見出される手洗鉢海綿であるが、文献にあるものや東大の陳列館などにあるものに比して遙かに大且つ美で上面は手洗鉢の如く灣入して二斗餘りの水をたゞえに足り、恐らく之は稀有のものであらうと思ふ。年若の漁夫が二人で運んだミ云ふ程である、之が海底に附着して其全面にある無数の細微の穴から水を出させ、食を取つたり、呼吸したり、時には卵も生む動物であるミ話すと、其怪奇に驚かぬものはない。又從來大磯や葉山邊の沖合にしか無いミされたものが、阿武郡の沿岸にかくも大なるものが幾百年も前から有つたのか知られなかつたミ云ふ海底の神秘を今更の如く感ぜぬものがない。附言するが海綿ミ云ふと一般の人は實用の柔

無毒で済むか又は輕くて済むのである。古、昔話のやうに日本に大蛇は居りますか。日本には大蛇は居らぬ。日本でも最も大きいものは青大将で、二米位のもが居る。大蛇類は皆無毒であるから、咬まれても毒の爲に死ぬることはないが、絞め殺されるのである。

古、田中博物館にはどんな蛇が居りますか。

私の所には萩附近に居るものは皆居るが其他海蛇の「エラブウナギ」・「クロガシラ海蛇」・「青黒海蛇(一名龍神さん)」の三種ミ日本産毒蛇中最も毒性の烈しき臺灣の雨傘蛇ミ最も毒の弱い青ハブと世界最大の「大蛇」ミして有名なブラジル産「アナコンダ」の皮とがある。此蛇は十米以上になるミ云はれる。

(秋文化昭和十六年一月号)

### 日本海から大松葉蟹

昭和十三年四月十三日萩市濱崎底曳網船祐生丸が對島附近で捕獲したグロテスクな大ガニを貰ひ受けた。此は從來相模洋で捕れると云はれる松葉ガニの素晴らしい大なるものであつた、甲の幅も普通のものゝ約二倍で百五十ミリであるが、夫れよりも特別に目立つものは其はさみの特に大きく珍妙な形をなせること、他の足全部に先端の鋭き長き刺が剛毛ミ共に密生せることである。其はさみは左に比べて右が著しく大形にて且厚く如何にも重たげに見え、其色は黒く、見るもの一人として其怪奇と恐ろしさに驚異の

軟な弾力のあるものを思ひ出すが、あれは現今知られて居る二千五百種以上もある海綿と呼ぶ下等動物中の骨組のやさしいものを日光にさらして其肉を去つたもので、其種類の海綿は地中海と米國とに十種位ある

第二十圖



此手洗鉢海綿は中の骨片が硝子質で、形は星

形や金米糖形で實用に供せられるものではない。因に自分がかゝる逸物は是非自分の博物館に備ふる必要があるから先方では記念に保存したいと云ふのを三回大井村に赴き遂に入手することに得た。(長州新聞昭和十二年九月十八日)

### 復又捕れた手洗鉢海綿

先日須佐沖合に棲息せし稀有の大海綿（手洗鉢海綿と呼ぶ下等動物）が捕れたことを報じたが、其後多くの漁夫に其寫眞を示し、之に似たものを何所かで見ないかと尋ねて見たが、大抵は初めたと珍らしがるが、或る一人が見島の沖合で嘗て之に似たものが網にかゝつたが、何とも判らぬ怪物だと思つて捨てた話なので、早速其方面を漁場とする長谷川源次郎氏所有の泰昌丸船長に採取方を依頼して置いた。幸にも一昨日其ものを入手した、大さは前者に劣るが形は植木鉢にもなりさうな物で、手洗鉢の名の起りを説明するには好都合のものであつた。前回は自分の調査した所では稀有の逸物だと思へども、此方面の第一人者の感想を聞くのも必要だと思ひ、東北帝大の朴澤三博士に感想並に分布を問合せたが、矢張り私の考へ通りで從來かゝる大なるものは発見されしことなし、又相模洋以外で発見されしこともなし、尙東北帝大の生物學教室に三崎（東大臨海實驗所の所在地相模灣に面す）産のものがあるが、私のより遙かに小形であるこの返事があつた。

（長州新聞昭和十二年十月八日）

### 見島の發動船が捕獲した大海龜

昭和十二年十一月二十九日阿武郡見島の發動船朝日丸の船長が大海龜を捕獲したが、其名が判らぬので鑑定して貰

み秋地方の淡水に棲息するイシガメやクサガメは脊甲に大なるもの十三枚を周圍に小なるものが廿五枚あるが此イシガメには廿七枚ある、要するに此龜は別種の龜ではなくイシガメの特別な變り物であるが、珍らしく且つ美しい變り物で、學術的にも又觀賞用としても價値があるので、當分飼養して廣く公衆に觀覽せしむる積りである。

（長州新聞昭和十三年七月十四日）

### 復も萩に五色の石龜

萩市濱崎赤木某は今回同市鶴江台組板海岸で魚釣り中、海中で五色の石龜を發見捕獲し、當博物館に寄贈された。五色の龜は此程土原の一青年が同區小倉隣氏宅裏の阿武川で捕へて本館に寄贈されたものである。從來未發見の珍龜が今夏相次いで發見されたのは不思議な現象である。

（長州新聞昭和十三年八月十七日）

### 萩で捕れた世界的珍龜及石龜

「くさがめ」の別につきて

過日來諸新聞紙上で御承知の通り、萩の松本川で珍妙な五色の龜が捕れた。單に色ばかりではなく甲の數まで違ふ龜の研究で第一人者である理學博士岸田久吉氏の見所では、此かめは從來廣東、雲南、海南島の如き南支那及琉球臺灣に於て見出されたる漢名柴棺龜（サイカンガメ）一名南石龜（南方に棲む意）の一種で内地では極めて稀なばかりでなく、從來の此種類の記録に見出すことの出來ぬ諸種

ひたいと云つてよこした。船中より若者二人が重たけにひこすり出すのを見れば、網の中でもまれて死んでゐる赤海龜の大なるものであつた。体長約一米廿センチ（約四尺）幅八十センチ（約二尺七寸）頭部は一升徳利位で外觀は赤松の老幹の皮にそっくり、海龜の特徴として手足に指はない皆ひれである、脊の甲には海藻が密生し、介殻まで附着し如何にも古びて居り、幾星霜経たものだらうなどさゝやきながら忽ち人山を築いた。此海龜は青海龜（一名正覺坊）の如くに食用に供せられるのでなく、魚食をするので肉に臭氣を帯び利用されぬので、從來標本としても青海龜の如く保存されたものが稀である。時々網に掛るも漁夫の迷信で逃がし又死んだ場合は葬りなどするので見らるゝ場合が少い。私は自分の博物館に保存して一般人に見せたいと考へ、船長に懇望して漸く手に入れた。石龜や正覺坊やたいまい（べつかうがめ）など脊の甲が皆十三枚であるが此龜のは十五枚である。

（長州新聞昭和十二年十一月卅日）

### 珍妙な石龜

昨十三日萩市土原の青年波多野實孝氏が萩市松本川で珍妙な龜を發見し、生捕つて田中博物館を訪問し鑑定を求めた。長さ八寸位で最も目立つのは其色彩の美である、即ち脊甲の色は黒黄緑取混ぜ稍々ベツカラガメに似て居る、殊に其裏面には表面に見られぬ濃艶な色を見せ頭部手足に至るまで黄緑の斑紋がある。更に専門的に其甲板を調査する

の色彩上の特徴があるので、一新變種として之を歐文にて記載し、新學名を附し、汎く學界に發表したいと通知して來た。目下此龜は身体検査のため上京中であるが、論文脱稿次第返送するとの通知があつた。此鑑定につき照會の勞を執られし東大の學生今井氏より、萩からかゝる珍物が出たことは極めて興味深きもので、先生の博物館に一異彩を放つものであると祝ひの手紙を頂いた。

世界の龜の種類は約二百五十種位とされ、大部は熱帯亞熱帯産で、本邦産は約十種位で、海に四種、他は淡水に産し、其中で最も有名で代表的のものは石龜である。此五色龜も石龜と同属のものである。すつぽんは古來食用に供するので俗にほんがめと呼ばれるが、鶴と共に諸種の美術工藝品に嘉瑞とし、賞用せられるものは此石龜である。石龜は日本固有のもので、恰も日本猿が我國の特産であるやうに他では見られぬ。此石龜に時に綠色の淡水産の細長き藻の着生せるものを養龜と稱し、賞用する習慣があるが、別にかゝる龜が居る譯ではない。然し浦島太郎と配し、其他美術的には此形態は神秘的に復た美的であるから古來此現象を次第に誇張し來つた結果であらう。

萩の人達は、石龜と云へば、神社佛閣の池や其他小川などで普通に見られるものが皆石龜と思ふやうだが、いしがめの方は萩には少く、大抵「くさがめ」と呼ぶ方で、別の屬に編入さるゝものである。見島で天然紀念物にせられる程

豊富なかめも全部「くさがめ」で、「いしがめ」は一つも居ない。今簡単に兩者の區別の一端を記述すれば次の通りである。

「イシガメ」は脊の甲の周圍にある小甲板の最後の四對は外縁鋸齒状をなす「クサガメ」は平坦なり  
「イシガメ」は脊甲の中央部だけ縦に隆起す「クサガメ」は中央の外兩側に各一隆起あり  
尙ほ「くさがめ」は悪臭を放ち、分布も日本の外支那にも産す。  
(秋文化昭和十三年十月号)

### 三度も萩近海に漂着した珍無類の甲を有する熱帯性「をさ龜」

最大なる龜として、又珍無類の甲を有する龜として、特に著しい熱帯産の「をさ龜」を呼ぶ珍しい海龜が一昨年來不思議にも萩の近くに三度(越ヶ濱、三見、小原の三ヶ所)も漂着した。斯界の權威者は本州の南部の暖海に稀に來るここがあると云ふ。又元來熱帯産であるが、左程多いものではないとも云ふ。之が三度も一は生けるもの、他は死體になつて漂着したことは不思議である。体長五六尺乃至七尺余で、素晴らしく大なるものであつた。俗に正覺坊と呼ぶ青海龜や昨年私が三見の濱から持歸つた大海龜(本名赤海龜)に比べて一層偉大なるものであつた。特に目立つのは普通の龜類の如く脊に厚き堅き甲羅(十三枚又は十五枚)を有せず、只五本の頗る硬き一寸幅の畝が樟や肉桂の葉脈

### の珍らしいラッコの兒

毛皮類の王座を占めて居るので有名なラッコは北太平洋に産するものであるが、毛皮が高價なので濫獲の結果著しく其數を減じ、絶滅に歸せんとする恐れがあるので、さきに日米英露の四ヶ國の間に條約が締結され、保護を加へた結果近年稍々多くなつた。阿部重市氏は越ヶ濱出身で萩中卒業後、水産講習所に入學本年四月に卒業し、直に農林省に勤務し、五月より千嶋方面にオットセイ及ラッコの密獵を取締るために出張し、オンネコタン島にて是を計らずも得られたのである。阿部氏は東京水産新聞に依り田中博物館の記事を読み、主任技師に博物館の成立につき詳細に説明したところ、大に共鳴され其拂下を許可されたもので、阿部氏は更に東京島津標本部に依頼して立派な標本に仕立たものである。阿部氏は以前在學中にも練習船に乗り南洋方面を航海中、強力で有名なマツカンガニ(一名ヤシガニ)の頗る大なるものを自分で剥製にして持歸り、寄贈されたので同館に陳列し、人目を引くものゝ一つになつて居る。因に中部千島のラッコが氣候風土の關係で毛皮最も優れロンドン市場に於ても最も評判がよいと、現今の相場一千圓乃至三千圓のよし、日本にては主としてオーバーの襟に用ひられるが、眞正のものは少いさうである。尙ラッコはオットセイに似たものと思ふ人が多いが、そんなものでなくイタチの類でカワウソに似て後足の短さが特

の如くに、正しく縦に走り末で集合し、畝と畝の間は平くて厚さ僅かに一分位の薄き甲となり、其上に淡黒色の皮を被り、試に其甲の上に乗れば、龜の体はぶくぶく揺れるのが一奇觀である。体内には脊柱及薄き肋骨が其甲の下部を支持して居る、体内到る所に脂肪が極度に發達し、迎も標本などには造られさうもない。今春東大を卒業する管の今井貞彦氏が昨年卒業論文の資料を得るため來萩の際、私は小原區に漂着した此かめの甲及鱗の一部を参考品として持ち歸つたことや、其後同部落民が海濱に埋葬したことを告げた所、それは惜しいことでした、何しかして其骨體標本は得られないものか、あれは世界何れの博物館でも見られない珍物だと、先生から聞いたことがあると話されたので、私は最近三見明石の濱邊に打揚けた身長五尺五寸の死体につき、随分苦心して其標本を造ることを得たが、此かめを目前に親しく觀察した人は全國に極めて少數であることを確信する。尙私の觀察した所では、動物書に記載の繪圖及記事は實物の寫生及生体につきてなされしものなるかを疑ふものである。最後に附加へて置くが普通の海龜に比して甲が珍無類であるばかりでなく、鱗も大違ひで、又頭や顎の形等も稍々趣を異にして居るので、智識慾の旺盛な方は是非御來館を願ふ。

### 田中博物館に寄贈された兒犬位

(秋文化昭和十四年二月号)  
に發達して居る、長さは尾と共に一米半位に達する。

### 動物學上より見た馬

馬が他の動物と著しく異なる點は多々ありますが、私は其一つとして只一本趾の先端を地につけて歩行する珍妙な動物であることを申上げた。更に此單一のユビも、五本ユビの祖先から長い長い年月の間に、漸次に階段的に減少したもので、此事實は化石が生物の進化を立證する幾多の例の中で最も重要視されてゐます。米國の第三紀層から四紀の最初にかけて之を物語る殆完全な近き化石が現出したことがある。其實物は米國の博物館に保存されてゐますが、之による馬の先祖の形は小犬位で、五本ユビです。それが漸次躰が階段的に大型に變化するにつれて、ユビも退化減少し現代の馬位の大さのものは中ユビ一本が發達して残るだけです。京都の島津製作所では其模型を造り、進化の説明になくてならぬ馬のユビの變化を稱し、高價に販賣してゐます。

此一本ユビの獸類は、馬屬に限られてゐますが、現今全世界に馬屬の獸が何種産するかと申しますと、七つで、其中で家畜となつてゐるものは只三種だけです。それは普通の吾々が云ふ馬と、其外に驢馬が一種、今一つは種子ヶ島の特産で、今は天然記念物に指定されてゐる「ウシウマ」と呼ぶもので、之で三つになり他に野生の驢馬が一種、斑

馬(シマウマ)が三種産するが、之も皆野生状態で、人に馴れません。

騾馬(ラバ)と呼ぶ有名な馬は、牝馬に牡驢馬との雑種で、之は子を産まぬ。前に述べた「ウシウマ」は、餘り知られて居らぬが、之は餘程變りもので、日本馬よりも稍々小く、脚も稍々細く短く、特に目立つのはタテガミもなく、尾にも長い毛がなく、毛は只脊部と體側の上部だけで、腹部にもありません。種子ヶ島では之を牛馬同様に使役するが、漸次減少する傾向があるので保護が加へられて居ます。

(秋文化昭和十七年一月号座談會記事)

### 我博物館内の大東亞の動物 (一)

滑走の上手な獸コベゴ

スマトラの森林に住む猫位の獸類であるが(兎の類)長い四足の間に尾の先端まで皮膚の毛皮が延びひろがり、宛然蝙蝠傘をひろげたやうで、體に比しては面積は仲々に廣い。我國では蝙蝠以外には尾の先端まで皮膚の膜が張られた哺乳類(獸類)は居らぬ。ムササビやモンガは之に類するも尾は連絡はない、此コベゴは鋭き爪で高き樹に登り、常に樹から樹へ飛び移る際に、此膜を落下傘の如くに役立たせ、優に六十メートル位は滑走すると云ふ。昨年始めて一つ我邦に輸入され、未だ何所にもあるまいと聞き、早速我博物館に購入した。東印度地方の密林で滑走する動物には飛カンガル、飛トカゲ、飛雨蛙などがあり、皆急落

の話に、其形状少々手袋のやうであつたと聞かされたが、此者もそんな氣持ちがした。其後猫の死體を解剖したとき、其肝を觀察したが、其形状に變りはなかつた、參考品として保存した。近來カハウソは激減して容易に入手出来ない際これならと一驚を喫した次第である。

(秋文化昭和十八年三月号)

### 稀有の蝙蝠を生捕りて

昨朝機船底曳網船泰昌丸が歸航したので、早速何か珍品の入手はなかつたか尋ねた所、一船員が魚ではないが珍妙なカウモリを隱岐の島附近で生捕つたが、どうして飼育せよいかと、粗製の小箱を出して之たと示す。見るに仲々珍妙な面白い代物である、寄送方を依頼した所、快諾したので、早速持歸り其調査に着手した。果して豫想通り珍品であつた。多年本邦に産する小型蝙蝠類を研究した東大動物の篤學者故波江元吉氏は本邦産を拾數種發表して居るが、其何れにも屬せぬ珍奇な種類であつた。特に目立つのは其尾の長大なることである、カウモリの尾は兩股間に擴がる飛膜に連り、大抵は尾端は其膜外に出でぬを常とす、たまたま膜外に僅かばかり突出するものありても、二分もあれば著しく突出してゐる珍妙なものと特筆される位である。然るに今回入手のものはその尾がなんと一寸一分もあり、宛然小型の鼠の尾を見るやうな破格のものである。尙ほ其顔面を見ると其耳の著しく大且つ奇態をなすこと、

下を防ぐに適した装置が巧に出来てゐる、之もジャングル地帯の適應の現れと見てよからう。

(秋文化昭和十七年九月号)

### カハウソの肝の偽物を見て

新聞の広告で可なり有名なカハウソの肝につき、藥効は兎も角も其眞偽につき多少疑問を抱き、其實物を見る好機を待つうちに、偶々九州其所より大々的に發賣する云ふものが萩地にも入り込み、某家より其眞偽の鑑定を求められたことがある。購買者の信頼を高むるため、念入りにも肝だけでなく、頭部も胸部も皆備はり、肝は腹部正常の位置に置かれ、體諸共によく乾燥した上出来のものであつた。素人には毫も疑ふ餘地もない出来ばへである上に、更に某農學士の證明書も添付されて價格は參拾圓位であつた。五六拾圓位に賣る所もあると聞かされた。私は之を調査したが、之が單に肝だけであつたなら鑑定が容易でなかつたが、念入りの頭部まで添へてあるので、吾々には却つて好都合であつた。私は直に其偽物であることに氣附いた、それは其齒を見て正しく猫であることが判明した。猫の齒は(獅子も虎も)上顎に門齒犬齒白齒が各側に314の割合で以上16本、下顎は各側313の割合で以上14本、全部で30本で、犬やカハウソは遙に多數である。獸類の齒は其種類により、齒の排列の具合や數が規則正しいものである。私の知人で嘗てカハウソの肝を買つたことがあると云ふ人

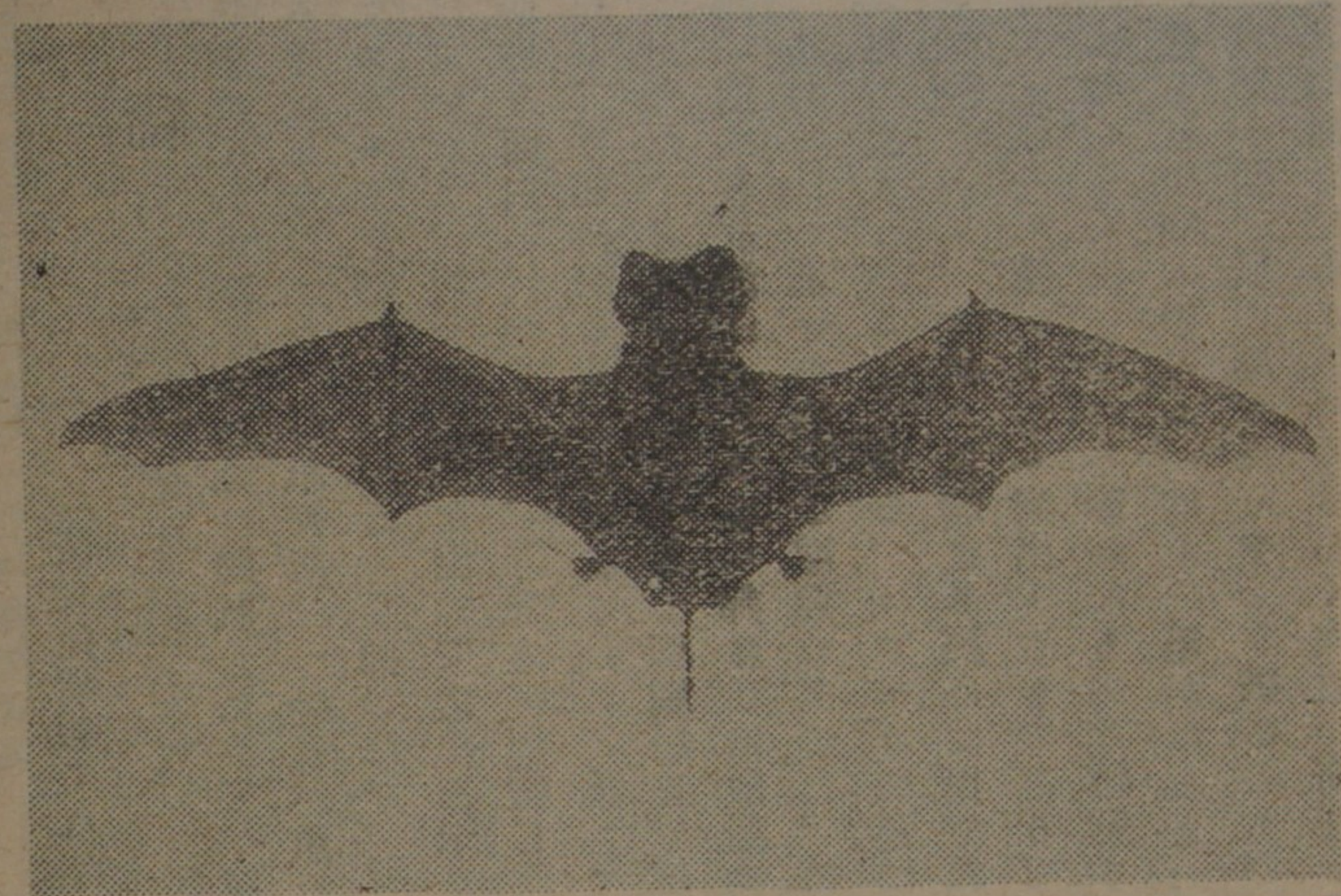
又一般のカウモリの眼の小なるに似もつかぬ鼠の眼に似た例外の大なる眼の持主であるのも注目し値する。最後に其翼の大なることも昆蟲などを常食とする小型のカウモリ類中では最大のものであらう。兩翼を擴げて計るに一尺四寸五分もあり、萩附近並に全國的に普通なカウモリ(一名アブラムシ)とは親子程の相違がある。恐らく學界未知の新種ならんと某動物研究者も見學に來て語られた。彼の琉球臺灣小笠原島等に産し、果實類を常食とする大型の蝙蝠類は數種あるが、何れも尾も無く、齒の形や翼の成立等色々な點に於て相違し、別の種類に屬するもの知らねばならぬ。

(秋文化昭和十九年五月号)

### 内地で最初の北大耳蝙蝠

前號に發表せる稀有の尾長のカウモリの名稱は北大耳蝙蝠(キタオオミ、カウモリ)學名タマリダ・ラトウケイと判明した、内地では最初の發見で、其産地は福岡縣沖ノ島附近で、島根縣の隱岐の島ではなかつた。玄海洋にありて關釜連絡船が其側を通過する漁船碇泊中薄暮一匹の大なるカウモリが飛翔するのを見たが、翌朝に魚箱内に潛伏せるものを捕獲したのである。從來外國人の二三の研究家に依つて臺灣海峡で一回採集せられ、又浦塩と秦皇島で一回得られた位のもので、其數も頗る少數で、我國の斯界の權威者からも珍しがられてゐる貴重な標本である。近く新産地として學界に發表する豫定である。尙今回ののは雌であつ

圖三十第



て胸部に人類同様に一對の乳房があつた、之で幼獸を哺育すること勿論である（萩文化昭和十九年六月号）

### 我博物館の大東亞の動物 (二)

人間を生捕るシヤコ貝

昔支那で七寶の一つに數へたシヤコで、素暗らしく大きな二枚貝である、長さ一米半位頗る厚く、四斗依程の重さ

於て非常に繁榮したもので、古生代のカンブリア紀以降千百餘種の化石を出し、嘗ては既に絶滅せるものと考へられてゐたが、其後現生者が發見され、現在では日本と西印度及モルツカ諸島から六種知られた、即ち所謂「生ける化石」の語に該當する動物である。其中我國には其半分の三種を産し、此點は學問的に惠まれてゐると云はねばなるまい。此介は獨逸人ヒルゲンドルフ氏が神奈川県江の島で購入した一標本によつて、歸國後明治十年之を學界に發表したもので、其後東大臨海實驗所の名物男青木熊吉氏が採集して箕作佳吉博士に提示し、早速金百圓で買上げられた、青木氏は喜びのあまり長者になつた氣がしたので、長者介と云ふ通稱をつけた、現今でも通り名として用ひられてゐる次第である。横濱にゐた外人の標本商人は熱心を買ひ集め、諸外國の博物館に配布した爲め広く知られるに至つたものである。價格は發見當初は數百圓と云ふ高價を唱へたが其後漸次下落したとは云へ、今日でも尙高價に取引される由である。三種は此外にベニオキナエビスと云ふものがあり、之が土佐と紀伊の深海で漁獲されたことがある。今一つはコシタカオキナエビスで、其名の通り脊が最も高く且つ殻も厚い、尤も切れ込みは最も浅い、之が相模沖の五百五十メートルの深海から採集され、其後土佐の深海底より發見された。然るに此最後の種類が嘗て萩沖の見島附近で採集されたのが我博物館に一個ある、嘗て我國介類研究の

のものもあつて、實に世界最大の介である。主として南洋方面の珊瑚礁に固着生活をなし、蛤の如くに移動はしない、干潟の際に誤つて其殻の中に足を踏み入れたら最後、それこそ重い錨をつけて海中に投げられたも同然潮の満つるにつれ刻一刻と死の影が近いて、これ程惨めな死に方はあるまい、實際折々其實例もあるさうだ。此大なる介殻は古來種々の用途があり、肉も食用となる、シヤコの仲間が五種あつて、自分が萩中在職中生徒の父兄より琉球産のものを寄贈して貰つたことがある、普通シヤコと呼ぶけれど、嚴格に云へば、ヒレシヤコと呼ぶべきで、之も相當大きくなるが前者には及ばない。此外ナガシヤコ、ヒメシヤコ、シヤゴウの三つがあるが小形のものである。

(萩文化昭和十七年九月月号)

### 萩沖の生ける化石長者介

(オキナエビス)

數千種に上る數多の介類中に學問的には頗る有名で、今尙ほ依然として其王座を占むるものに、オキナエビス(翁戎)と呼ぶものがある。外形は蝶螺(サマエ)の如き圓錐形の卷介であるが、表面は全く突起はなく澤山の密に平行した横條のある赤色の美しい貝である。特に目立つのは其殻口の縁の中段に、恰も袂り取つたかのやうな、横に深い切れ込みのあることである。我國では相模の沖合凡そ二百メートル位の深海に産する珍品である。此類は地質時代に

第一人者平瀬信太郎氏に報告したところが、日本海に之が産するとは全く初耳だに驚かれたことがある。

### 萩で見つけた我國最初の鯨の條蟲

(萩文化昭和十九年三月月号)

過る四月の中旬、萩沖合で捕獲された長さ二間半の鯨(鯨二種中のコイワシクテラ)の腸内に、珍らしい大じょう蟲の寄生せるを發見した、驚く勿れ長さ約六間、幅は広い部分で僅か六七分、薄いところは紙のやうで、それに無數の小黒點が左右に一対宛散布され居た、それは此蟲の生殖器である。此蟲は從來日本人だけの腸内に寄生した數例があり、其名を大複殖門じょう蟲と呼ぶ、何から人間に來るか一切研究されて居ない、普通人間に寄生するサナダムシは其幼蟲が蛙鱗の肉に居る種類と、牛肉に居るものと二種類が有名である。

圖四十第



名である。他に人間に寄生するサナダムシは約十種位ある。現今研究

節を新生する機能を有す。此標本は体の後端が切断されて居るが岩田博士の談によれば、尙二三メートルは在った筈だ、そうすると十二三米即七間位あつた筈で、素晴らしい大なるものだ。  
(萩文化昭和十五年六月号)

### 憂曇華から出た益蟲を育てた實驗談

約二週間前野外から四星クサカゲロウを呼ぶ美しい緑色の羽衣を着けた約八分許り稍トンボに似た昆蟲を持ち歸り管瓶の中に入れた。それはウドンゲを造るためであつた。古登朝見ると僥倖にも三十七個のウドンゲが出来てゐた。古來吉凶を卜したウドンゲを呼ぶものは細長い柄の先端に楕圓形の粒のあるもので、一寸珍妙な形をなし、それが室内に一夜の間に突然出来、其色まで漸次變化し行くので、不思議かられたものである。併しそれは實は此昆蟲の生んだ型破りの珍妙な卵である。最初黄色で、漸次黒化し、最後の八日目には卵より黒色の細長い恐ろしい幼蟲が現はれ其長い柄をつたひて這ひ廻る。それで卵は白色に變じ、花が咲いたさも形容される。此幼蟲は習性としてアリマキ或は介殼蟲を常食として生育するのである。

私は之を育てるため野外よりアリマキを捕へ來り其管瓶に入れた、其本能として直にアリマキを襲ひ、捕食し、其後日毎に目立つ様に生長する。過日來學校の先生や一般人にも示したが大變興味をひいたやうである。自分が萩中在職當時に電話でウドンゲが電燈の笠に出来たが尋ねられた

### 中國では最初の

### 「姫ハルゼミ」を萩で捕獲

本洲では三四ヶ所にしか産しない、而かも中國一帯には未だ発見されたことのない熱帯性の「姫ハルゼミ」の雌を、今夏萩市魚市場附近にて採集した。此蟬は素人眼には「ツクツクボーシ」の稍々小さいものゝやうに見える。常陸國片庭にては、昆蟲としては珍らしい天然記念物として保護されてゐる。同地にては大蟬を呼び、毎年七月の中旬僅か十日間位を限り普通の春蟬（春最も早く赤松にてギーギーと鳴く）に似て一層大なる聲を發し、集團してコーラスをやるのが目立つ。村民に愛護されてゐるとか。本年夏頃某新聞に今夏は氣候の異變なためか大蟬の聲がきかれぬのが淋しい云々の記事が出てゐたのを見たことがある。今春博物館の標本購入のため上洛した序に、奈良の女高師の標本室を見學した際、校長が誇りげに當地の春日山には色々珍奇な動物が居るらしいと云はるので、動物學専門の教授に何のことか尋ねた所「ヒメハルゼミ」と石垣蟬（琉球石垣鳥産）の産することが知れた。其こととしてしようとの返事であつた。

自分は此「セミ」が季節と云ひ、又形態色彩を云ひ、「ヒメハルゼミ」の雌に該當するものと思ひ、大に喜び早速發表してもよいがと思つたが、何しろ全国的に分布が少區域に限定されて稀有のものであるので、一應専門大家に示す

究されて居る日本のサナダムシの種類は百五十五種の多數に上つて居り、種々の動物から見だされて居るが、鯨に寄生するものは見當らないので、大阪醫大の微生物病研究所の斯界の最高權威岩田正俊博士に此旨を通知したところ、之は初耳だ。實に珍しいことだに喜ばれ、今後研究の歩を進めるため、其研究方法を私に頼む傍、遂に四月下旬態々來萩され、私の採集標本の目且つ完全なるを喜ばれ、學界に發表すべく、全部及一局部（生殖器の異常を呈せる部）を撮影して歸られた。此蟲の体は數千の節より成るが、其節の各に卵巢と精巢（卵丸）を左右に二組宛有し、産卵孔も各節に二ヶ所あるので、其名を前述の通り大複殖門じやう蟲と呼ぶのである。圖にある針程の小さい部が俗に云ふ頭と云ふ所で、此所に吸盤二つ有り、之で腸に吸着し、口



も胃も腸も無く、体全面より營養分を吸出し、又頭部は無限に体の

こどもあつた。又一老人が態々學校に來て尋ねられたこともあつた。室内に生むのは夜間燈火に誘はれ來て其附近に産卵したので、幼蟲は飢え死するが野外なら親が本能としてアリマキの群集せる場所に生むのが本當である。そんな場所を採集した例もあつた、此幼蟲は老熟するに小豆大の白い繭を造り羽化するのを實驗したこともある。

(萩文化昭和十五年十一月号)

### 我博物館内の大東亞の動物 (三)

蟲は思はれぬ木の葉蟲

ボルネオに産する二寸許の昆蟲であるが、翅の形や色彩が楕や栗の葉をつくりであるばかりでなく、體までも葉形に扁平になり、尙其上に六本の肢までも木葉形に平くなりそれこそ眞に文字通り木の葉をつくりで、之れ程に擬裝の上出來のものは無類とされ、よく生物學の書物の口繪に載せてある。見學者の多くは説明を聽いて始めて其存在を知り、自然界の巧妙なる現象に驚異の眼を張るのが常である。琉球や臺灣に産する木葉蝶が早くより擬裝の代表的のものゝ如く教科書にも載せ、又現今でも之を信する人も多々あるやうであるが、其翅の裏は實によく枯葉に似てゐるけれど、樹上に静止する際は其翅の表面の派手やかな美しき色彩を示し、枯葉の色は下面に隠れ擬裝しては何の價値のないことが現地で實驗された。

(萩文化昭和十七年九月号)

必要があると思ひ其儘にして居たが、過日九州帝大より研究資料として私の貯蔵標本の一部を貸せと所望されたので其序に送つて昆虫界の大御所江崎博士に「ヒメハルゼミ」の雌に相違なきやと尋ねしに、然りと折紙が附けられたので、今回安んじて發表した次第である。本州以外では九州七佐琉球等で常陸以北には産せぬ、椎の木を好むらしい。又夜間燈火に集る習性がある。之で萩のセミが一種類殖えて九種居ることなる。即ち次の通りである。

クマゼミ、アブラゼミ、ミンミンゼミ、ヒグラシ、ツクツクボーン、ハルゼミ、ヒメハルゼミ、ニーニーゼミ（方言チーチーゼミ）、チツチゼミ（最小稀有）

（萩文化昭和十六年十一月号）

### 北海の珍鳥シノリ鴨

鳥類の最高權威である内田清之助博士が本州や九州にて極めて稀に見られること云ふ珍鳥であり、又羽毛の模様はカムフラージュした軍艦のやうな形容する奇抜で且つ美しい鴛鴦も顔負けしそな海鴨が先日萩の菊ヶ濱で游泳するのを、萩中の卒業生で畫家である河添區の青年小原清氏が獵銃で打止めた、其羽毛の餘りに立派に且つ面白いので、之を永久に保存したいとて、私に剝製法を尋ねに持参せられた。正しく此鳥は千島や樺太あたりに産するシノリ鴨と呼ばぶものである。當地海岸で捕獲されたとは實に珍らしいので我博物館に寄贈されたいと懇望したところ、小原氏は快

類中の最も精巧な巢を造るものである。嘗て一回他から尋ねられ、研究したことがあるが、其時も椎の木の三本枝の間に造られてあり、今回のと全く同型であつた。此巢や卵を見たもので、其精巧ささ美に驚かぬものは無かつた。

（萩文化昭和十七年四月号）

### 鷹の名をもつ鷺を捕獲

去月中旬萩市より二里餘の川上村字横阪の獵師兒玉直吉氏が附近の森林に於て巨大な猛禽を射止めた。之を記念すべく剝製標本とし、床の裝飾とする積であつたが、友人の勤めにより學術資料となすべく、田中博物館に寄贈することになつた。此鳥は俗名を熊鷹と呼ぶが、鳥類學者は其體軀の偉大なことや其他の特徴よりして分類上鷺類に編入する。其嘴や爪の大且つ鋭きは勿論であるが、其頭上の羽毛は稍々冠狀をなし、特に注目を惹くのは趾の根元まで羽毛が密生せることで、他の鷺類に多く其例を見ざることである。常に野兎や雉山鳥の如き大なる鳥を捕食す、立派な斑紋ある長入な尾羽は箭羽根の賣として珍重され高價である。我領土内に産する鷺の類は九種に及ぶが、此種は我國の特産と云つてよき程外國に広く分布しないものである。一昨年の冬萩に近き三見村の海岸で捕獲され、我博物館に寄贈され、二米の兩翼を擡げた標本とせしものは本名オホワシで主として海岸部に棲息し魚類を主食とする、畫家が怒濤に配して描くものは大抵此種で翼の上部や尾が白く最

よく承諾せられたので、早速剝製標本をなし陳列することにした。此鳥の面白いことは肩から脊にかけて片假名のシノリの三字が白の模様となつてをり、其他にも白斑は大小色々あるが悉く相對的に左右一對をなして居るのが特に目立つ。之を見られた諸君は殆ど異口同音に實に立派だね！、實に面白い斑紋だと、今更の如く自然の美に感嘆されるやうである。

（萩文化昭和十四年四月号）

### 精巧無比なエナガの巢を得て

最近萩郵便局員関屋義雄氏が樺の山奥河内區で薪材を得るため、大なる椎の木三本を伐り倒したところ、其一本の梢に近い小枝の繁れる箇所へ頗る立派な而かも珍妙な形の鳥の巢の附着せるを見附けた。大きさは拳大で楕圓形をなし材料は全部微細な鮮苔及地衣（ウメノキゴケ）と白い蜘蛛絲で構成され、其内面は全部小鳥の羽毛で裏附けられ、實に柔かに温かさうに造られてある。殊に奇なるは其横側に一錢銅貨大の小孔が開かれ、それが親鳥の出入孔らしく、中より大粒の大豆位の曙色をした菓子かと思はれる程美しく綺麗な小さな卵が一つ容れられてゐる、（木の倒れた際に出された残りらしい）あまりに珍らしいので、何鳥の巢であらうと多人數評定したが解決がつかぬとて、私方に問合せがあつた。此巢は正しく四十雀の仲間と、それより尙ほ小さくて尾の長い鳴禽類の柄長（エナガ）の巢で、本邦産鳥も美しい。此度のはイヌワシ同様山地の森林に棲息するものである。

（萩文化昭和十七年五月号）

### 大東亞海の珍鳥二種

私の博物館内に陳列せる大東亞海の生物標本に禽獸蟲魚



色々あるが、今回鳥類の二種につき記載することとした。（一）大極樂鳥之はニユーギニア及其附近の島嶼の特産で、其

圖六十第

名に相應しい極美の鴉ぐらいの鳥である。觀覽者をして何時も「之は立派だ之は綺麗だ」に賞嘆せしむる、嘗ては美しい其羽毛が歐米の貴婦人の帽飾りをして高價に賣買されたこともあつた。此鳥仲々のダンス好きで、獵師が此鳥を捕獲するのは此舞踊に夢中になつてゐるときが狙ひ時であると云はれる。

(一)犀鳥(サイチヨウ)

比島から東印度にかけて棲息する珍妙な嘴の持主で、私は二つの種類を所持するが、こゝに示したのが其代表的のものである。頭の中央に一箇の兜形の大突起のあるあたり、獸類の犀の角に似てゐるので此名がある。又嘴だけでも角そっくりであるのでホルンビル(角クチパン)の別名さへある。長さ三尺位で、殆ど全部が黒裝束で、正に密林の間者云つた格だ。其習性の面白いのは、繁殖期になると、雄は雌の抱卵する巢の周圍を塗りこめて幽閉してしまひ、僅かばかり開いてある穴からセツセと木の實などの餌を雌に運んで入れてやると云ふ親切振りである。

(萩文化昭和十七年八月号)

男裝した牝雉

過日阿武郡須佐町の犬狩坪に於て捕獲した美しい雉を入手したが、山鳥とも雉ともつかぬ變り種であるから學術資料に役立たばと、椿東の河村要一氏より寄贈を受けた。早速に調査したが尾羽を一見するに牝雉に酷似してゐる、脚

大型であるので、直に見分けがつくと、鳥學の權威者は語る位である。此最大稀有の珍鳥の白鷗を萩市菊ヶ濱沿岸で得て、餘りに珍らしいので寄贈した特志家がある。容易に入手出来難い珍物のゑ早速剝製して陳列したが屢々之れは信天翁(アホウドリ)かと問はれることがある、アホウドリでも普通のカモでも腹は白いが純白ではない、全身純白のカモで本邦に産するものは之以外にはない。

(萩文化昭和十八年十一月号)

余が餌養する黒鶴並に鶴閑談

昨年應召軍人が中支で支那人が生捕つたのを貰つたと云ふ(黒鶴支那名玄鶴)の寄贈を受け、其後二年近く我博物館の側で飼育してゐるが、之は往昔本邦に渡來せし鶴六種の中の一で、現今では支那には可なり多數渡るが、本邦では全く見られぬもので、昔とても渡りの途中少數立寄つたものらしいとのこと、一見代表的の鶴、丹頂ヅルに似て、頭の頂上は紅色を帯ぶるが稍々小型で、胴が丹頂の如くに純白でなく灰色である。さりとて現今山口縣の八代や鹿兒島縣の阿久根に多數渡來する鍋鶴の如く黒くはない、一名をネヅミヅルと呼ぶ程鼠色を呈す。丹頂の尾は純白であるが、此ツルの尾は末端だけが黒い。今頃畫家が飛んでゐる鶴の尾を黒く画くものはないが、祝儀用の衣裳などの模様に見る鶴の尾は殆んど黒色である、色の調和が其方がよいのか、又は其誤りに氣がつかぬのであらう。次に此ツル

を注意すると雉に特有の距(ケツメ)を缺く、頸の羽毛は雌の羽毛に混するに、雉に特有の光澤ある紫黒色の立派なのが散在して迎も美しい。其他体の稍々小型な点や、大部の羽毛は雌に近いやうである。雉を專問とする狩獵家連にも示したが、異口同音に之は珍らしいと云ふ。自分の考へでは雌の卵巢に異常を呈し、其分泌するホルモンの影響ではないかと思ふので、早速廣島文理大の阿部余四男教授に自分の考を述べて報告したところ、其返事に畸形の原因につきては御推察の通りであらうと思ふ。生時若しくは死後卅分以内に顕微鏡検査を行つたら判然したらう。兎に角珍妙な現象ゆゑ購入は出來まいかといつたが我博物館に保存したいからと辞つた。(萩文化昭和十七年七月号)

純白且つ最大の白鷗(珍)を捕獲

我國に産する鷗類は約十種餘あるが萩附近及び他地方に産し通常カモメと呼ぶ極めて普通な種は正確な名稱は海猫である。此名は其鳴聲が稍々猫に似てゐるからである。本當のカモメは外國では極めて普通なるも、本邦にては此ウミノコの群に少數混在する位のものである。カモメ類は保護鳥で青森縣や島根縣にはウミノコの繁殖場が天然記念物として指定された所もある位である。此ウミノコよりも遙か大型で且つ殆ど純白なるものに白鷗と呼ぶものがあるが本州では稀有のもので、僅かに神奈川縣や靜岡縣あたりの海岸で寒冷の候他のカモメ群に混じて姿を現はすが、白色

の習性を觀察すると、仲々伶俐で薄氣味が悪い程である。其一例を擧ぐれば、彼が空腹時に其側に近寄ると、何時も型の如くに嘴で土を掘り返し、餌を探す眞似をしたり、次には小石其他食用ならぬ物をわざと口中に入れたり出したりする、又水溜めの壺の中に頭部を突き込み、方々を口先で探り餌を漁る眞似をする、余が去らぬ間は幾回も之を繼續する。恰も啞者が其意中を悟れかしと手眞似するの、こ何の變りがない、可笑しくもあり、又可愛想でもある。其他あれほど迄に敏感なものか驚かされる點が色々あるが略すこととする。

現今我國に渡來する鶴は大部鍋ヅルで、其名の如く胴は黒味勝ちで、頸が白く、頭の頂上も紅くなく小型である。其外に大型で頭上が紅く美しい丹頂が數十羽北海道の釧路國の一ヶ所に常住し、産卵までする。今一種大型で頭の頂上が紅くなく、眼の周圍が紅くて胴の淡黒い立派なマナヅルが鹿兒島縣の阿久根附近でナベヅルに混つて少數來るだけである。江戸時代には此外袖黒ヅル姉羽ヅルなど以上各種も來たものであるが、維新以後濫獲の結果來なくなつたことは周知のことである。最近讀んだ廣島文理大教授阿部余四男氏の隨筆「八代の鶴」の記事中に、前原一誠なごは頻りに萩附近の鶴を獵獲したと云ふ風で云々とあつたのは注意を惹いた。

親の其子を愛する例としてよく雉子や鶴が出るが、それ



は實際で、鶴は特別に其子に甘い様であるが生殖期が近づくと急に態度が一變し、逆に慘め始めるので、親子を別にするのが普通である、之は邪魔になる關係であらう云はれてゐる。丹頂ヅルは四五月が産卵期で、巢は地上にあつて決して樹上に造らぬ。(兵庫縣の出石の鶴山のツル實はコーノトリは一見丹頂に似た立派な鳥で、素人目にはツルと思はれるが、之は松樹上に巢を営み、他では今は見られぬので、天然記念物に指定済である、學問上では眞正のツルと區別してある。)卵は鳩の如く常に二個を産み三十三日目に孵化する、それが鳩と同様に雌雄を限られてゐる、卵の大きさは鶏の四、五倍で、約七十匁位ある。ツルは八乃至十年で成熟し、壽命は其五倍即ち五十年位で、八十年以上は生きぬらしい。ツルの繪に見る通り雌雄の相違は少く唯だ雄の方が頭の紅色の部が稍々廣いのと、鳴聲がコーと一聲で、雌はコーコーと二聲續けて鳴く位のこと。毎年四月頃の産卵期に入ると雌と雄とが翼を一杯に擴げ、兩方から圓形を描きながら寄つて来て、出遇つては離れ、離れては又他の方に出遇ふ、之が孔雀や七面鳥などの雄がする舞踊に相當するもので、之を三、四度繰返す。

(萩文化昭和十九年一月号)

萩にしかない大キジカクシ

萩市笠山、狐島、指月山、倉江等には百合科に屬する大キジカクシと稱する珍らしい植物が發生して居るので、京

下の河岸一町位の所、就中元郡役所の裏が最も多い。菊ヶ濱の西の端、指月山の麓への通路。無田ヶ原。北古萩長泉寺門前の墓地。此他到る所の山野路傍河岸に普通あるものは薄であつて、萩よりも多少光澤がなく、穂が稍茶色を帯びたものが多いやうである、尤も入り乱れて咲き、兩者の區別が手に取つて實驗せねば判らぬ程似たものもある。

(防長日報昭和九年十月廿八日)

誤まられたる萩のアツサ

實はキサ、ゲ

昨年の夏大津郡某氏からの來信に、萩市椿東東光寺内毛利家の御墓所の説明を案内者より聞いた時、或樹木を指し此木はアツサと呼び餘程珍らしい木で、昔は此木で弓を造つたものである、あづさ弓の名はこれから起つたものであるとあつた。此説明は多分貴下より教へられたものだらうと考へましたが、それは事實でありますか尋ねて來た事があつた、其際私は次の意味の返事をした。自分はそんな話をする筈はない、それは若しそんな事を云ふ人があつたら訂正するがよいと豫て思ふ位である、それは誰か、他の人から聞いたものであらう、尤もそれは無理からぬ事で、昔の學者の人達や現代の學者でもそう考へて、そんな事が書物にさへ出てゐることがある。然し本當のアツサはあれではなく樟の木の類ミヅメと呼ぶ喬木で深山に野生し古名にアツサの名がある。故白井光太郎博士が伊勢神宮に奉納

大分類專攻科の田代講師は是を實地研究する爲め九月中旬頃來萩の豫定であつたが都合に依り來萩出來なくなつたので、今回余に宛是が根付きの儘採取し送附方を依頼して來たので、余は廿九日山田區倉江海岸ではを探り箱詰にして田代講師へ送つた。大キジカクシはアスバラカスの一類で盆栽用や生花用にもなる。萩附近の海岸にしか野生して居ない珍らしい植物である。

(長州新聞昭和八年八月三十日)

萩に於ける萩の自生地と萩と薄との鑑別

萩も可なり有名な植物であるが、萩市内では小區域に局限されて自生して居る。又萩に就て實物の指導を受けぬ萩の人達は是によく似て居る薄とを混同するものも、無理からぬことである。先日來色々方面の人に此二植物の實物を示すに、誰一人區別し得る人がなかつた。説明するに始めて知つたこと云つて喜ばるゝが常である。今兩者の正しき區別點を學べば次の通りである。

- 一、薄には穂の一つ宛にある小花に各一本宛の抜き出た毛がある、葉の附き具合が花の根元がない、葉の裏を注意して見るに小さき毛が生えて居る。
  - 一、萩には抜き出た毛がなく、葉が花の根元に附いて居り葉の裏に毛がない。
- 萩に於ける萩の自生地は次の四ヶ所である。橋本橋の上

の弓につき顕微鏡的検査をなし、其正体を確かめられた事がある。私は約二十年前九州の英彦山の頂上権現社の附近で、植物分類學の第一人者牧野富太郎博士から此ミヅメ即ち眞のアツサの本を指して、これがヨグソミネバリであると云はれたのを聞いた事がある。これは此木の別名であるが一寸其名が妙であるから印象が深い。我山口縣下では最高山である玖珂郡の北境寂地山にはあるが、其他にはないかも知れぬ、東光寺にあるアツサは一名キサ、ゲとも云ひ近頃は其果實が腎臟病の妙藥であると云ふので有名になつた。(日本藥局方にも入れられた)丁度サ、ゲ豆に似た莢の實が出来るから木サ、ゲと呼ばれるのである。其葉の搾汁は水虫の妙藥である、一名雷サ、ゲと呼ぶ程雷よけによいとの傳説があるから御生前雷が大嫌ひであつた泰垣院殿の御墓所の側に植えられたのである。萩市内には數ヶ所に栽植されて居るが材がもろく逆も弓材には適しない。元來アツサ弓の起りは餘程古い時代應神天皇の時であつて、其頃甲斐や信濃あたりに其樹が多く産したらしい、之に古くアツサの名がある。今でも大和紀州あたりに之から轉訛したハツサの方言が残つて居るそうなる。何故此本當のアツサにミヅメ(水目)の名があるか云ふに、此木を傷けると其切口より油が出るが清澄さながら水の如しで、ミヅメとなつたものらしい。(防長日報昭和十一年三月七日)

萩に珍らしいカラ松茸を發見

萩市唐樋町萩税務所の向ふ側元都留婦人科醫院前の松の老樹の枯れた幹の三、四間の高さに白色の美しい松茸に似たキノコが二、三本生えて居たので、採取するため近所の梯子を借り受けて登つたところ、その裏側に松の皮に隠れて大なるもの五個一塊になつて生えて居た、最も大なるものは傘の直径十八糎(約六寸)もあつた。此菌としては最大なるものである。風味も外形も松茸に似て居るが、その色澤は松茸に比べて一層立派なので、持ち歸る途中之を見るもの皆それは何ですか食はれますか、何と美事なものではあると不思議がつてゐた。これは松オウジと呼ぶ食用菌の一種で他府縣では五月から見られるので、サマツと呼ぶ地方が多い。眞のサマツでないことは明かである、此附近の山間部ではカラマツダケと呼ぶやうであるが、それは松茸に似て異なるから斯く云ふのであらう。水分の少いキノコであるから其まゝ乾かして標本にすることが出来る、松茸程に柔かではないが美味である。此菌は松材を腐朽させるので有害菌の一つである、嘗て東京築地の本願寺に使用した松材が之がために腐朽した實例がある。

クサマキに就て

(防長日報昭和十一年五月廿三日)

クサマキと云ふ木は強いもの、あの橋本の大橋が掛け替る毎に他の木は取り替るがクサマキばかりは何時その儘で済ますが云々と大工さん達が話すのを私は子供の時から

再三聞いたことがある。其後に於ても萩城の天主閣や堀内邊の土族屋敷の賣り拂はれたとき、大分丈夫なクサマキが使用してあつたから其古材を求めて、新築屋敷の土台に用ひた人が多かつたなど聞いたこともある。現今でも毛利家の菩提寺である樟東光寺の本堂を始め維新前の建物で此クサマキを使用してある所は珍らしくない。先日高杉東行先生遺愛の水晶の玉をクサマキの箱に納めて祀つたこと新聞にあつたが、それは此木が腐り知らずで有名であるからである。郷土の歴史にも關係あるこの木材の正体はどんな木であつて何所に産したのかを大工さんも材木屋さんも一向知らぬ、時には柴であらうと云ふか、又何所に澤山あつたものだなと話す人もあるが皆間違つて居る。私は之につきては相當研究して居るが、先日來二、三の人に話したら餘程興味を有つやうであるから新聞を通じて紹介することにする。

れが昔から有名なクサマキだ話したら、其人の語るには私は以前からあれを聞かうと思つて居りましたが、これですかと如何にも嬉しさうであつた。萩附近では土原防長日報社の前の電氣商會の前にあるのが稍大きいやうに思ふ、林安次郎氏が福川村より移植されたものである、尤も野生ではない。(防長日報昭和十一年九月四日)

日本一の大せんだん並にセンダンと梅檀との別に就て

萩市内に於て「せんだんの木」の可なり大なるものは所々に見られるが元來此木は稍々老成するに朽廢し易く、從つ



圖七十第

て甚しく長壽を保ち驚くべき巨大樹を産することが少いこと云はれて居る。現今此木の巨樹を以て天然記念物として指定されて居るものに徳島縣の「鍛冶屋原せんだん」云ふのがある。(他にはない)然るに我萩市橋區沖原(南明寺近く)には之にも勝る大せんだんがある、目通り最も大きい部分は周圍二丈五尺餘で根本は約六間近くあり、恐らく日本一の大せんだんであらう。最近天然記念物として指定された。兎に角我郷土に日本一を有つことは一つの誇りで欣快事である。

次に此際一言附記すべきは、此せんだんの木に、漢字の梅檀を充つるのは當を得て居らぬ、専門家は皆之を嫌ふ、それは所謂二葉より香ばしのせんたんなら之でよいけれど、我國に野生するせんだん(一名オーチ)は漢名も之とは違ひ、丸で縁の遠い植物である。之は東印度の熱帯に産する大喬木で、其材が香氣に富むので佛像を彫んだり薫香を造つたりする。センダンの名は梵語を其儘之を漢字で音譯したものである。尙ほ此木は妙なことには自分の根で地中から養分を吸収する以外に、一部の根を他の植物(アカシヤ其他)の根に入れて、其れに寄生する特殊の生活をする半寄生植物に屬する。

世界中に知られなかつた野薔薇が見島村に産する

(萩文化昭和十三年十二月号)

普通の野イバラに似た白色の花をつけ香氣ある野生の薔薇には澤山の種類があり、對馬には同地特産のツシマノイバラ（學名ローサ、ツシメンシス）と呼ぶものがあり、蕨が地を這ふて小葉葉ミ特有の刺ミ花が有る。之に類似して稍々異なる植物が萩沖の見島村に産するが、素人目には類似品が多いので混同され易い。私は郷土附近の自然物の研究を終生の仕事とするので、豫て見島の自然物も同地の小學校先生と連絡を取り研究中であつたが、此疑問の植物につきては、昨年來京大の理學部教授にして我國植物分類學の双壁として有名な小泉源一博士に鑑定を依頼して置いたが、仲々抄取らないので、今春上京の際東大の理學部教授で本邦植物分類學の双壁であり、現に小石川東大附屬植物園長である中井猛之進博士に面會し、話の序に此のバラのこゝを話したところツシマノイバラは自分が研究發表したもの故、それであるか否かは直に判る、早速實物が見た（一）このことで、歸萩後花をつけた一枝を送つた所、之は從來學界に知られなかつたものであるから、新種として發表したい。和名は見島ノイバラとし學名即ち世界共通の名は「ローサ、ミシメンシス」と命名したいとの返事が來ました其後標本を製作するため、尙ほ學界に發表するには豊富な材料が必要なので、小澤山に寄贈を望むとの依頼狀が來ました。これで隠れたる一植物が明るみに出て新植物が一つ殖えたこととなります。（萩文化昭和十四年十月号）

世界的にも稀なる林相を有する志都岐山

指月山にはホルトノキ其他熱帯植物を初めキョウラン、ハマセンダン、カ、ツガユ、チトセカヅラ、などの珍植物を取り交せて約百種類の植物があり、そのうちには老樹が鬱蒼として宛然原始林状態を保ち、林相の美しい點は世界的にも珍らしいこと、本間靜六林學博士も學術資料として貴重であること折紙を附けた程である、目下萩市から天然記念物としての申請をして居るが、尤ものことである。（防長日報昭和九年十一月十八日）

笠山と指月山

はなして 田中市郎  
さきで 田中助一

笠山と指月山とは歴史の方から見ても又博物學の方から見ても種々語るべきことが多いと思ひますが、今日は先生が博物學の方面から永年に亘つて御觀察になりましたことを、極くわかりやすく御話願ひたいと存じます。

（一）笠山が噴火で出來たことは誰も知つてゐますが指月山はどうでしょう。  
どちらも地下の灼熱せる熔岩の冷却して出來たものだが笠山はそれが地上に噴出して後冷却したものです。そうして指月山の方は地表面に出ずに地下の深い所で冷えて出來

たもの、所謂深成岩に屬するものです。

（二）どうしてそれが判りますか。  
それは指月山の方は其岩の成立ちが極めて派手で、粗粒ばかりから出來てゐる。詳しく云ふならば元來岩石と云ふものは大抵數種の鑛の集りであるが、其各鑛物が肉眼でも知れる程の大粒ばかりから出來てゐる。

此有様は熔岩が地下の深所で極めて徐々に冷え、各鑛物が實際結晶した証據で、結晶が比較的良く且つ大粒である。結晶の出來る法則として徐々に結晶すればする程大且つ完全である。あれが地表で固つた岩ならばあんな調子にはゆかぬ。

（三）深所の岩がどうしてあの山になりますか。

それは其上にあつた厚い岩は永い永い年月の間に漸次風化崩壊されて削り去られ、又他の一大原因としては土地の隆起して高まつたことである世界最高のヒマラヤ山でも、其他アルプスの山からでも、深海生物の化石の出たのは有名なことで、嘗ては海底であつたことを証するもので、所謂滄桑の變は現今の地球が出來上る以前に幾回も繰返されたことでありませう。

（四）岩の質はどう違ひますか。

笠山の方は、萩の沖合に散在する六島や見島其他鶴江臺や中の臺や狐島等と共に玄武岩と呼ぶ有名な岩に屬する。就中石英玄武岩と呼ぶ世界中に類ひ稀な特殊な岩である。

それは普通の玄武岩には其中に石英と呼ぶ鑛物を含まぬことが常例とされてゐるが、此山のは石英を多量に含む型破りなので、學界でも珍重がられ、私は嘗て京大の岩石學者の教授に此岩を示し、大變珍らしがられて所望されたことがある。

指月山の方は全部花崗岩（一名御影石）であります。此岩は瀬戸内海に広く分布し、有名な嚴島も此岩から出來て居ります。

（五）さちらが先に出來たものですか。

我國の花崗岩の大部は地質時代（前世界）の中生代の中頃のものと云はれるが、笠山は富士山や阿蘇山等と共に其後の新生代の第三紀の終りの噴出ミ云ふから、一は非常に古く、他は比較的新しいものである。それにしても地球發達の歴史から云ふて新しいので、數萬年以上の古いものには相違あるまい。尤も指月山が山として露出するにも非常の年月を要したことでせう。

（六）笠山と指月山とでどちらが植物が多いですか。

それは比較にならぬ程笠山の方が多し。約一倍もありませう。指月山の方は鬱蒼としては居るけれども種類は約百位のものと思ひます。

（七）笠山には熱帯性植物が多いとのことですが何種位ありますか。又寒地性のもも混じてゐるものごですかそれがどんなものですか。

暖性のものは二十種餘りあります。

寒性のものとしては東北地方が主なる産地である「コタニワタリ」ミ呼ぶ羊齒(シダ)が諸所に局在し、又顕花植物の「シバナ」と呼ぶ一尺位の草が池沼地に群生する「こみ」などは頗る注目に値する。

(八)先生が 攝政宮殿下に御説明なさいました植物は何々でしたか。

「自生橋」(天然記念物)。「カ、ツガユ」。「ハマセンダン」。「ホルトノキ」。「サカキカヅラ」。「カギカヅラ」。「ナシカヅラ」(方言ビコトト)。「フウトーカヅラ」。「タイミンタチバナ」。「タマシダ」。「クルマバアカネ」。「コタニワタリ」。「シバナ」。「十三種の暖性及寒性植物」を、外に此山を構成する特異の岩、即ち「石英玄武岩」とでありました。その時に殿下は、「カ、ツガユ」の果實「サカキカヅラ」の異様な種子には特に御手を御觸れになりました。

(九)指月山にも熱帯性植物がありますか。

それはあります。笠山で最も熱帯性である「カ、ツガユ」を始め、「ハマセンダン」の大喬木の數々、「ホルトノキ」其他少々あります。

(十)笠山には特殊の珍植物が豊富なことは周知のことですが、指月山にも此附近で見られぬ特殊のものがありますか。

マチン科の植物「チトセカヅラ」、ガ、イモ科の「鬼女蘭」

りて原形が保たれたのであらう。現時の笠山の如くに越ヶ濱部落民が自給自足で開墾に着手し、農作地ニ化しては不便の箇所のみ取残され、昔日の面影は日を逐ふて消え行くであらう。(萩文化昭和十六年七月号)

### 二拾種に近い萩の歸化植物

外國産の植物が何時の間にか種々の媒介で運ばれ、一見土着の野生植物の様相を呈するものが所謂歸化植物である明治時代には、萩附近には之が僅か數種に過ぎなかつた、中等校の教科書に載つてゐる數種の例でさへ其一部は旅行して始めて見たこともある位であつた。然るに何時の間にか漸次其數を増加し、嘗て遠隔の地で始めて見たやうなものが多い。入り込んで、吾々に少なからず注目を惹いた。中には、平地でなくて笠山の頂上近くや、或は南明寺山の山腹なごに夥しく繁茂せるものさへある。就中古くから到る所の原野路傍に、全國的に多い雜草は、アレチノギクやヒメムカシヨモギで、之には維新草鉄道草の異名もある位である。オランダゲンゲ(一名シロツメクサ)は和蘭から荷物の詰(ツメ)に用ひて來たので、ツメクサの名があるとも云はれ、之は俗にクローバーで知れ渡つてゐるが、豆の類で蛋白質にも富み、牧草としてよく又砂止めにも有効である。比較的遅く來たもので、諸所の橙畑や垣根時には石垣の間まで占領して觀賞に値する美花を開くものに、紫カタバミ云ふのがあつた。近所の草取り女などはマメク

ミ呼ぶ蔓草がありますが、此二つは此山のみのもので四五里以内では決して他では見られぬものです。

(十一)何故笠山には熱帯性植物が多いのですか。

これにつきましては色々の説明を與へる人がありますが、私にはこう説明するのが穩當だと思ひます。それは元來阿武大津の海岸も、九州の沿岸も、植物の分佈状態を見ると餘り變りはない。笠山や指月山の海岸に群生する「ハマビハ」樟科植物でビハの類ではない)ミ呼ぶ樹なごは、鹿兒島邊の海岸にも同様に群生し居り、私は嘗てあの地方を旅行したことがあるが、九州の南部云ふのに其景觀の變化なきに驚いたことがある。又薩南の志布志(シブシ)邊の海濱には、亞熱帶風景で有名な「ハマユウ」(一名ハマオモト)の群落が見られ、白花の花盛りは「濱木綿」の異名さへ起る程であるが、大津郡の海濱にも其群落がある。又熱帯植物が豊富で有名な宮崎縣の青島の周圍一帶は、「ダンチク」ミ呼ぶ葦に似た植物で取り巻かれて居るが、萩の前小畑の濱にもこの小群落がある。更に三見村の驛附近から國民學校近くにはその大群落が見られる。指月山に似た植物があるのも當然だ。

要するに笠山は面積の稍々広大なもの、位置の偏僻なところ、今一つは萩城の鬼門に當るので、毛利藩が態々惡魔除りの猿を放つて此山を保護するなど、久しく之に手をつけるものがなかつたこゝが主なる原因で、よく久しきに亘

サミ呼んで、憐いたり又はわざ／＼大河に流す。それは一度此草に見舞はれたら最後、其特異の繁殖力で之が除盡は仲々骨折で、比類なき雜草中の嫌はれ者である。それか云つて、中には野草食とし推奨したいオランダガラシ云ふものもある。之は樺の大谷暖や、樺東の無田ヶ原、舟津附近の水田や小溝に夥しく繁り、時には河水の流れを妨害する程大量ある所もある。數日前大阪の某新聞に「野草を食へませう」と云ふ大々的見出しで食用野草を載せたが此草も筆頭近く挙げられてあつた。余は屢々此草を紹介したことがある。次に比較的多數見られるものを列擧するに次の通りである。

アレチノギク、ヒメムカシヨモギ、ヒメジョン、ノボロギク、ノヂサ、マツヨイグサ、シロツメクサ、マンテマ、オホイヌノフグリ、タチイヌノフグリ、ヒメスイバ、アヲビユ、ムラサキカタバミ、オランダガラシ、チギナタガヤ、等外二、三種あれは小區域なれば略す。

(萩文化和十九年四月号)

### 「救饑提要」食物略解

過日山本氏から救饑提要中の食物に就て、略解を求められたので、左に記す。但し説明不用のもの、萩地方に少きもの、何物を指すか判断に苦しむものを省いた。

一は、きよのは、俗稱ホーキダサ、園圃に栽培し、草蓆に作るが食用に供せらる。

- 一野ひる 方言ヒルナ、根がラツキヨウに似る、路傍畑地に多き雑草で、營養價も多く、葱「ヒトモジ」の代用品として妙。
- 一すぎな 其花に相當する土筆（ツクシ）は夙に色々に調理して食す。
- 一りようぼうのは 幹は炭の原料として可なり有名なり、食用に供せらる。
- 一おほきばのは アヲキとも稱す、箸の材で有名なり、山地の陰地や庭園にもある、試食するもよからう。
- 一だらのめ 恐ろしき棘多き植物故昔は節分に悪魔除けに用ひた、食用に供する地方多し。
- 一くこの葉 山野路傍に多き灌木で、唐辛に似た紅色の實（味ホ、ツキの如き）を結ぶ、漢方で種子を強壯藥とせるもの、食用となる。
- 一濱ぢさ 海濱にあるもの（倉江の濱など）なるが萩附近には多からず、本名ツルナニ呼び、民間では胃痛の妙藥と唱へられたことあるも疑はし、往々畑地にも栽培す、良き蔬菜である。
- 一いたどり 山野路傍に多き草、イタヅリミ呼ぶ地方もある、春地上に筍の如く出る稍々酸味がある莖を子供の徒食する地方あり、利用を望む。
- 一いのこづち フシダカの別名がある、果實がよく衣類に付着するので知られる漢藥のゴシツ（牛膝）は其根である

- 一試食するもよし。
- 一おぼこ 利用をすゝめる。
- 一つわ 利用をすゝめる。
- 一くわんぞう 山野に普通なるものはヤブカンゾーと呼ぶもの、新芽の出たのを萩の川島ではタケナミ稱し、食用になすものあり。
- 一くすのはね 根の澱粉は眞正の葛粉であるが、此植物を方言でカニバカヅラと呼び、クヅと知らぬもの多し、葉を試食するも可なりと思ふ、牛馬は嗜食す。
- 一ゆきのした 方言キンギンサウ、山間の溪谷や、庭園の濕地にもある、食用となる。
- 一山ごぼうの葉 根は古來商陸ミ呼び、利尿劑とされ、民間でもハレ病に広く用いられたが、有毒植物なれば警戒を要する、尤も其葉は食用としてよろし。
- 一けんげ 方言レンゲ仲間のウマゴヤシも食用となるから食するも可。
- 一ふぢのは 若葉は食して可なり。
- 一すいは スイスイバ又はスカンボ、其葉の酸味を味ふ、周知のもの。
- 一ぎぼうし 若葉は食用となる。
- 一もめらの根（方言ウシモメラ、キツネバナ、）別名多し、ヒガンバナ、シタマガリ、マンジュユシヤケ等、水仙の根に似た根は有毒なれど、晒せば其澱粉は食用となる

- 一かたぎの實 カタギ、ナラ、クヌギ等の類似の果實は澱粉に富む故晒して澱味を去れば皆食用となる。
- 一からすうり 根の澱粉は古來藥用とされた、食用にもなる。
- 一さゝのみ 古來米酢代用として食す。
- 一たにし 利用をすゝめる。
- 一つがに 大に利用をすゝむ。
- 一とまのけ 本名カヤモノリ、漁村ではトマノケと呼び、菰の上で乾して食ふ、麥稈の形に似た海藻。
- 一かぢめ 他地方ではアラメと呼ぶ、刻んで乾したものがクロメであるから大に利用すべし。
- 一あをさ 萩の海に普通にあるものはアナアヲサミ呼ぶもので、下等品なれど、食用に供せらる。ピトヘグサと呼ぶアヲサは上等品で紫色に着色して海苔の罐詰の原料とする。
- 一あじも 一名アマモで、後小畑の潟には多産す、根元に近く花が咲く高等顕花植物なれど、海藻と誤るものである、根元が甘いので、子供が嗜む地方あり、試食を望む
- 一ぎしぎしのは 小溝の邊及路傍に多きもの、根はタムシノ薬とするもので有名なが、葉柄は食用とする人多し。
- 一あざみの葉、根 若き葉は食用となる、根は牛蒡に似てゐる、食用とならぬこゝはある。
- 一ところ 形状は山芋に酷似し、山芋の生へる所にあるも

ので、芋に苦味あれど食用となる、葉の形や付き方少し異なる。

一るり 方言ヅリ、百合の一種ウバユリで、其澱粉を山間ものは眞物のカタクリ粉と唱へ賞用す。

一ほうくりの根 ホークリ蘭又春蘭で、根は古來藥用としたが、食用にもなるであらう。

（萩文化昭和十七年三月号）

**誤認される萩地方の俗説**

萩地方並に他府縣でも可なり廣範圍に亘りて古來無學のもののは勿論のこと智識階級のものでも、誤認する俗説が往々あるのを見受ける。生物に関する事項の數種につき簡單に述べよう。

一、ナマコと藻

何で縛りても其重さで柔軟な體は切れる、藻の成分と何等かの關係がありはしないかと思はれたこともあつたが全く無關係である。新鮮なナマコなら藻を振りかけて實驗したこともあるが、皮も剥げぬ位で決して溶けるものではない。

一、月夜の蟹には肉が無い

嘗て満月の日に二つの蟹を得、實驗したが一は肥えて中々重かつたが、他は軽くて大變疥せてゐた、其後度々實驗したが此説には首肯できぬ。要するに肉量の乏しき原因は脱皮後一時静止して活動せぬため、攝食不能に陥る

ためである。

一、ヒチブ(ヤモリ)に咬まれると猛毒を受ける  
昆蟲を常食とする等有益動物で少しの毒もなく保護すべきもの。

一、象牙には竹が禁物、甚しきは竹箴の中に持ち込んでも云々。象牙のサシの中に竹製の煙管を容れたり、竹の柄の先に象牙のヘラを附けて、無難であるこゝを知らずミ納得出来る。

一、蛇が章魚に化する  
錯覺に過ぎぬ、あの章魚は紫ダコの雌で夏期産卵する。

一、タナゴは口から胎児を産む

一、ハミ(マムシ)の胎児は親の腹を噛み切りて出る  
共に他動物ミ變りなし

一、ミ、ズが鳴く

有害昆虫クラの鳴くので、鳴くのを見つけたところもある

一、ノケダ(ヂムシ)が蟬になる

蟬の幼虫は地中に永く棲息するがノケダとは違ふ、ノケダはカナブン類の種々の甲蟲コガネとなり、柿や、葡萄、茄、莖等の葉を蝕害する、萩の方言コガネ(サルハムシ)は小さくて之ではない。

一、蛇毒や鳥の糞りは猛毒にて警戒する

外觀が毒々しきのみで、全く無毒で食つても差支ない、ドリは鳥の肺臓である。

積りであつたのを、博物科に志望がへせられたこのこゝである。しかし先生が語學を好まれたことは、博物學研究に非常に幸ひであつたのである。

先生は明治三十八年五月萩中學校教諭なられ、昭和八年三月まで二十八年の長い間勤務せられ、數千の生徒より「イチーサ」のニックネームをもつて敬愛せられた。そして萩中學校の校實的存在として内外の信望頗る厚かつたのである。先生の講義は一般の教師のやうに教科書中心主義の無味乾燥なものではなく、實物教育であつて、まづ生徒に充分觀察する時間をあたへ、然るのち豊富な參考資料を示説して、簡明に講義を行はれたもので、非常に理解しやすく、興味がわき、吾々は知らず知らずのうちに博物學の知識を得ることが出来たのである。

大正十五年五月に攝政宮殿下が中國地方行啓の途次萩にも御立寄あそばされ、こゝになつた。殿下はかねて生物學に深く興味を御持ちになつてゐるので、笠山の珍奇植物を台覽に供し奉るこゝとなり、先生がその御説明を申し上げた。「笠山は今までに見ないほど遠望かき、明神池の水はすみきり、魚への餌まき、及び植物の台覽には殊の外御満足あそばされ、御説明を熱心にお聴きいただいた」と先生はその直後感激に聲をふるはせながら人に語られた。そののち先生は昭和四年十月十八日閑院宮載仁親王殿下ならびに春仁王殿下が明神池に御來遊の際御説明、昭和八年八

一、茄の花にはアダ花は無い  
實驗すれば所々に雄花(アダ花)があつて結實せず、ポロリミ落ちる  
右の外色々あらうけれど此位にして措くことにする、要するに科學することが大切、然らざれば幾年経つても真相の判る時がない。  
(萩文化昭和十七年十月号)



### 田中市郎先生略歴

先生は明治十年八月十五日萩土原の農家中島勇一氏の三男として生れ、長じて隣接部落の川島田中家の養子となり、小學校を終へたのち、約一ヶ年萩學校にまなび、ついで山口縣師範學校に轉じて、明治三十四年三月に本科第三期生として卒業せられた。其後椿西小學校訓導なられたが、獨學によつて博物科の中等教員檢定試験に合格せられた、厚狭の徳基女學校の教諭となり、二ヶ年位在職せられた。後年先生の述懐せられたころによると、在學中より語學が好きであつたので、はじめは英語科の檢定をうける

月十九日澄宮(三笠宮)崇仁親王殿下が明神池ならびに笠山に御來遊の際にも御説明、昭和十五年五月十九日に朝香宮鳩彦王殿下が明神池ならびに笠山御來遊の際にも御説明申し上げられた。

昭和四年に、先生との間に三男一女をもうけられた夫人が逝去せられたので、昭和十年七月に親戚の藤村氏を後妻にむかへられ、同夫人の協力によつて、土原の藤村家の土地に住宅を新築して川島よりうつられ、また念願の博物館を同所に建設せられ、十二年十月三十日隣接せる土原公會堂で、盛大な落成式を舉行せられた。そのち田中博物館の名は遠近にきこえ、専門學者や、學童の參觀者でにぎはふやうになつた。一方先生は毎日早朝より萩魚市場に行つて、珍奇な魚類の發見につまめられ、珍らしいものが見つかると、學校に持参して先生や生徒に示説し、時にはお祭りの日に路傍において通行人に見せられたりした。先生の御熱心によつて珍奇標本はつきつき増加し、有志の寄贈もあり、さらに島津製作所よりいろいろ購入せられたので、博物館はいよいよ充實した。

風雪をいよはぬ異常な熱心さがたゞつたものか、先生は昭和二十一年一月四日に風邪を引かれて床に就かれるやうになつた。病狀がはかばかしくなく、衰弱がひどくなつたので、私がいろいろ御手當をし、一時起床せられるやうになつた時、先生は博物館將來の維持方法について深く考慮

せられた結果、萩市議員である令兄の子、中島恒一氏を介して標本を全部萩市に寄附せられることになった。こゝに於て市當局はその標本に從來あつた科學實驗室を附屬して、熊谷町双葉幼稚園跡を會場とし、科學博物館を設置することゝなつた。よつて病狀の輕快を幸ひに標本の整理をせられたので、其無理がたゞつて再び床につかれるやうになり、標本の大部分が移管したのを見て安心されたものか、生が一生の光榮記念日として居られた五月三十日に終に永眠せられたのである。行年七十、六月二日葬儀が椿町蓮正寺で盛大に執行せられ、遺骨は旧宅の前なる川島善福寺に葬られた。

先生が多年の學勤に對する敍勳、表彰は左の通りである。  
一、昭和二年六月三十日、從七位勳八等ニ敍シ瑞寶章ヲ授與セラル

一、昭和八年六月九日、勳七等ニ敍シ瑞寶章ヲ授與セラル  
一、昭和九年十月三十日、萩市教育會ヨリ特別教育功勞者トシテ表彰セラル

一、昭和十三年二月十一日、萩市長ヨリ教育功勞者トシテ表彰セラル

一、昭和十五年十月三十日、教育勅語換發五十年ノ佳辰ニ當リ、文部大臣ヨリ教育功勞者トシテ表彰セラル  
昭和二十五年十一月

田中助一 謹記

廣告

一、萩の陶磁器 山本勉彌著

萩文化叢書第一卷 A五版假綴八七頁

定價一五〇円送料六円 發賣所萩市東田町五八 白銀書店

一、萩電爭議實錄 山本勉彌著

A五版假綴七二頁 定價一〇〇円送料六円 發賣所同前

一、防長に於ける郡司一族の業績

山本勉彌河野通毅共著 A五版假綴一〇二頁 昭和十年

發行 改定價一〇〇円送料一二円

發行所 萩市西田町五一 藤川書店

豫告

一、萩の瓦 山本勉彌著

萩文化叢書第三卷 昭和二十六年四月發行豫定

正誤表

頁段	行	正	誤
七上	二〇	天狗の爪	天狗の爪
八下	五	レガレックス	レガリックス
一九上	三	愉快	愉快
二三下	四	美濃	美濃
三〇上	二	ある	める
三四下	一五	對島	對島
四二下	五	近づいて	近づいて
五二下	一六	書物	書本
五二下	二二	檜崎	猶崎
五四下	七	本多	本間

昭和二十五年十二月十日印刷  
昭和二十五年十二月十五日發行

定價 一〇〇圓

送料六圓

著者 故田中 市郎

編者 山本 勉彌

發行所 萩文化協會

印刷所 株式会社 萩響海館

發賣所 白石書店

山口縣萩市東田町五八番地

山口縣萩市御許町一三番地

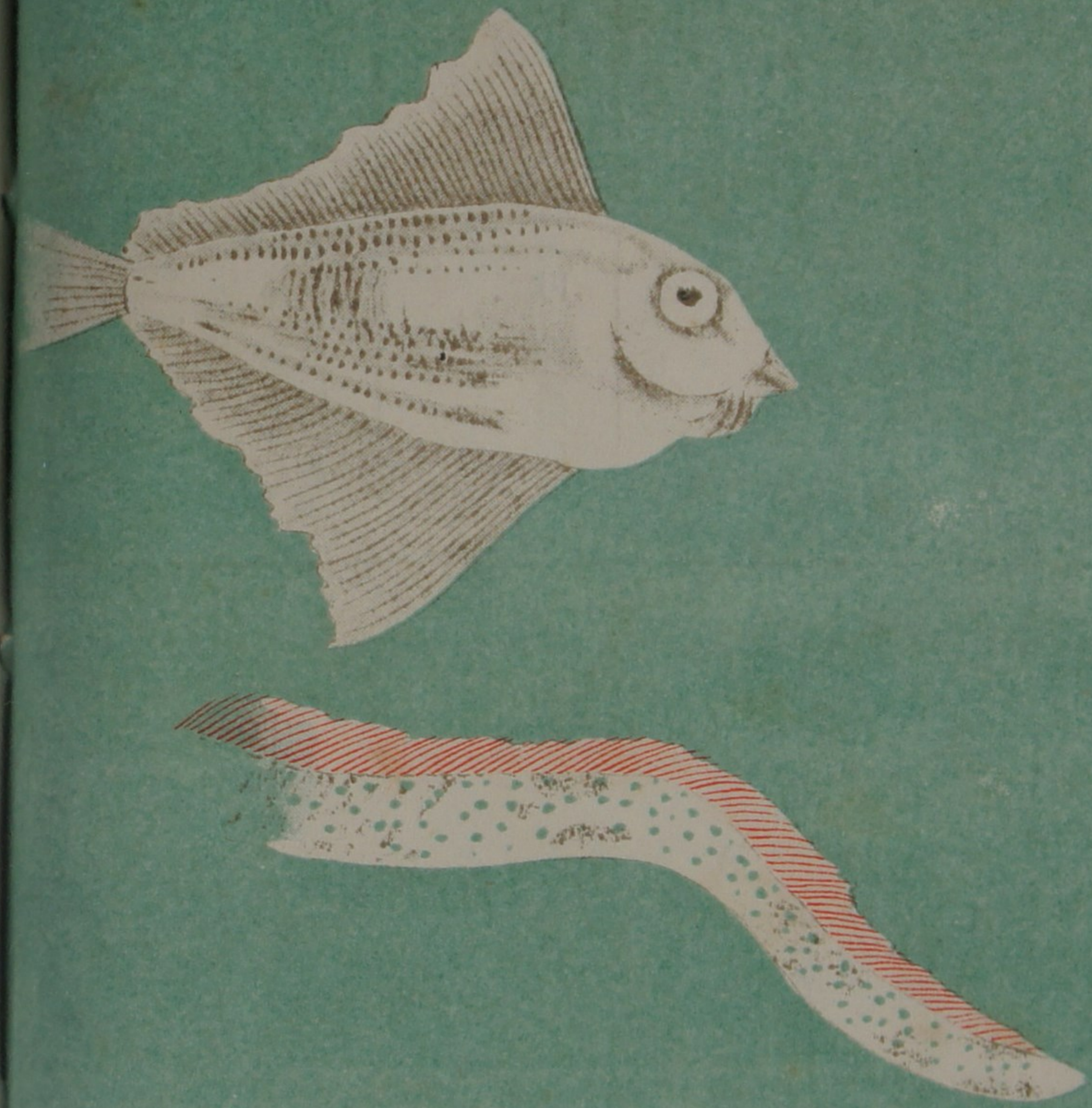
電話 八四番

振替 大阪三九三番

不無複 許斷製

12p 22cm

TRC102093



漢

漢



7  
A  
7

萩市立図書館  
111336228